食糞クリニックの食糞物語

雄スカ猫

この作品はR18描写を含むため、18歳未満の方は閲覧禁止です。

HinaProject Inc.

注意事項

このＰＤＦファイルは小説家になろうグループサイトで掲載中の作品をＰＤＦ化したものです。
このＰＤＦファイルおよび作品の取り扱いについては、小説家になろう利用規約が適用されます。そのため、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止いたします。作品の紹介や個人用途での印刷および保存にはご自由にお使いください。

【作品タイトル】
食糞クリニックの食糞物語

【Ｎコード】
Ｎ７４６６ＫＰ

【作者名】
雄スカ猫

【あらすじ】
女性のうんちを食べることに幸福を感じるミカ。パートナーの香里奈とともに食糞ライフを満喫するも、うんちが好きすぎるあまりに２人は食糞をこじらせ禁断症状になってしまう。これは、食糞が好きすぎて苦痛を感じてしまうようになった２人が再び、快楽を得ながら食糞をできるようになるために女性のための食糞専用クリニックに訪れ、様々なレズプレイを見たりされたりして、日々幸せな食糞ライフを送れるようになるためのお話。

第1話（前書き）

初投稿です。かなりの自己満足です。お目汚し失礼します。

第1話

私は２４歳の女性、ミカ。私が今いるこの場所は、とある特殊な性癖を拗らせた人が通うためのクリニックで、女性しか通うことが出来ません。女性の女性による女性のための特別なクリニック。私はそんなクリニックにレズビアンのパートナーである香里奈さんと共に不安と期待を胸に訪れています。

そもそも、私たちがそのクリニックに通うことを決めたのはとある性癖を拗らせ、依存症のような禁断症状のような症状に悩まされていたからです。それは、「グラマラスでむっちりしたデカ尻の美女を見ると、襲ってでもそのお尻をむき出しにし、アナルを舐めしゃぶり、ほじくってでもうんちを食べたくなる」という症状です。デカ尻美人を見るとアナルが丸見えになるようにお尻を鷲掴みにして尻肉をかき分けて、顔を埋めて舌をアナルにねじ込みたくなるんです。もっと言えば、アナルを刺激して便意を促し、アナルから直にうんちを食べたくなるという食糞欲求に本当に悩まされていました。

最近では、駅ですれ違った見知らぬ巨尻女性のお尻を見てるだけで、その場で襲いかかって、入浴前の蒸れ蒸れうんち臭のするお尻をむき出しにして舐めしゃぶりたくなる衝動が出てくるようになり、精神的に限界でした。そんな私の後を追うようにパートナーの香里奈さんも発症してしまい、私たちは絶望したのでした。

元々、レズビアンな私は、女性のむっちりしたお尻が大好きで、ＳＮＳで知り合えたレズ女性がナイスボディのデカ尻さんだとわかった瞬間に嬉ションしていたくらいです。アナルもデザート感覚でいつも舐めていました。それくらい大のアナル好きでもあります。そ

んな私が食糞に目覚めたのは、うんちを少しおもらししていたセフレのアナルを入浴前に即舐めした時でした。

会って2回目位のセフレでした。ホテルで待ち合わせした際に、事前にトイレに入れず我慢していたそうです。そんなセフレがホテルについてすぐトイレに行きたいと行っていたのですが、うんち我慢しながらHするのも面白そうだよ?と私が制止して、渋々我慢してくれました。うんち我慢しながらも一緒にお風呂に入るために脱衣所で服を脱がしあってたのですが、パンツ1枚まで脱がせたところで、私はしゃがみセフレを後ろ向きにさせました。私の顔の前にプリプリのお尻を突き出させて、お尻の割れ目が思い切り開くように揉んでいたら、「ブリ」っと音が聞こえました。Tバックの隙間から茶色いうんちが出てきたことに事に気が付きました。私は驚きつつもドキドキしました。Tバックをそっと脱がして、突き出されたお尻に付いたうんちの中に茶色いアナルが見えました。うんちの臭いがして、嫌なはずなのに、突き出されたお尻が可愛くて、すごく美味しそうな、いい臭いに感じて自制できず勢いよくアナルを貪り、舐めすすってしまいました。むしろ苦さが美味しくて、出したてのうんちのべっとりした食感がたまらなく美味しかったです。舌で舐めとって口の中で、もにゅっと溶かして口いっぱいに拡がるうんちの臭いに興奮して、おまんこがビショビショに濡れたのを覚えています。私がアナルを貪るのに合わせて、驚いたようでしたが、彼女は刺激で便意を催し我慢できず、ブリブリとうんちを出してしまいました。それを私が美味しそうに食べたのち、うんちの着いたTバックまで舐めとっていた姿を見て、セフレは衝撃を受けたようです。その日以来、関係は終わってしまいました。

それからというもの、セフレを変えつつ、うんちがアナルに着いていたらラッキーという程度の気持ちで入浴前のアナルだけでも舐めさせてもらいながら、自分を誤魔化していました。そんな私ですが、

半年前についに巨尻美女の極太うんちをお腹いっぱい食べることが出来ました。そして、その人との同棲生活の中で本確的な食糞を経験したことで、今まで我慢していた反動もあり完全な食糞中毒になってしまったのでした。

うんちを食べさせてくれたのは2歳年上の巨尻美女で甘々なSっけのある香里奈さんでした。きっかけは香里奈さんにレズナンパされたことでした。あれは私がアダルトショップのスカトロ系グッズやアナルグッズが陳列されてるコーナーにいた時でした。その時に後ろから声をかけてきたのが香里奈さんでした。

「あなた、むっちりして可愛いお尻してるわね。ね〜、あなた、もし、私があなたのお尻に顔うずめてあなたのうんち食べたいって言ったら引いちゃう?」

かなりダイレクトなナンパで驚きましたが、私はその時「私にもあなたのうんち食べさせてくれますか?」とドキドキしながら返答したのを今でも覚えています。

そして、その場でスカトロトークをしました。お互いの性癖が深いレベルでマッチングしていただけでなく、お互いがお互いの好みの見た目だったので、その日の内にホテルに直行することになりました。

香里奈さんが運転して来ていた車に乗せてもらいホテルへ行くことになったのですが、車が置いてある駐車場まで行くと香里奈さんは車のドアを開けて死角を作りました。その死角を利用して、私のズボンとパンツを脱がし私のお尻を突き出させました。香里奈さんは自分もズボンと下着を下ろしてしゃがみこむと私のアナルをべろべろと舐めてくれたのでした。四方はコンクリートの壁に囲まれています。なのでギャラリーは当然居ないのですが、その大胆さと恥ずかしさに胸がキュンキュンしていました。そして、私は香里奈さん

に舐められてるアナルの気持ちよさに少しうんちが漏れてしまったのでした。香里奈さんはそれを口受けしただけでなく、香里奈さんもズボンとパンツを下ろしてアナルオナニーをしているようでした。私のアナルを舐めながらアナニーをして、その刺激でうんちをしていました。左手で自分のアナルをいじってうんちを受け止めて、顔は私のお尻に埋めてアナルを舐めながらうんちを口受けし、右手は私のおまんこをいじるのでした。

私も香里奈さんのお尻に顔を埋めてうんちを食べたかったのですが、香里奈さんの少し強引な責めに感じていてそれどころではありませんでした。香里奈さんは口受けした私のうんちを美味しそうに頬張ると、立ち上がって私を振り向かせて、左手にある香里奈さんのうんちを私の口へ入れてくれたのでした。２人とも車のドアの死角でお尻を隠しながら、うんちを食べ合い、キスしてうんちを混ぜ合いながら、パンツとズボンを下ろして丸出しのままのお尻の穴に指を入れあってアナルを責め合うのでした。そして、うんちでお尻が美味しくなってる状態のままズボンもパンツもあげずにお尻丸出しのまま車に乗りこみ、お互いにおまんこを刺激し合いながら、ホテルまで車で移動するのでした。香里奈さんは普段片手ハンドルで運転することが多いようで、もう片方の手でオナニーをしているそうです。なので、運転しながら私のおまんこを責めるのは朝飯前だったようです。

そして、うんちを食べ合ってすぐホテルへ直行しお腹に残ったうんちを出し切るまでうんちを食べ合ったのでした。この日、私は香里奈さんの女になりたいと伝え、その日のうちに同棲することになり、美味しい食糞生活が始まりました。

香里奈さんは黒髪のロングで胸もお尻も大きいのですが、お腹はしまっているのでグラマラスなビューティお姉様です。そんな綺麗な香里奈さんのうんちはとても美味しくてオトナのスイーツのように

ビターな味わいでおまんこを濡らす媚薬のようでした。

香里奈さんとの食糞生活が始まって、お互いに決めたルールがありました。

まず、第1は香里奈さんのお家の御手洗は使わないこと。だって、せっかく美味しいうんちを食べあったりおしっこを飲みあったり出来るのに、トイレに流したらもったいないので。そして、第2は出勤前で忙しくても、朝食の際にうんちが出そうな場合は、うんちを出して相手に食べさせてあげること。第3は仕事に行く際は、お互いのアナルを舐め合って行ってきますのキスをアナルにすること。第4は仕事中のおしっこはペットボトルに貯めて置いてうんちは我慢すること我慢できなかったらアナルプラグをすること。ペットボトルに貯めたおしっこは職場に持っていく保冷剤で保冷して持って帰り、お互い交換して飲み合うこと。第5は職場での昼食は菜食中心でうんちの品質を気にかけつつ、いっぱいうんちが出せるようにしっかり食べること。第6は仕事から帰ってきたら汗まみれで蒸れたアナルを入浴前に舐め合うこと。第7は夕食の際は1日我慢したうんちをいっぱい出して、主食やおかず、デザートとしてお互いのを食べること。これらをルールとして決めたのでした。基本朝食と夕食には毎回お互いのうんちを食べ合うことが出来ました。私たちは痩せの大食いです。しかも毎日快便。うんちをいっぱい出せる体質のようで、それがとても嬉しかったです。朝食と夕食が毎日の楽しみとなり、うんちを最高に美味しく食べる日々が訪れたのでした。

私たちは基本裸族で、2人で家にいる時は常時裸です。2人とも自分の趣味や好きなことをする時間をきちんと作っていました。そんな中でも、おまんこ舐めたくなったりアナル舐めたくなったら、フラフラっと舐めに行くことがほとんどでした。

毎朝のご飯はお互いがお互いのために早起きして準備し合っていました。私のうんちを香里奈さんが食べて、香里奈さんのうんちを私

が食べるからです。

うんちの食べ方は様々で、朝食の時は全裸のまま順番にテーブルの上に乗って、うんちはお皿に出し、おしっこはグラスに出し合うこともあれば、直に飲みあったり食べ合うこともあります。今は洗い物の手間を省くために直に食べるかバンズに乗せて挟んで食べるかです。直に食べるのも美味しいですがバンズに挟んで色々トッピングするのが最近の私たちの王道となっていたのでした。どんなときもおしっこ1滴、うんち一欠片無駄にしないため、必ずおしっこを最初に全部直飲みしてからうんちを出し合いました。そして、必ずお掃除クンニとアナル舐めをして入浴することなくパンツを履いてスーツを羽織り出勤するのでした。

私たちは仕事から帰ると必ず全裸になります。私たちは食事までお互いのおまんことアナルを舐めるのを我慢することが出来ないため、先に入浴という形で蒸れてうんち臭のするアナルを舐め合うのでした。香里奈さんは必ず入浴前になるとプチおもらしをしてアナル周囲をうんちまみれにしてくれます。全部出すと夕食に食べる分のうんちが無くなるので、プチです。ミートボール1個分です。ノーパンなので、間違えると落としてしまいます。ですが、そのプチおもらしで香里奈さんはうんちを床に落とすことなく尻肉で挟んでアナルをベトベト美味しくしてくれます　。そして、可愛くお尻を突き出してくれて、うんちチョコレートでベトベトにしたアナルを舐めさせてくれます。うんちやおしっこで美味しくなってるアナルやおまんこを「美味しい　？」って言いながらお尻をフリフリしてアナルをヒクヒクさせながら私の舌に塗りつけてくれるのです。美味しくないわけがありません　。私が仕事で香里奈さんが休みの日も、香里奈さんはうんちでお料理をして待っててくれます。その日はずっと裸エプロンで過ごしてくれて、うんちしたアナルも拭かないでいてくれます。私が入浴前の香里奈さんのお尻に顔を埋めると常に

うんちの臭いがしてウンカスをべっとりつけてくれています。そんなアナルを舐めた時とても美味しいって感じます。

基本的には朝食と夕食以外の食糞の際は顔面騎乗で口に極太うんちを出してくれます。「美味しい？いっぱい食べていいからね？後であなたのも食べたいから、いっぱい食べていっぱい出してね　？」って優しく言ってくれます。

たまにうんち2日間くらい我慢してホテルでいっぱい食糞セックスしようとなっても、ホテルに着くまでにわざとパンツにうんち漏らして「ミカちゃんにいっぱい食べて欲しくて、かなり我慢してたんだけど、直前で漏れちゃった。どう？美味しそうな臭いしてる？パンツずらして、食べていいよ？こぼさないようにね。」って言う興奮するシチュエーションを作ってくれます。そういう時は、人目のつかない路地裏などで人目を避けて立ちバック体勢で口に出してくれます。パンツに着いたうんちはデザート感覚で舐め取ります　。立ちバックで出されたうんちも美味しかったし、パンツにべっとり付いていたおもらしうんちも美味しかったです。どんどんと、うんちの魅力に取り憑かれていったのでした。

ガチなレズビアンな私ですが、実は同棲期間中に香里奈さんの影響もあり、別の性癖にも目覚めました。香里奈さんは可愛いニューハーフを飼っていて、香里奈さんの家の隣に住んでいました。香里奈さんとの同棲生活の中で、同棲を開始したその日に、美人ニューハーフの子が香里奈さんの部屋に来て、香里奈さんは手馴れた手つきで彼女のパンツスカートやパンツを下ろすと「美味しい　」って言いながらフェラしてごっくんまでしたのでした。その出来事でニューハーフを飼っていることを知りました。レズな私ですが、その子はすごく可愛かったのでおチンチンを舐めるのには抵抗はなかったです。手術をしていておっぱいもあり、完全な女性の外見でした。勃起前は口で、もにゅもにゅするのも可愛いくて美味しかったし、

勃起したら極太で長くなるので舐めごたえがありました。私もその子のおちんちんをしゃぶってザーメンを飲んでいるうちに可愛いオトコの娘や美人ニューハーフ限定ですが、おちんちんが好きになりました。もちろんフェラとかザーメンごっくんのみですが。もしおちんちんでセックスするなら、やっぱり女の子がいいのでふたなりっ子がいいなって思います。だから、うんちとおしっこだけも女性かふたなりっ子のがいいです。

香里奈さんはニューハーフの子（未来ちゃん）とHするのは抵抗はないみたいでした。香里奈さんと未来ちゃんのセックスでアナルにザーメン中出しされた後のうんちはザーメンと混ざりクリーミーで美味しかったです。３Pする時はよく香里奈さんのアナルから直にザーメンブレンドうんちを食べてました。できることなら、香里奈さんと一緒に可愛いオトコの娘のザーメンをジョッキにいっぱい入れて、可愛い巨尻美女をナンパしてお尻を調教して、香里奈さんと一緒にうんちをアナルから直食いしながらザーメンで乾杯したいくらいです。

美人ニューハーフ限定でザーメンにも目覚めた私でしたが、香里奈さんの美味しいうんちを食べ続けたせいか、香里奈さんのうんちだけでは満足出来ない体になってしまったのです。私はうんち欠乏症となってしまいました。それを自覚した日から私は、むっちりした巨尻の女の子を見かけただけで、その場で襲ってでもうんちを食べたくて食べたくて仕方なくなっていました。実際には理性で我慢しましたが、頭がおかしくなってしまいそうでした。浮気はしたくないけどうんち食べたい。そんな症状を香里奈さんに相談すると優しく抱きしめてくれて、一緒に解決していこうって言ってくれました。しばらく休職を2人でして、私は香里奈さんのアナルを２４時間舐め続けました。香里奈さんは普段以上に野菜中心のご飯を食べてくれて、うんちをいっぱい出して食べさせてくれました。そして、二

人で外出する際も路地裏でアナルを舐め合ってうんちを食べ合う生活が続きました。

香里奈さんも私のうんちを食べ続けた結果、うんち欠乏症になったのでした。「ミカ、私もうんち欠乏症になったかも、ミカのうんちが美味しすぎて我慢できなくなってる。お尻の可愛い女の子見ると襲ってでもうんち食べたいって思っちゃう。」

「香里奈さん、、」

「一緒に乗り越えていこう?2人で。うんちいっぱい食べ合えるように。」

「はい。」

そんなこんなで、私と香里奈さんがネットを色々探してると、とあるサイトを見つけました。それがこのクリニックの紹介でした。食糞中毒を発症した女性専用のクリニックとのことでした。今の私達には必要な治療なのかもしれない。そう思って、このクリニックに香里奈さんと来たのでした。

このクリニックにかかるための条件は、①うんちを数日間我慢して溜めてくること。②我慢できずうんちをしてしまったとしても、お尻を拭かないこと。また、入浴厳禁。(出してしまったうんちはきちんと食べること)③リモコンバイブをおまんこに入れて、常時刺激し来院時も刺激しておくこと。④ノーパンとミニスカートで来ること。⑤当日は当クリニックにて大量のうんちを食べていただくため食事はせず空腹状態で来ること。でした。

私と香里奈さんはクリニックにかかるために7日ほどはうんちを溜めました。普段からノーパンスカミニスカで過ごし、いつでもお互いにクンニやアナル舐めができるようにしていました。野菜もいっぱい食べて、健康的なうんちを目指しました。私と香里奈さんは普段快便なため、我慢することに慣れていないので、2人とも2日目

に少し出てしまいました。量としてはミートボール2つ分くらいでしょうか。ちょうどノーパンミニスカで2人でお買い物に来ていた時で、我慢できずデパートの人気のいない所へ移動し、お互いアナルに手を添えてうんちを受け止めると、周囲に人がいないことを確認しながらこっそりとうんちを食べたのでした。デパートの隅っこで香里奈さんのうんちを食べるというドキドキ感で、その日は一日中マン汁が溢れてしまい、香里奈さんが美味しいっていっぱい飲んでくれたのでした。

そして、クリニックに行くための準備を色々と頑張って行い、ついに当日を迎えました。

私と香里奈さんはこの日のための勝負服をお揃いで買っていたので、朝起きて直ぐに服を着るのでした。しばらく外に出ずに全裸で過ごすことも多かったので、服を着ることが新鮮に感じました。

私と香里奈さんはノーパンと定められていたため、ついでにノーブラにすることにしました。そして、勝負服である白いへそ出しワイシャツと、お尻の割れ目が普通に見えるレベルの超ミニスカートでヒラヒラするタイプを

着て、おまんこにコードレスのバイブを挿入し、クリニックへ向かう準備を完全に整えたのでした。

私と香里奈さんはうんちをいっぱい食べるため、うんちが出そうな欲求を抑え、入浴せず、お尻も拭かず、うんち臭いアナルが見えるのではないかと心配になるくらいの超ミニスカートを履いて、バイブで常時刺激してマン汁を垂らしながら電車を乗り継ぎました。お尻がほぼ丸見えかと思えるくらいの際どいミニスカートだったので、周囲の人もチラチラ見ていましたが、その視線でさらにマン汁が溢れてしまうのでした。

垂れたマン汁を処理するために途中下車してはトイレに2人で駆け

込み、お互いに啜りあって、ドキドキなシチュエーションの格別なマン汁を美味しく味わいながらも、確実にクリニックへと向かいました。クリニックの最寄りに着く頃にはある意味2人ともイキたすぎて我慢の限界でした。マン汁を舐めとる際にクリトリスも美味しくすすっていたので、何度もイキそうになっていました。でも、動けないくらいイッチャうとクリニックに行けないため2人で寸止めをしながらマン汁を啜りあっていました。なので、もっと飲みたいしもっと気持ちよくなりたいという感情を抑えるのに苦労したのでした。

そして、クリニックの近くまで来た時、ついに我慢の限界に達し、私も香里奈さんもおまんこが気持ちよくなりすぎたのもあり、うんちを我慢できなくなり少しだけですが、ミートボール状のうんちを1個漏らしてしまったのでした。それを二人で受け止め合い、地面に落とさないようにお尻で挟んで押し潰し、手でアナルに塗り込みあって、うんちがべっとりとアナルについてる状態で2人してクリニックに入ったのでした。

第1話（後書き）

誤字だったり、文章的におかしい所があるかもですが、ゆるく読んでもらえれば嬉しいです。

第2話（前書き）

こんなＡＶあったらいいな～っていう妄想です。

第2話

クリニックに入ると同時に私と香里奈さんはうんちを塗りつけた際に手に付いたうんちを舐め合って飢えを少し抑え、落ち着いたところで、クリニックの内部を見回すのでした。

クリニックは規模の大きいところで、中はとても綺麗でオシャレな空間となっていました。案内図もあり、見てみると4階建てのクリニックであることがわかりました。ざっくり見ると病室階の他、診察室、処置室、浴室、食堂などがあるようで、だいぶ規模が大きいということがわかりました。そして、うんちのいい臭いが充満してたり、女性の喘ぐ声が聞こえていたので、すぐに普通のクリニックでは無いことに気づきました。私は期待に胸を高鳴らせて、受付の方へ向かい、受付を済ませました。受付にいる2人のお姉さんもとても美人でした。このうんちの臭いを平気で嗅いでるってことは、受付のお姉さんも、やはりそういう性癖があるのでしょうか？
受付のお姉さんと事務的なやり取りをし終えると、私と香里奈さんは受付の近くの椅子の前で立ちながら待ちました。うんちべっとりとアナルに付いたまま座れないので。
ドキドキが早くなっていくのを感じながら受付近くで待っていると、名前が呼ばれました。すると綺麗な看護師さんが私の前に来て、優雅にしゃがみ込みました。
「本日は私、吉野美穂が担当させていただきます。本日はどのような症状でこられましたか？」
「えっと、その、、」
「大丈夫です。ここに来る方は皆さん同じような症状で悩んでる方ばかりですので、恥ずかしがらなくてもいいんですよ？」
そう言ってくれて私は安心して、吉野さんに私の性癖と、どうして

もうんちが食べたいことを打ち明け、問診表を記載するのでした。
「問診表の記載ありがとうございました。ふむふむ。むっちりした巨尻美女がお好きで、おもらししたうんちを食べたり、顔面騎乗で口に直接出してもらって食べるのが好きなんですね。お相手の香里奈さんのうんちだけでは足りなくて、3ヶ月も巨尻美女のうんちを襲ってでも食べたい欲求に苦しんだんですね。それはお辛かったですね。でも、もう大丈夫ですよ。ここには、良質のうんちを出せるように頑張っている巨尻の患者様たちやスタッフがいて、その方たちのうんちを好きなだけ食べることが出来ますから。私たち職員も患者様が美味しいうんちを出せるように様々なケアをする他、私たちのおしっこやうんちも好きなだけ召し上がっていただけるシステムになってますので。安心して今日からおなかいっぱいに美味しいうんちを食べてくださいね　。それと可愛いオトコの娘やニューハーフさんのザーメンも飲んだり食べたりするのが好きなんですね。残念ながらニューハーフやオトコの娘はいないのですが、3人ほど可愛いふたなりっ娘がいるので期待してください　。生物学上もきちんとした女性なんです。だから、ミカさんもこの子たちのザーメンを飲みながらこの子たちのうんちも食べれると思いますよ　？おちんちんもしゃぶりがいが出るように大きくさせてます。ザーメンも美味しいのがいっぱい出せるように調教してます。ザーメンを絞りながらマン汁も啜れてうんちも美味しいので、すごく人気なんです。私たちのドリンクバーかつスイーツ係として毎日働いてる子ですから、ミカさんもぜひおちんちんしゃぶってザーメン飲んでいってください。ただおすすめは彼女達のうんちにザーメンをぶっかけて食べるチョコレートバナナミルクが最高なんですよ　？ちなみにお二人共、美味しそうないい臭いがしてますが、もしや？」

そう言って、看護師さんは立ち上がり、私と香里奈さんの後ろに回ると再びしゃがみました。私と香里奈さんのアナルに顔を近ずけてスンスンと臭いを嗅いだ後、私たちのお尻を鷲掴みにしてアナルを

まじまじと確認したのでした。
「あら、やはり少し漏れちゃったのですね。うんちのべっとり具合からとても新鮮ですね。ついさっきですか？」
「はい、入口前で＾＾；」
「そうだったのですか。逆を言うとそこまで我慢して溜めてきてくださったということですね。私たちとしても嬉しいです。せっかくですので、私の方で検査させていただいてもいいですか？」
そう言って、吉野さんは私たちのおもらしうんちを美味しいと言いながら舐めとって綺麗にしてくれたのでした。
「あ～ん。レロレロ。ンクン　。お二人のうんち、とても美味しいです　。お互いに美味しく食べさせてあげたいって、頑張ったんだなって、感じられます　。もっと美味しくいい臭いのするうんちをいっぱい出せるように治療していきましょう　。」そう言って、私たちのアナルを堪能した吉野さんは立ち上がり私たちの前に回って背を向けると、私はある事実に驚き、ドキッとして生唾を飲み込んでしまいました。

吉野さんの服は前から見るとタイトなスカートのように見えたのですが、後ろからはお尻が丸出しになる形状となっており、さらにノーパンでした。それだけでも驚きなのに、ややお尻の割れ目付近が茶色くなっていました　。私を誘導するように先へ進む吉野さんは受付に立ち寄り、「夕美さんお願いします。」と言って問診票を受付のお姉さんに渡しました。その問診票を読んだ受付のお姉さんの1人こと、夕美さんは私を見てニコッと微笑むと、受付から出て来て私と香里奈さんの方へ近付いてきました。夕美さんは私に、このクリニックの診察券を渡すと、私と香里奈さんの肩にそっと手を置いて、私たちをゆっくりとしゃがませました。そして、「ミカさんと香里奈さん、これから処置室に向かっていただきますが、その前に私のアナルを舐めて行っていただきます　。私は受付で、極太アナルバイブ付きの椅子に常時座ってますからいつでも極太うんちが

出せるんです。ちょうど今いっぱい出そうなので、うんちもいかがですか?」と言いながら、私たちにお尻を向けると拡張されてヒクヒクして、うんちが今にも出そうなアナルを見せつけるようにお尻をフリフリしながら私たちに突き出してくれたのでした。やはり特殊なクリニックなだけあって、夕美さんもアナルやうんち好きだったようです。そして、夕美さんの突き出されたお尻を見て私は嬉ションをしてしまったのでした。生唾を飲んで、私は夕美さんのアナルに舌を伸ばし、うんちの香りと苦味を感じ、あまりもの美味しさにむしゃぶりつこうと口を大きく開けた瞬間に

「ミカ、どうしよう、、夕美さんのお尻がむっちりしてて素敵で、アナルがクパァってしながらヒクヒクしてるからうんちも少し見えててすごく美味しそう。私も一緒に舐めてうんちも食べてもいい?」

香里奈さんはそういって、私の顔の前に突き出された夕美さんの美味しいお尻に顔を近づけると、私に「一緒に夕美さんのうんち食べよう 」と言ってくれたため、2人で仲良くアナルを舐めてうんちを舌でほじくり食べ合うために舐め啜るのでした。

第2話（後書き）

お目汚し失礼致しました。

第3話（前書き）

ＡＶ監督がこんなＡＶを作ってくれないだろうか

第3話

そんな様子を見ていた吉野さんは夕美さんのうんちを食べようと頑張っている私と香里奈さんの後ろに回り込んでしゃがむと、私たちのおまんこをねっとりと触りながら言いました。

「お二人共にいいマン汁が出てますね　。ぺろぺろ。美味しい　。それと、この後、私や他の患者様のうんちも食べられますので、お腹いっぱいになりすぎないでくださいね　。お腹いっぱいになっても頑張っていっぱい食べてくださいよ　？私も今少しうんちがでそうですからね　。私のも食べてくださいね　？」

その言葉にドキドキして吉野さんを見ると、吉野さんも私達の前に回ってきて、私たちにお尻を向けて、お尻を突き出してくれました。2人の美味しそうなむっちりデカ尻を舐め啜り、うんちを食べることができると思うと、私と香里奈さんは揃ってマン汁をダラダラ垂らすのでした。

私と香里奈さんは交互に夕美さんと吉野さんのアナルを舐め啜り、マン汁を垂れ流すのでした。

2人のお尻の穴はうんちが少し漏れた形跡が元々あり、うんカスがいっぱい着いていました。茶色くなって、チョコレートと思える美味しそうなうんカスは正しく美味しそうな臭いがしてて、ますます美味しそうに見える茶色いアナルでした。少し漏れたそのうんカスを、お尻に顔を埋めて、舐めとり、うんちが出てくるのを2人で今か今かと待つのでした。私達が2人のアナルを舐めてると次第に夕美さんのアナルからウン汁が垂れてきました。それを香里奈さんと2人で啜るとうんちがもう出てきかけていることを感じ取り、アナルに口を押し付けて、直にうんちを食べたくて仕方なくなったのでした。私はうんちのいい香りがする夕美さんのむっちりしたデカ尻

アナルに舌を押し込み、うんちを舌で掻き出そうとうねうねと動かし、便意を促すと、夕美さんもそれを感じ取ったのか「う～ん、、ミカさん、、お口開けててね、、ふん、、ブリュブリュ～。」と踏ん張ってうんちを出してくれたのでした。私は口を押し付けてうんちを受け止めましたが、やはり入り切らないほどに大量の極太うんちでした。私が口受けして、口からはみ出してきたうんちを香里奈さんがこぼさないように口受けしてくれたのでした。

私と香里奈さんの口内には夕美さんの極太うんちが口内の許容限界を超えるほど入っていました。私達はそのボリューム感を感じると2人で「ふふ」と笑い合い、「おいひい　」と言い合いながらゆっくりともぐもぐしてキスし合って共有しながら飲み込むのでした。

私は夕美さんの極太うんちが美味しくて、おかわりをしたくなり、夕美さんのアナルをお掃除しました。レロレロジュルジュルとしてうんちの一欠片も逃さないという執念で舐め啜るのでした。夕美さんが「ミカさんありがとうございました。」そう言って、私の口からアナルが離れていきました。私は、アナルをもっと舐めれたい、うんちをもっと食べたいという衝動が強くなり、ふと夕美さんのうんちとは異なるうんち臭を感じ、吉野さんを見ると、私たちにお尻を向けてアナルをヒクヒクさせてうんちを頑張って出そうとしてくれていました。少しうんちの頭が見えているようでした。私と香里奈さんは吉野さんのお尻に吸い付くように顔を近付けるとアナルに舌を伸ばし、アナルを舌でほじくり、ウン汁を舐め啜りながら、2人でうんちを舌で掻き出すのでした。

「ミカさん、うんち出そうです＾＾；。口をいっぱい開けて押し付けてください。行きますよ＾＾；？ブリュブリブリ～。ブブブ。」

私が吉野さんのアナルを舐めながらうんちを舌で掻き出して食べるのに夢中になっていると、香里奈さんは途中で夕美さんに呼ばれ離れていきました。香里奈さんは夕美さんと私の事を色々話していたようでした。そして、香里奈さんも問診票を記載しました。香里奈さんは

その場で香里奈さんのおまんこをいじり始めるのでした。

第3話（後書き）

そんなことを思いながら日々過ごしています。

第４話（前書き）

辻褄が合わない内容もあるかもです。あれもこれもと加筆していたので。

第４話

香里奈さんの様子をうかがいつつも、吉野さんが私の口に出してくれたうんちをもにゅもにゅと咀嚼し飲み込んでいきました。そして吉野さんの美味しいうんちを食べ終えた私。吉野さんも私の口からお尻を離していきました。うんちを食べれた満足感を感じつつ、もっとお尻の穴を舐め回したい気持ちから、私は夕美さんと吉野さんのお尻を思い出しながらオマンコをビショビショにさせてオナニーを始めるのでした。私からお尻を離した吉野さんはすぐに立ち上がると、別の看護師さんに責められてる香里奈さんの元へ行き、香里奈さんの問診票を見ながら香里奈さんとお話を始めました。お話をしながらも香里奈さんは責められており、吉野さんは別の看護師さんに指示をして香里奈さんを中腰にさせてお尻を突き出させると、香里奈さんのアナルに指を入れてズブズブしました。香里奈さんのアナルの美味しさをまとった指を抜き取って吉野さんは指を舐めとりました。そして、香里奈さんのお尻を鷲掴みにするとアナルをむき出しにして、香里奈さんのアナルを舐めしゃぶり、「香里奈さんのアナル、、、美味しいですね　。香里奈さんもアナル拡張して太りにくい体質への改善を行えば、いっぱい美味しいうんち出せる雌豚さんになれそうですね　。香里奈さんはミカさんのために美味しいうんちをいっぱい出せるようになることと、マン汁ジュースをいっぱい作れる体質改善をしたいとのことですね。ミカさんもそのように希望されていましたから相思相愛で羨ましいです。お二人共、お互いのためのうんちとマン汁製造機になれるように調教治療を行って行きましょう　。またクリトリスをデカクリにしてミカさんにしゃぶらせてあげたいとのことですので、いっぱい吸引を施しますので、頑張ってくだあださいね　」そう言うと、さらにジュルジュルと音を立てながら香里奈さんのアナルを啜るのでした。私は香里

奈さんも私のためにうんちをいっぱい出せるようになりたいと思っていたこと、クリトリスをデカクリにして私にしゃぶらせようとしてくれたことを知り、その思いやりや優しさにさらにオマンコがジュルジュルになったため、自分でフィストファックをしてオマンコを慰めるのでした。

香里奈さんのアナルを美味しそうに舐めている吉野さん姿を見て、やや嫉妬心を感じながらも最高にマン汁が溢れてきました。もっと気持ちよくなりたくて、オマンコをぐちょぐちょにさせてフィストしていた私の前に、もう1人の受付のお姉さんが近付いてきて、私の顔の前にお尻を突き出して来ました。「ミカさん、吉野さんや夕美さんばかりずるいです。私もアナル拡張頑張ってるんですよ?私たち受付嬢はアナルとおまんこを同時に拡張できる極太ディルド付きの椅子に座ってるんです　。だからアナルが凄く拡がって極太のうんちが出せるんですよ　。私のアナルもいっぱい舐めてください。調度良い具合に直腸までうんちが来てますから、アナルに舌を入れて中をほじくって食べてください＾＾；。もう漏れちゃいそうなんです＾＾；。ミカさんがベロでアナルほじくってくれたら、その刺激でうんちがいっぱい出ると思いますから　。」そのように別の受付のお姉さんが言うと、私の顔の前にお尻を勢いよく突き出してくれました。おならが「ブリュブリュ～」っとして、美味しそうな香りを充満すると、おならの余韻を楽しむ余裕を与えないと言わんばかりに、極太のうんちがムリムリと音を立てて出てきました。私は美味しそうな臭いと太くて美味しそうなバナナうんちに抗えず、その受付のお姉さんのアナルに口を押し付けてうんちを口いっぱいに頬張りながら、うんちが出続けるアナルに舌をねじ込み、うんちがさらにいっぱい出るように刺激をするのでした。

第４話（後書き）

自分でも読み返しつつ修正を今後していく予定です。

第5話（前書き）

色々妄想を加筆修正をして言っている分、話の流れが合わないところがあるかもですが、初心者なのですみません。

第5話

そんな私の様子を見ていた吉野さんは香里奈さんのアナル舐めを中断して「優香さんの拡がったアナルから出るうんちは当職員と患者さんからとても人気なんですよ　？いっぱい出ますから、口から溢れちゃうと思うので、私が受け皿になりますね　？1度失礼します。じゃー、優香さん、間に入っていいかしら？」

「ええ、吉野さんお願いします。」そう言って、吉野さんは香里奈さんの元から私の元へ戻ってきました。すると香里奈さんは一緒にいた看護師さんに指示されたのか仰向けに横になりました。すると、その看護師さんは香里奈さんの顔に跨ると、「香里奈さんもお腹すいたでしょ？美味しいうんちいっぱい出してあげるから、残さず食べていいからね　？」と言い、香里奈さんの口にうんちを出し、香里奈さんは「美味しい　」と言いながら食べ始めるのでした。

吉野さんが私の目の前まで来ると、私の口から優香さんのお尻が離れていきました。まだうんちがいっぱい出そうな優香さんの美味しいお尻が口から離れてしまい、私は切なくて泣きそうになりました。そんな表情を感じ取ったのか、吉野さんは「ミカさん、大丈夫ですよ　。さっきよりずっと優香さんのアナルが美味しくなりますから　。ミカさん、私が横になったら、私の顔に股がってください。おまんこを私の口に押し付けてくださいね？そしたら私をマングリ返しさせて私のおまんこをミカさんの顔に近づけてください。私のオマンコとアナルが優香さんのうんちの受け皿になりますから、溢れたうんちは私のオマンコとアナルに塗りつけて、いっぱい舐めて食べてくださいね　。」そう言って吉野さんは横になると、優香さんは私を吉野さんの顔前に誘導し、スカートをまくり上げて跨ぎやすいようにしてくれたのでした。私が吉野さんの顔に跨り、しゃがむと、優香さんは吉野さんのお尻を起こして、私の顔の前にアナルが

来るように整えてくれました。私は吉野さんのお尻を抱えておまんことアナルを啜りました。優香さんのうんちが待てなくて仕方がなかったです。私がジュルジュル音を立てて吉野さんのマン汁飲みながらアナルを舐めてると、吉野さんも私のおまんこをジュルジュル舐めてくれていて、気持ちよくなりながら、アナルのいい香りと美味しさを堪能したのでした。そしてそんな私を見ていた優香さんは「吉野さんのお尻の穴って可愛いでしょ　？うんちいっぱい塗って舐めると美味しいのよ　　？それだけじゃなくて、私たちが出したうんちをアナルに注入してブレンドさせて食べると凄く美味しくなるんだから　。じゃー、ミカさん、私うんちを我慢したままだときついから、続き食べてくれる？いっぱい食べてマン汁溢れさせたら、吉野さんにいっぱいマン汁飲ませてあげて　？」と私に言うと優香さんはおまんこオナニーしながら吉野さんのお尻に、自分のお尻を押し付けるようにして、２人のアナルがキスできるほどに近づけると、「ブー。ブリブリブリ。ブリュブリュ。ブチュ～。」っと音を立てながら、美味しそうな極太のうんちを再び出し始めたのでした。先程とは違いトロトロしたうんちが出はじめたため、私は慌てて口を大きく開けて、うんちを食べました。

「ズルズルあむあむ。　おいひい　。いっぱいおいひいのへは　。」トロトロしたうんちをそばをすするように食べると、本当にお蕎麦をうんちにつけて食べたくなりました。３ヶ月ぶりに大量の美味しいうんちを食べて、私のアナルもおまんこも喜んでいました。マン汁がドバドバと出るのを感じると、吉野さんがすかさずジュルジュルと吸ってくれて、その快感で優香さんのうんちがさらに美味しく感じるのでした。

第5話（後書き）

何かしらお知らせいただいたら、話の流れの確認を再度行っていきます。

第6話（前書き）

妄想炸裂です。

第6話

優香さんのアナルからはまず、健康の証拠たる美味しそうなバナナうんちが３０ｃｍくらい出てきました。私はそれを口いっぱいに頬張り、むにゅむにゅとしながらしっかり味わいつつも、いっぱい食べたくて、急いで飲み込みますが、やはり量が多いため口から溢れました。それくらいいっぱい美味しいうんちが出てきたのを見て、私は嬉ションをしてしまったのでした。吉野さんはそれも慌てずに飲んでくれました。申し訳なく思いつつも、私の口から溢れたうんちは吉野さんのアナルの上で綺麗にとぐろをまきました。私のためにいっぱい美味しいうんちを出してくれた優香さんのアナルに感謝の意を込めて、うんち出したてのアナルを舐めてお掃除をしようと考えました。優香さんのアナルに舌を伸ばして、「レロレロ。ジュルジュル。」と舐めると優香さんはオナニーしながら「あ～ん。気持ちいい　。もっと出そうだよ　。今度は少しゆるいかも＾＾；。ムース状な気がする。そのまま口開けて受けて食べてくれる　？溢れたら、そのままバナナうんちにかけてバナナチョコソースパフェにして食べていいからね　？」と言いました。私は下痢うんちも大好きで、ジョッキで飲みたいくらい下痢うんちが好きなため、ムースうんちも出ると聞き、１度で２度美味しい優香さんの巨尻に顔を埋め口を大きく開けて、美味しいムースうんちを飲み込むためにアナルをいっぱい刺激するのでした。

「あ～ん。ミカさん出るよ＾＾；？いっぱい飲んで＾＾；？。出る、出る～＾＾；」

「ブリュブリュブリュ～。」

優香さんの宣言通り、ムース状の少しドロっとしたうんちが口いっぱいに入ってきました。いい臭いなだけでなく、すごく滑らかで凄

く美味しい　。そして、やはり口に入り切らず、バナナうんちの上にドロドロとかかっていくのでした。後半になるにつれてサラサラもしてきて、最後はややスープでした。完全にうんちを出し切って、正真正銘のラストだと感じた私は再び優香さんのアナルを綺麗にするためにうんちまみれの口で舐めすするのでした。うんちスープ最高に美味しい　。吉野さんのアナルをデコる総量２ｋｇはあろうかという量のうんちパフェを前に私はドキドキしました。そのうんちを見た香里奈さんも羨ましそうに私を見ていました。香里奈さんは別の看護師さんのうんちを食べ終えたあと、その看護師さんに手マンされながらも四つ這いで私に近ずいて来ると、吉野さんのお尻に顔を近づけて、うんちを口いっぱいに頬張りモニュモニュとさせると私の口に流し込んで２人で濃厚なうんちキスをするのでした。

私と香里奈さんの２人で優香さんが出してくれた大量のバナナうんちパフェを仲良く食べ終え、器になってくれた吉野さんのアナルを綺麗に舐めていると、吉野さんから「では、そろそろ処置室に案内しますね？」といわれました。吉野さんのアナルを舐めたい欲求を抑え、私と香里奈さんが口を離すと吉野さんはゆっくりと立ち上がり、私たちを処置室へ案内するのでした。

私と香里奈さんは処置室に行くために、うんちまみれになったお尻を丸出しにして歩く吉野さんの後をおまんこを濡らしながらついて行きました。吉野さんは処置室の前に着くと、私と香里奈さんのおまんこを触れて、濡れ具合を確認しました

。そして満足そうに笑うと私たちのマン汁を舐めとりながら、とある処置室に誘導したのでした。

「では、ここからは、ミカさんと香里奈さんは別行動になります。香里奈さんは先程の看護師の蜜野さんについて行ってください。蜜野さんは調教のスペシャリストかつデカクリの製造スキルがとても高い方なので、香里奈さんのクリトリスを可愛くかつ美味しそうな見た目のデカクリに仕上げてくれるはずです。では、蜜野さん、お

願いしますね　。」

「はい　。では、香里奈さん、まずはクリトリスを吸引しに第2処置室へ向かいますよ　？着いてきてください　。」

そう言って、蜜野さんは香里奈さんのお尻を鷲掴みにして揉みながら、第2処置室へ香里奈さんを連れていくのでした。

そんな香里奈さんを少し不安げに見ていた私に、吉野さんは「大丈夫ですよ　。ミカさん。香里奈さんは大量かつ良質のうんちを出せるように体質改善の施術と舐めごたえのある美味しいクリトリスにするための施術を受けに行っただけですから　。ミカさんも香里奈さんのクリトリスを美味しくフェラできるようになりますから　。ミカさんはそれを信じて、まずはうんち中毒の改善と良質のうんちとマン汁が出せるように頑張っていきましょうね　。では、処置室に行きましょう　。」といいました。そして、吉野さんは私を正面から抱きしめて私のお尻に手を回して、アナルに指を入れてクチュクチュさせると、私の唾液を美味しそうに啜り、飲み込みました。そしてお尻の穴に入れていた指を引き抜き臭いを嗅いで、にっこりとすると指を舐めしゃぶり、「美味しいですね　。処置室でもっと美味しくできるよう様々な処置を行いますね。処置室に入る前に、おっぱいが見えるようにワイシャツのボタンは全部外しますね。ミニスカートはそのまま履いておきましょう。その方が可愛いですし、お尻が美味しそうに見えますからね　」

そう言って、私のシャツのボタンを全て外し、乳首を左右ジュルジュルっと吸い付いて、乳首をビンビンにさせたのを確認すると、私のアナルに再び指を突っ込んでくれました。その状態でズブズブしながら処置室へと誘導していくのでした。

第6話（後書き）

お疲れ様でした。

第7話（前書き）

ストックを解放してます。

第7話

私は吉野さんにお尻を鷲掴みにされてアナルに指入れされながら処置室へ入りました。中を眺めてみて驚きました。
個室になってるのかと思いましたが、かなりの広さのある部屋でした。そこには、２０人以上の看護師さんと１１人の患者さんがいました。１１人の患者さんは皆さん色々な施術をされていて、気持ちよさそうにしており、羨ましかったです。
患者さんが横になってる処置台は少し硬い長椅子の様なベッドでした。その中の患者さんの１人に吉野さんは私のアナルをクチュクチュいじったまま私を連れて近づいていきました。その患者さんは四つ這いになっており、お尻を突き出していました。

別の看護師さんが、その患者さんのアナルに指を入れて中をグリグリしてうんちをほじくり出していました。患者さんはうんちをほじくられてる最中でも、色々な食べ物を食べてました。食べて出すを突き詰めた究極系です。その患者さんのことを私が見ていると、私を案内してくれた吉野さんは私のアナルをクチュクチュさせていた指の本数をさらに増やしてクチュクチュさせながら、優しく説明してくれました。

「彼女は美味しいうんちを出せる雌豚になりたいという願望があり、絶えず、食べてうんちを作ることが出来る様に体質改善を図っています。ただ、太ると見た目も悪くなりうんちも美味しそうには見えないので、グラマラスかつデカ尻の体型を維持できるようにしているんです。うんちを掻き出す時間以外は、ペニスバンドを装着させてスタッフのおまんこやアナルを責めさせて運動をさせているんですよ　。」

そう説明してくれた吉野さんは私をその患者さんの目と鼻の先まで連れて行ってくれました。その患者さんのむっちりして陰毛も生えた美味しそうなお尻をまじまじと見て、口もおまんこもヨダレが溢れました。そんな私の様子を見ていた吉野さんは私のアナルをさらに刺激しつつ、患者さんのお尻をほじっていた別の看護師さんに話しかけました。

「京子さん、ゆり子さんのうんちの具合はいかがですか?」

「あら、吉野さん。ゆり子さんのうんちは、とても質が上がって来てます。日に日に良くなってますよ　。臭いも食欲がそそるいい臭いになっていますし、量も大量に出せるようになりました。中でも味と舌触りはかなり良くなりました。吉野さんもいかがですか?そこのお皿に掻き出したうんちを載せてますので。私もさっきからつまみ食いしちゃうくらいです。最高級かと思います。良かったらどうぞ　」

その看護師さんは京子さんと言い、その患者さんはゆり子さんと言うようです。京子さんは吉野さんと話しながらも、ゆり子さんのアナルを責める指を止めずにうんちを掻き出しており、指も手もアナル汁でヌルヌルテカテカになってました。

そんな施術風景を見て、私はおまんこを濡らしてドキドキしていました。吉野さんはそれに気づいたのか、私のスカートをめくり、ノーパンのお尻をむき出しにすると、アナルだけでなくおまんこにも指を入れてきました。

「ミカさん、いい具合に濡れてきましたね。1度ミカさんのマン汁検査をしてみますね?」そう言って、吉野さんは私のおまんこを指で掻き回し、ヌルヌルになった指を引き抜いて、舐めしゃぶるのでした。

「ん~。チュルチュル。ミカさんいいマン汁ですね。とても美味しいです　。いかがでしょうか?京子さんが掻き出したゆり子さん

のうんちを食べたら、もっとミカさんのマン汁が美味しくなると思うのです。マン汁を美味しくすることで、ミカさんのうんちもさらに美味しくなり、それを食べられたら私達も香里奈さんもとても嬉しくなると思います。ゆり子さんのうんちを召し上がってみますか？」

「はい、、美味しそうな臭いがしてて、さっきからずっと食べたくて仕方ないです。食べてもいいんですか　？」

私がそういうと、吉野さんは四つ這い体勢になっているゆり子さんに目をやりました。ゆり子さんのおまんこの下に置かれたお皿を見ています。そのお皿には京子さんが掻き出して、どっさりと盛りつけたうんちが載っていました。重量で言うと2キロか3キロはありそうです。吉野さんは、そのうんちの中でも形のいい塊を掴んで自分の口に入れてモニュモニュと味わい始めました。「ンクン。うん、美味しい　。これだけ美味しいうんちなら、ミカさんのマン汁をもっと美味しく出来ると思います。じゃー、ミカさん、お口を開けてください。うんちを食べてる間におまんこの検査をするので、また、おまんこに手を入れさせてもらいますね　。」

そう言って、吉野さんは再びゆり子さんのうんちを手に取り、吟味していい形のものを口に含むと、うんち掴んでゆり子さんのうんちがべっとり着いた指先を私のおまんこに手を入れてくれました　。ぐちゅぐちゅと刺激したと同時に、口移しでゆり子さんのうんちを食べさせてくれたのでした。

第7話（後書き）

最終回とか全然まだ考えてないのでどうなる事やら。

あまあまなスカトロレズが好きなので、そういう方向の作品になるかと思われ。

第8話（前書き）

今後色々手直しをしていきます。

第8話

吉野さんはうんちをトロトロにして私の口に流し込みながら、口の中を舌で舐め回すようにして私の口全体にうんちを送り込んでくれるのでした。

「ん～。ん、、んちゅ。いかがですか？ミカさん、このうんち美味しかったでしょ　？」

「はひ、おいひいへふ。もっほはへはいへふ。ンクン。」

「ふふ。ミカさんのおまんこ、さっきよりもトロトロですね。」

吉野さんはおまんこに入れていた手を抜き取り、舐めしゃぶると「ん～。ゆり子さんのうんちも混ざって、さっきよりも美味しいです。良かったですね　。今後は当院に毎日通院していただければ、毎日美味しいうんちが食べれますよ　。そしたらマン汁もどんどん美味しくなりますからね　。マン汁検査の結果、良質なマン汁が出せているようです。ミカさんは良いマン汁製造奴隷の素質もあるようなので、今からマン汁採集器を取り付けようと思いますが良いですか　？うんちを美味しく食べながら、気持ちよくなれていいことづくめですよ　？」

そう、うんちに舌鼓を打ってる私に言いました。そして、吉野さんは私にそのマン汁採取器を見せてくれました。形状はトイレのスッポンのようですがおまんこにフィットするようカーブしていました。おまんこを優しく覆う様にゴムパッキンが着いていて、採取器の底にはチューブが繋がっており、ペットボトルのようなものが繋がっています。さらに採取器のちょうどおまんこに当たる部分にはゴム手袋のようなものがありました。どうやら採取器の外から中をいじれるシステムになっている様でした。

その採取器を見せながら、吉野さんは採取器の説明をしてくれました。

「ミカさん、このマン汁採取機はおまんこを大きく優しく覆う様に設計されています。それはマン汁だけでなく、おしっこしたくなった時や、お潮を吹いてしまった時に一滴もこぼさないようにするために密着できる設計になってます。また、密着したあとでも、おまんこを外からいじれるように中に向けてゴム手袋が繋がっています。これによってマン汁もおしっこもお潮も一滴も無駄にせずにおまんこをいじり続けて、ミカさんのエキスを大量に採取できるのです」そう嬉しそうに説明をした吉野さんは、私を後ろから抱きしめ、再びおまんこをまさぐり始めました。

「ん～。ミカさんのおまんこ、すごくトロトロで素敵　。１度おまんことアナルの味見をさせていただきますね？」そう言って、吉野さんはしゃがみこみ、私のおしりをわし掴みにしてアナルとおまんこを舐めすすり、「すごく美味しい　」そう言って、ジュルジュル吸った後その採取器を取り付けてくれました。気になってソワソワしてると吉野さんが言いました。「ミカさんぐちゃぐちゃにいじりますので、いっぱい感じてマン汁とお潮を吹いてくださいね　？おしっこしたくなったら私に声かけずにそのまま出して大丈夫ですよ。５００ＣＣ以上貯めておけるので。それに、この器具を取り付けられた状態でも歩くことが出来ますから。」

そう言われ、ドキドキしている中、吉野さんは採取器をしっかりと取り付けていることを確認し、採取器の手袋部分へ手を入れると私のおまんこをぐちゃぐちゃと刺激して、マン汁をいっぱい出してくれるのでした。

そのやり取りを見てた京子さんは「ミカさんのマン汁美味しそうですね　。私もぜひ飲ませて欲しいです　。いっぱいマン汁出して欲しいので、ぜひゆり子さんの出したてのうんちも食べて見ませんか

？ゆり子さんのうんちは出したてが1番美味しいですから　。今ちょうど、うんちが直腸に来てるようなので、かき出しても食べれますが、せっかくなのでアナルから直に食べてみますか？」

「いいんですか　？」

「はい。じゃーちょっとまっててくださいね　。」

そう言って、京子さんは私がゆり子さんの出したてうんちをアナルに口をつけて直に食べるための準備をしてくれるのでした。

京子さんは、ゆり子さんのアナルをガシガシとほじくっていた4本の指を抜き取りました。アンアンと喘ぎながら、食べ物を食べてたゆり子さんもふーふー言いながらグッタリしました。

京子さんはアナル汁でテカテカしつつも、うんちカスがべっとり付いた手を私に向けて差し出してくれました。「良ければ、味見なさってください。アナル汁はうんちとは別の美味しさがありますので　。」そう言われ、私は京子さんの指を舐めるべく顔を近づけました。すると、ゆり子さんのアナルのいい香りとうんちのいい香りがブレンドされて、食欲をそそりました。

私はヌルヌルテカテカの京子さんの指にむしゃぶりつき、ズルズルと吸い、うんカスを舐め取り、美味しさを味わいながら飲み込んだのでした。確かにうんちとは異なる美味しさを感じました。その美味しさに酔いしれてる間も吉野さんは私のおまんこを刺激し続けています。気持ちよさと美味しさで、軽くイッて、おしっこを漏らしちゃうのでした。そして、それは吉野さんが取り付けた器具に採取されるのでした。それを見ていた吉野さんは「ミカさん、ゆり子さんのうんちは、おしっこもらしちゃうほど美味しかったですか　？予想通りミカさんのおしっことマン汁が溢れ出てます　。京子さんがゆり子さんのうんちを美味しく食べれるように準備してくれますので、ミカさんもいっぱいおしっことマン汁を出してくださいね　？」

そう言って、吉野さんはガシガシとおまんこをいたぶる手をさらに激しく刺激するのでした。

私が京子さんの手を綺麗に舐めしゃぶり終わると、京子さんは私のヨダレ出いっぱいの手を舐めて微笑んでくれました。「ミカさんの唾美味しい　。これは楽しみです　。」すると今度はグッタリしてるゆり子さんのお尻をベシンと叩いてゆり子さんに言いました。

「ゆり子さん、ほら、もっとお尻を突き出さないと。ミカさんがあなたのうんちを美味しいと言ってくれたんだから。いっぱい美味しいうんち出してあげないと。ベシン。もっといっぱいあなたの美味しそうにむっちりしたお尻を突き出して。ほら、ミカさん、ゆり子さんのアナル見て?うんちでデコレーションされてさらに美味しそうでしょ　?ゆり子さん、もっとお尻突き出して、あなたのアナルを見せてあげなさい。ベシン。」

「ひゃん。京子さん、気持ちいいです、、、。」

「ベシンベシン。ズブズブ、ほら、ゆり子さん、私のむっちりした美味しいお尻の穴から出るうんちを美味しく召し上がってくださいって言いなさい。ズブズブ」

京子さんは、ゆり子さんのお尻を叩きながら、エッチな言葉を放ち、アナルに指を４本ズブズブと入れてゆり子さんのアナルを程よくヌルヌルテカテカとさせ、茶色いエキスが滲み出るような見るからに美味しそうなアナルへと仕上げるのでした。

「ベシンベシン。ズブズブズブ。ゆり子さん、いい子ね。うんちが降りてきたわよ?でも、まだ出しちゃダメよ?もっといっぱい踏ん張って美味しいうんちを直腸に留めなさい?ズブズブ。ベシン。」

「ぶ～。ジュブジュブ。」

京子さんにお尻を叩かれ、ズブズブされてる最中にゆり子さんがオナラをしちゃったようです。そのおならはなんともいえず、いい臭いで、私もお腹がグーッとなって、私もお腹がすいて来たのを感じました。

そのお腹の音を聞いた吉野さんは私のおまんこをぐちゅぐちゅ刺激しながら「ミカさん、ゆり子さんのおならいい臭いね　。美味しそうな臭い嗅いで、ミカさんお腹すいちゃったのね　。おまんこもさらにビショビショになってきてる　。今ミカさんのおまんこぐちゅぐちゅして刺激してるけど、すごくジューシーになってきましたよ　。あとで食べるのがが楽しみです　」

私は楽しみの意味が気になり、吉野さんに聞いてみました。

「楽しみってどういうことですか＾＾；?」

「ミカさんの美味しいマン汁がいっぱい溜まってくれたら、私のデザートのソースにもできますし、ミカさんのおまんこ自体も私のデザートにできそうなので　。今日のランチの時にミカさんを四つ這いにさせてお尻を突き出させて、マン汁を直飲みしながらおまんこを舐めしゃぶって食べちゃおうと思います。いっぱい美味しいマン汁出せたら、ご褒美に私のうんちを食べさせてあげますから　。いっぱい気持ちよくなって、いっぱいここにいる皆さんのうんちを食べてあげてください。」

そう言われ、私自身もこの後、おまんこを吉野さんに美味しいと言ってもらいながら、舐めしゃぶられて気持ちよくなれる喜びとうんちをおなかいっぱい食べれるという期待でやはりおまんこがジュルジュルになっていくのでした。「ふふ。可愛いですね　。先程アナル舐めした時、うんちも感じました。美味しいうんちの風味でしたから、オマンコ汁飲みながらいっぱいためてくださったうんちを食べさせてくださいね　」と吉野さんに言われ、嬉ショョンするのでした。

第8話（後書き）

あまあまでうんちを美味しいって食べ合うレズビアンものが好きです。

第9話

私がおまんこをジュルジュルさせながら、吉野さんにいじめてもらっている間、香里奈さんは蜜野さんに検査をされていました。私がいる処置室には香里奈さんがいる第2処置室の様子が見れる大画面モニターがあったので、すぐにわかりました。高画質で音声も聞こえていたので、なんだかＡＶを見てるみたいでドキドキしました。

私がモニターを見た時、香里奈さんは診察台に乗ってお尻を突き出してしゃがんでいました。蜜野さんも床に手をつく四つ這い姿勢で香里奈さんのアナルを舐めたり吸ったりしていました。「香里奈さんのアナルは舌触りもいいし、尻穴も柔らかくて舌が入りやすいですね　。とても美味しいですね　。臭いもさることながら、うんちの汁が舐める度に溢れてきて、濃厚なアナル舐めを堪能できますね。香里奈さんの要望通り、うんちの質と量を増やせる施術をして行きましょう。ミカさんのうんちを食べて、それを香里奈さんがお腹の中で熟成させてまたミカさんが食べる。そういうサイクルを強化して、最高級の濃厚なうんちを作れる体質に改善をしていきますね？」

そう蜜野さんが言うと、蜜野さんとは別の看護師さんが香里奈さんのお股と診察台の間に頭を通すとおまんこを猛烈に舐めしゃぶりました。それと同時に蜜野さんも香里奈さんのアナルを猛烈に舐めしゃぶり、ネトネトになったアナルに向けてアナルを拡げる器具を入れるのでした。そして、香里奈さんの周りにはさらに何人かの看護師さんが集まり、香里奈さんの顔にお尻を押し付けたり、香里奈さんのおっぱいを舐めたりして香里奈さんを責め立てるのでした。そんな責めを受けて気持ちよさそうにしている香里奈さんの様子を見て私はせつない気持ちを感じながらも、私のうんちを美味しいって

言って食べてくれる香里奈さんがもっとエッチにいやらしくなって、極太で美味しいうんちを食べさせてくれたらいいなと思いモニターから目を離すのでした。

そして、京子さんはと言うとゆり子さんのアナルを極限までいじめていました。

「ベシンベシン。ズブズブズブ。ゆり子さん、もっとお腹に力入れて。もっとうんちを直腸に送り出して。ズブズブ。ゆり子さんの美味しいうんちをミカさんが食べたいって言ってくれてるのよ？ほら、美味しそうな臭いしてきたお尻をもっと突き出してあげて？ズブズブズブズブ、もっとお尻ふりふりしていやらしくしなさい。ズブズブ。ペシン。もっと突き出して？そう、いいわよ　？すごくいい臭いがしてきた　。すごく美味しそうなアナルになってきたわよ　？ズブズブズブズブ。じゃー、ミカさんがお尻に顔埋めやすいようにもっとミカさんの方まで下がりなさい。ベシン。」

ゆり子さんは京子さんにズブズブされたまま、私の顔の近くにまでよって来て、ズブズブされながら美味しそうなお尻を突き出してくれました。そして京子さんが指を抜くと私の顔の目の前いやらしく腰を振ってくれて、すごく興奮しました。フリフリとお尻を振りながら、おならもしてくれて、アナルがアナル汁で溢れるのを見ると私のおまんこがさらにびしょびしょになりました。ゆり子さんもアナル汁だけでなくマン汁を溢れさせていました。それほどに京子さんの責めは気持ちいい様で、私も早く京子さんに責められたくてたまらなくなりました。

私のマン汁が溢れたことを感じたであろう吉野さんは、鼻歌を歌いながら上機嫌で私のおまんこをいじめるのでした。

私の顔の前でおならをしたゆり子さんに対して、京子さんは、物足りなかったらしく、「もう、ゆり子さん。アナル汁だけじゃなくて

うんちも出さないとダメでしょ？ほら。ミカさんが食べたいって待ってくれてるんだから。もう1回お尻を私に突き出しなさい？」
そう言って、京子さんはゆり子さんのアナルを更なるデザートに仕立てあげてくれるのでした。

「く、、京子さんのズブズブ、気持ちいい、、、。ぶぶー。びゅりゅりゅ～。ミカさん、、私のむっちりしたお尻を京子さんに美味しく仕上げてもらいました。あん、、アナルもいい香りがして美味しくなってます、、、今から、ミカさんのためにいっぱいうんちを出しますので、美味しく召し上がってくださいね、、あん　。ブリュリュリュ。マン汁も～　、いっぱい出てますので、ジュルジュル吸って、私の全てを召し上がって～　、、あん　。ください　。ブ～　。」

今も尚、京子さんにズブズブされてるゆり子さんのアナルはブリュリュリュという音とともに、茶色いトロトロしたエキスを垂らしました。それを見た京子さんは嬉しそうに「いいですね。その調子ですよ　。ズブズブ。ミカさん。今最高に美味しく仕上がったアナルジュースが出てきました。ミカさん。美味しく仕上がったゆり子さんのアナルジュース。美味しく飲んで欲しいので、最初はマン汁から飲んでみてください　。その後、アナルに口を押し付けてウン汁を直飲みしてください。すごく美味しくいただけると思います　。」と私に告げました。
そう言うと京子さんはゆり子さんのアナルから指を4本引き抜くと、「ミカさん、私の指でまずは味見してくださいね　。」そう言って、茶色くヌルッとした指をまたも舐めさせてくれました。さっきよりも最高に臭くて美味しくなっていました。もう我慢できず、目の前でアナルをヒクヒクさせて、茶色いトロトロエキスを垂らしながら、お尻をふりふりしてるゆり子さんのおまんこに吸い付き、マン汁を飲み干しました。マン汁が美味しくてたまらなくて、うん汁を早く

飲んでうんちをいっぱい食べたくなったので、アナルを口で覆い隠すように口を押し付けて、舌で中をほじくり、うんちを一生懸命吸い出すのでした。

「あ～、、ミカさん、、そんなにおまんこもアナルも吸ってくれるなんて、嬉しいです　。いっぱい美味しいうんちだすので、美味しく食べてくださいね　？ブリュリュリュ～」

「ゆひほはん、ジュルジュル。うんひいっはいはへはいんへふ。いっはいおいひいほふははい。」そう言って、一心不乱にアナルを吸い出していると、念願のうんちが出てくるのを感じました。

「ムリムリ。ブリュブリュ。」

と音をたてながら、私が口を大きく開けてアナルを包み込むように舐めてウン汁を吸っていた口の中へ大量に入ってきました。ゆっくりと口の中いっぱいになっていくうんちは、苦くて臭くてとても美味でした。アナルから直に口に入るうんちを一欠片も落とすことなく食べるため、飲み物を飲むかのように、軽く咀嚼しごくごくと飲むように食べるのでした。

大量に出てきたうんちを夢中になって、美味しそうに食べる私を2人の看護師さんは嬉しそうに見ていました。

と言っても、吉野さんは変わらず後ろで私のおまんこをジュクジュクいじってマン汁採取を継続中ですが、何となく話していることが聞こえたのでそう思いました。

「吉野さん、吉野さんがお連れしたミカさんはとてもうんちが好きなんですね　。」

「そのようです。京子さん　。ミカさんはうんちを食べることも好きですが、マン汁を舐めた感じだとうんちを食べてもらうことも好きなようです　。」

「そうなんですね　。じゃー、うんちをいっぱい食べて、さらに美味しいうんちを作れる逸材になりそうですね　。」

「はい。私も腕がなります　。美味しいうんち製造機にしてあげま

すからね　。ご褒美にはいっぱいうんちを食べさせてあげます　。それを聞いて嬉しいのですね　。どんどんマン汁が溢れて　。可愛いですよミカさん　。」

そんなことを言われながら、私はゆり子さんのうんちを完食し、アナルを丁寧に舐めて中をほじくり綺麗にして、口を離すのでした。

「ミカさん、京子さんが調教したうんち製造機はどうでしたか？」

私のおまんこを刺激する手を休ませることなく吉野さんは私に言いました。

「吉野さん、、、。ゆり子さんのうんちはとても美味しかったです。うんち臭さが強いだけでなく、濃厚なバターなような舌触りの中に少し固形物の固さもあって、色んな舌触りを楽しめました。とても美味しいです　。」そういう私は今にも倒れそうなくらいに気持ちよくて、ガクガクしていました。そんな私をしっかり後ろからホールドして支えてくれてる吉野さんは、おまんこを刺激して、マン汁採取を続けたまま私を次の患者さんの場所へ誘導すべく一緒に動き始めたのでした。

第１０話

次の患者さんのところへ行くと、患者さんは先程のゆり子さんと同じように診察台で四つ這いになってお尻を突き出していました。さっきと違うのは極太ペニバンをつけた看護師さんがお尻を突き出した患者さんのアナルをズブズブと犯していました。その風景を見て、吉野さんは目の前の看護師さんに話しかけました。

「ゆみのさん、エリカさんのお加減はいかがですか？」

「？、あ、吉野さん。エリカさんのアナルはよく拡がると同時にいい締まり具合いだと思います。それでいて、極太で長いペニバンを入れられるようになりましたので、極太で長い、美味しいうんちを出せるようになったと思います。」そう言いながら、目の前の看護師であるゆみのさんは吉野さんと話しながらもエリカさんのお尻を鷲掴みにしてパンパン音をたてながら、アナルを責め続けていました。

エリカさんは「アンアン　。いいです　。」そう言って、気持ちよさそうに責められていました。

「エリカさんも素晴らしいですね。この調子でアナルを拡げて極太の美味しいうんちを出せるように頑張ってくださいね♥　。エリカさんへのお薬を処方しますね　。」

吉野さんはそういうと、マン汁採取器の上から、おまんこをまさぐっていた手を抜き取って、エリカさんの方へ近づきました。その間、私は快感地獄から解放されて、しばしの休息を得られました。吉野さんは診察台のエリカさんの前まで行くとお尻をむき出しにしてエリカさんの顔に向けて、お尻を突き出しました。吉野さんの茶色くてうんカスが着いたアナルがエリカさんの口の前に突き出されると、エリカさんは「ハム」と言って吉野さんのアナルに食いつき、その

タイミングで吉野さんは「ブ～」と音を立ててオナラを出し、おならの香りを味合わせた後に肉団子程度のコロッとしたうんちを出して、エリカさんに食べさせてあげるのでした。

「あ～　。吉野さんのうんち美味しいです～　。もっと食べたいです～。あ、、イク、、美味しくてイッちゃう　。」

吉野さんのうんちを食べただけで、あんなに気持ちよさそうになれるなんて。すごく羨ましく思ってると、ゆみのさんが「良かったですね　。エリカさんがこのようにイッた時はうんちがいっぱいおりてきやすいんです。中でいっぱい撹拌されてうんちが美味しく仕上がったと思います　。」と私にそう言ってきました。ペニバンの周りに付いているうんちカスを指で撫でとると、吉野さんに話しかけてやり取りをしていると吉野さんの舌に塗りつけました。吉野さんそのまま私へ近づいて来ると、後ろへ回って私を抱きしめて、再び採取器に手を入れ、私のおまんこをガシガシと責めながら、舌に塗り付けられたエリカさんのうんちをバックハグでキスしながら口移してくれるのでした。

エリカさんをパンパン責めていたゆみのさんは、私を見て「吉野さんの患者さんのミカさんですね?今味見してもらった通り、吉野さんのうんちを食べて、絶頂したエリカさんのうんちは格別に美味しくなってると思います　。1度、ペニバンを外します。ペニバンはストラップレスディルドなので、私のおまんこ側のディルドも1度外しますから、両方舐めていただいていいですよ　?その前におそらく、エリカさんのアナルからドロドロのうんちが大量に出てくると思うので、ぜひそちらを先に召し上がって見てください　。」

ゆみのさんはそう言って、エリカさんからディルドを引き抜くと30cmはあろうかという長さのディルドが引き抜かれました。そのディルドはうんちまみれになっており、とても美味しそうでディルドも舐めたいけど、エリカさんが出すであろうドロドロうんちも早

く食べたくてうずうずしてしまいました。施術台からゆみのさんが降りると、気持ちよすぎてビクビクしてるエリカさんをガシッと掴んで、施術台の端まで引き寄せて土下座ポーズでお尻を突き出させる体勢にさせました。私が今なおビクビク揺れてるお尻を見てると、ゆみのさんは「ミカさんがうんちを美味しくいっぱい食べやすいようにエリカさんを端へ寄せてお尻を突き出させました。ビクビクしてる時のアナルは格別ですよ　？ビクビクが収まる前にどうぞ　？」と言って、ゆみのさんはエリカさんのお尻を鷲掴みにして、アナルをクパァと拡げてくれました。そのアナルが本当に可愛くて臭くて美味しそうで、我慢できず、私はまたも口を大きく開けて吸い付きアナルを堪能するのでした。

第11話

ゆみのさんが言う通り、ビクビクしているお尻のアナルは舐めるとビクビク動いてて可愛いですし、美味しい汁がいっぱい出てきていつまでも吸っていられました。アナル汁を美味しそうにジュルジュル音を立てて飲んでいる私に、ゆみのさんは再び「美味しいでしょ？もっといっぱい吸ってあげてください　。ほら、エリカさんも、もっとふんばってあげて？美味しいうんちいっぱい食べさせてあげたいでしょ？」そう言ってエリカさんのお尻を叩いて刺激してからクパァっと拡げてくれて、ついにエリカさんのドロドロうんちを食べる準備が整ったのでした。ゆみのさんはエリカさんのお尻を鷲掴みにしてアナルをクパァっと両手の人差し指と中指で拡張してくれてます。そのクパァとしたアナルに無心で口をつけてアナルジュースを飲んで、ドロドロうんちを楽しみにしていると、今度は吉野さんが手マンしている手と反対の手の指を私がジュルジュルしているエリカさんの拡張されたアナルにズブズブと入れてきました。すると嬉しそうに「エリカさん　。もう近くにうんちが来てますね　。トロトロした感触がしてます　私も味見してみますね　」と言って、ズブズブしていた指を抜き取って舐め取り、「エリカさん　。凄く美味しい　。さ、エリカさん、もう一息　。頑張って踏ん張ってあげて　？ミカさん、もう出てくるわよ　？もっとアナルを舐めてすすりながら、出てくるのを待ってあげてくださいね　？」と吉野さんはエリカさんを励ますと、エリカさんのアナルに入れた指をそのまま私のアナルに入れて、私のアナルのうんちチェックもしてくれたのでした。

エリカさんは吉野さんに言われた通り、「う～ん、、」と踏ん張ってくれました。それによってゆみのさんに拡張されているアナルが

もっとヒクヒクと動き、美味しい汁がさらに溢れてきました。ジュルジュルといやらしく音を立てて吸っていると、ついにその時が来て、どんどん苦味と臭みを増して美味しさが際立ってきました。私が口を押し付けアナルを舐めすすり、今か今かと待っていると、「ブリ、ブリュブリュリュリュ」と音を立てて、エリカさんのトロトロうんちが出てきたのでした。

心なしか舌触りは濃厚カスタードクリームのような感じです。やはりうんちはどんなうんちも苦くて臭くて、凄く美味しいのですが、エリカさんのうんちは甘さを感じとても美味しく感じました。クリームうんちを口いっぱいに出され、受け止めきれない分は手でお皿を作り、受け止めました。手ｯｒ様に素早く口の中のうんちを飲み込んだら、手のひらのうんちをジュルジュル吸い取り、ドバドバ出てくるエリカさんのクリーム濃厚うんちを口と手で受け止めながらこぼさないよう美味しく完食するのでした。

その姿を見ていたゆみのさんは「ミカさん、エリカさんのうんちはいかがでしたか?実は、今日、カスタードクリーム浣腸をして、浣腸我慢しながらアナル責めをしてたんです。普通のうんちと違って、お腹の中でうんちがカスタードクリームと混ざりあって、普通のうんちには無い美味しさを引き出してたんです。他にも色々なスイーツ浣腸をしてアナル調教をしていますので、機会があったら、また食べてあげてくださいね。」

「はい。何度でも来ます。凄く美味しかったです。」そういうと私は気持ちよすぎるあまり気が遠のく感覚を感じました。

私がうんちを食べてる間、ずっと吉野さんは私のおまんことアナルを刺激してくれていました。そのせいか、私は気持ちよすぎたのと、うんちをお腹いっぱい食べれた喜びも相まって、潮を大量に噴いて床に崩れてお尻を突き出した四つ這いの体勢で脱力してしまうのでした。

脱力した私は四つ這い体勢で崩れていきました。それでも吉野さんは私のおまんこ責めは止めてくれませんでした。というより、責め続けてくれていました。気持ちよすぎておかしくなりそうな感覚を感じながらも、その激しい気持ちよさがおさまるまで、吉野さんはおまんこを優しく責め続けてくれるのでした。

「気持ちよくて、脱力してしまったんですね　。でも、今のこのタイミングが最高に美味しいマン汁を作れるので、このままおまんこを責めさせていただきますね。ちょうど四つ這い体勢なので、パンツを脱がせて正確にアナルの状態も確認しておきましょう　。ちょうどミカさんのアナルから美味しそうないい香りがしてきているので　。じゃ～。採取器が外れない程度にパンツを下げて、アナルを出しちゃいますね　？」

そう言って、器具が外れない程度に私のパンツを脱がし、アナルに鼻を押し付け、「スンスン　。ハ～　。ミカさん　。あなたのアナルとてもいい香りです　。美味しいうんちがいっぱい出せる良い臭いです。少し漏れちゃってたんですね　。よく我慢出来ました　。偉いです　。では、せっかくなのでうんちの検査もしちゃいましょう　。」

そう言って、吉野さんは私のアナルに舌を伸ばして、ヌチャヌチャジュルジュルと音を立てながら少し漏らしてたうんちを美味しそうに舐めすするのでした。

「ん～　。ジュルジュル。レロレロチュルチュル　。ん～。美味しいです　ｆ。後でいっぱいアナルを検査してうんち掻き出して食べてあげますね　。こんなに美味しいおもらしうんち食べてたら、私もお腹すいてきちゃいました　。」

いやらしく、私のアナルを舐めてすすりながらも、おまんこを優しく責めてくるれる吉野さんのことを思うと、キュンキュンしてとても切ない気持ちになってきました。もっとイかせて欲しくてたまり

ません。私のうんちをいっぱい食べて欲しい。吉野さんに私のうんちを美味しく食べさせてげたい。そんな風に思うのでした。

第12話

四つ這いで休憩してる最中、ずっとおまんこ責めをしながら、美味しいと言ってアナルをを舐めてくれてる吉野さんのことを想っていると、ホッとして嬉しくなりました。そしてなんだか、おしっこをしたくなり、吉野さんに相談しました。

「吉野さん、少し回復してきたんですが、おしっこしたくなっちゃって。」

それを聞いた吉野さんは「そうでしたか　。では、待ってください。今器具に取り付けたボトルがいっぱいに溜まってきてるので、新しい物に取り替えようと思います。」

器具はおまんこを優しく覆う形状で、全体を多いつつオマンコ部分にはチューブが連結されてるのと、器具の外からおまんこをいじれるように、内部にゴム手袋が連結されていて、マン汁もおしっこも一滴ももれないようになってます。チューブに繋がってる先にはペットボトル状のボトルがあり、それをタプタプして見せた吉野さんは「すごく美味しそうです　。あとで飲ませていただきますね　。新しいの持ってきますので、そのまま休憩しててくださいね。」

そう言って、アナルから口を離し、おまんこからも手を抜くといそいそと立ち上がり交換用のボトルを取りに行きました。

吉野さんがボトルを取りに行ってる間、私は膝立ちになれる程度には回復しました。私は膝立ちになって、処置室の中を見回しました。私が見た2人の患者さん以外の患者さんもガンガンに気持ちよさそうに責められていました。きっと吉野さんと一緒に一人一人のところをめぐり、うんちを食べさせてもらうことになるんだと思います。あと9人分です。今日はおなかいっぱいになるまで、待ちに待った大好きなむっちり巨尻美女のうんちを食べれるんだと思うと、嬉シ

ョンしたくなりましたが、吉野さんが戻って来るまで我慢するのでした。

その頃、香里奈さんはどうなっているのか気になり、診察室のモニターを見ました。すると香里奈さんは分娩台に拘束されて蜜野さんにガンガン犯されていました。その他にもおっぱいを舐めてる看護師さんや足舐めしてる看護師さん、香里奈さんの顔にまたがってクンニやアナル舐めをさせてる看護師さんもいて、最高に気持ちよさそうな状況になっていました。それを見ながら私もイキたくなり、おっぱいなどを弄り始めると吉野さんが戻ってきました。

吉野さんは小走りで戻って来ると、ボトルを2本とお皿、ナイフとフォーク、ワイングラスを持っていました。どうしたのでしょうか？不思議に思っていると、吉野さんが「お待たせしました＾＾；。ミカさん、具合はいかがですか？」と私の体調を気遣ってくれました。

「大丈夫です、随分回復しました。今、モニターを見てたんです。香里奈さんがすごく気持ちよさそうで。」それを聞いた吉野さんは安心したように優しい顔になり、

「それは良かったです。ミカさんも最終的な検査が終わったら、もっとミカさんに合わせた快楽の処方が可能になりますので今暫くお待ちください　。それと実は別件になるのですが、実は私3日前からずっとうんちを頑張って我慢していたのですが、エリカさんに食べさせてあげた時にピークが来てしまって＾＾；。もう出ちゃいそうなくらいアナルがヒクヒクしてるんです＾＾；。ミカさん、今から私、ミカさんのお顔に向けてお尻を突き出して、うんちを食べやすいようにアナルをクパァとするんで、召し上がってくださいませんか＾＾；？もちろんちゃんと食べやすいようにお皿とフォークを持ってきてます。おしっこも出そうですので、ワイングラスをお持ちしました。少し早いですが、ミカさん、私のうんちで昼食はいか

がですか？」

その提案を聞いて、お腹がグーっとなる気がしました。美味しいうんちがいっぱい食べられる。私はドキドキと胸を高鳴らせ、おまんこをさらにビシャビシャに濡らしてしまうのでした。

「吉野さん、いいんですか　？実は、問診の時から美味しくて気になってて、、、お尻にもっと顔を埋めてうんちを食べたいって思ってたんです　。」

「そうだったんですね　。そう言って貰えて嬉しいです　。では、ミカさん、もうでちゃいそうなので、少し屈んでください　。ミカさんの顔にお尻突き出して、アナルをクパァって開きますね　。」

そう言って、吉野さんは私の顔の目の前にお尻を突き出して、尻肉を掻き分け、アナルをさらけ出し、さらにクパァッと拡げてくれるのでした。

吉野さんのお尻は私が大好きなむっちりヒップでウエストも綺麗にくびれているため、お尻の美しいラインが際立っていました。それでいて、突き出されたお尻にはうんちの漏れた形跡や、うんちを出したくてたまらなくなってヒクヒクしてる可愛いアナルや、美味しそうに熟したおまんこが丸見えとなっていました。

吉野さんは私の顔の前にお尻を突き出し、舌を伸ばせば舐められる距離まで近づけてくれました。

「吉野さん、すごく美味しそうで綺麗なお尻です　」

思ったことをそのまま、吉野さんに伝えました。

「ありがとうございます。でも、患者さんの急変対応で、ここ何日か、お風呂入れてなくて、、それと当院では、御手洗にトイレットペーパーは置きませんから、、、その、、臭くないですか＾＾；？」

それを聞いてむしろ私は嬉しくなり「全然そんなことありません　。蒸れたお尻のいい臭いと、うんちの濃厚な臭気が食欲をそそって、

さっきうんち食べたばかりなのに、もうお腹すいちゃいました　。いっぱい食べてもいいですか　？」

「嬉しいです　。ミカさん。じゃー、ミカさん、お皿を構えた状態でお口を開けて、私のアナルに吸い付いてくれますか？口で受け止めきれない大量のうんちが溜まってますから　。そろそろ出しますので、美味しく熟したうんちをいっぱい召し上がってくださいね？、、、う～ん、、、ブ～。ムリムリ。ポン。ブリュリュリュブチュブチュ。」

吉野さんが息むとブ～とおならが出てきました。私は口を開けてアナルに吸い付いていたので、おならが口の中に広がりました。食前酒ならぬ食前臭です。それが、これから出てくるうんちをさらに美味しくしてくれたのでした。

第１３話

ムリムリと音を立てて出てきたのは、コロコロしたうんちで、ポンと出てきたのは、そこそこ長い極太うんちでした。それだけでも口で受け止めきれなくて、コロコロうんちを2個、極太で長いうんちの先端だけを私の口に入れることが出来ました。残りは構えてたお皿に載せました。ポンと出たうんちは２５ｃｍくらいあり、ブリュリュリュブチュブチュと出てきたのはムース状とクリーム状のうんちでした　。色んな性状のうんちを1度で味わうことが出来るまたとないチャンスでした。

私は口で受け止めたうんちはそのままモグモグしてゴックンと飲み込みました　。お腹がすいて仕方が無かったので　。残りの極太うんちと、ムース状うんち、クリーム状うんちは極太うんちをちぎって、ムース状うんちやクリーム状うんちにフォンデュして食べるのでした。

うんちと同時におしっこも出てましたが、ワイングラスから零れた分は、うんちと一緒にお皿に受け止めたので、おしっこの味も染み込んだ美味しいうんちも食べることができたのでした。ワイングラスのおしっこを飲みながらナイフとフォークで硬めのうんちをカットし、クリーミーなうんちにつけて、うんちフォンデュを楽しみました。ワイングラスのおしっこを飲み干し、お皿のうんちを食べながら、おしっこワインのおかわりとして、お皿に残ったうんちがブレンドされたおしっこをお皿からワイングラスに移して、茶色くカスが混ざったうんち風味のおしっこを舌の上で味わい最高級のワインを飲むように味わうのでした。うんちはまだお皿にいっぱい残っていて、色んな美味しい食べ方を頭の中でぐるぐると考えたのでした。

「あん、、ミカさん、、いっぱい出しちゃってすみません＾＾；」
「　んふ　。おいひいのへひんいひないへふははい　。」
「喜んでもらえて嬉しいです　。ミカさん、私のうんちのムース状のうんちを少しいただきますね？このうんちを使って、ミカさんのアナルをズブズブするためのうんちローションを作ろうかと思います　。マン汁採取器でのマン汁採取を再開しつつ、同時にアナルの拡張マッサージをしようかと思います。」
そう言って、吉野さんは私が極太うんちをナイフとフォークで切って、ムースうんちにフォンデュして、美味しく食べ続けている間に再びボトルの交換を始めてくれました。

ボトルの交換をしようとしていた吉野さんは、ふと何かを思ったのか「ミカさん、今からボトルを交換するのですが、交換前にチューブから直接、飲尿検査をさせてもらえればと思います。検査のために京子さんをお呼びしてもよろしいですか？」
「い、、飲尿検査ですか？」
「はい。先程採取させてもらったボトルに入ったマン汁の色合いや香り共にＡランクの品質と思われます。そこで、出したてのおしっこやマン汁の際、さらにグレードが上がることが統計でわかっています。そのグレードが上がったマン汁やおしっこの味や風味を検査するものです。快感度をあげることで、おしっこやマン汁、さらにイキ潮などが採取でき、そのグレードの検査になります。よろしいでしょうか？」
「少し、、怖いですが、よろしくお願いします、、、」
私はうんちを食べる手を止めて言うと「ミカさん、安心してくださいね。それとうんちはそのまま食べてくださって大丈夫ですよ　。」
そう言って、吉野さんは私の元を離れて京子さんを呼びに行くのでした。

吉野さんが京子さんを呼びに行って2分くらい経った頃、京子さん

を連れて戻って来ました。
「京子さん、このボトルの香りと味の確認をお願いします。」
「はい、ではミカさん失礼しますね？スンスン。あ、なるほど。おまんこが濡れて来るいい臭いですね。味の方は、ジュルジュル、、、ん～。ンクン。美味しいです。喉越しがいいですね。これは確かにAランクですね。アップグレードのための飲尿検査やってみましょう。」
「京子さんありがとうございます。では私は採取器でおまんこの刺激を行いますので、京子さんは私のうんちをローションに使用したアナルの拡張術をお願いします」
「わかりました。うんちは、、あのお皿に乗っているやつですね？ミカさんが召し上がっているようですが、、、」と京子さんは私がうんちを食べれなくなるのを申し訳なく思ったようです。なので私は「京子さん、吉野さんのうんちで私のアナル拡張術をお願いします。」
と伝えたのでした。
それを聞いた京子さんは「わかりました。では吉野さんのムース状うんちとこの極太うんち、クリーム状うんちを少しづつ、いただいて使用しますね？色んな性状のうんちを混ぜた方がアナル拡張の際に快感を得やすいんです。ミカさん、よろしければ、私もうんちを差し上げようと思いますがいかがでしょうか？」
京子さんから思いもよらない嬉しい提案があり、「本当ですか!!ぜひ食べたいです。」と飛び跳ねるように喜び、京子さんにうんちをねだるのでした。
それを聞いた京子さんは「わかりました。では、ミカさん、お皿に出されるのと、中腰で突き出されたお尻から直に食べるのはどちらがお好きですか？好きなシチュエーションでうんちを食べることで、マン汁の美味しさが上がることがわかっていますので、ミカさんのご希望を教えてください。」
「あの、、私お尻突き出されて直に食べたいです」

「わかりました。実は吉野さんもそうだったと思うのですが、私も連日の夜勤でお風呂入れていません。そのような状態でも、、」

「むしろそれがいいです」

またしても、お尻に顔を埋めてうんちが食べれる幸運が舞い降りて、私は既におまんこがさらにジュルジュルしてきたのでした。

第１４話

「わかりました　。では、ミカさん顔をあげてくださいね　。まずはワイングラスをお貸しください。先におしっこを出しますね。」
先程の吉野さんのうんち風味のおしっこを飲み干していたため、喉が渇いていたので、さらにおしっこを飲めるのは、幸運でした。
「ジャーーーー。、、、うん、もうできりましたね。では、どうぞ」
「はい　。ゴクゴクゴクゴク。は～　。美味しくて一気飲みしちゃいました　。」
「そんなに美味しそうに飲んでいただいて嬉しいです　。では、お尻を突き出しますのでお顔を寄せてください　。」

そうして、京子さんも後ろを振り向き、お尻丸見えのナース服から、ノーパンで大きな桃尻を突き出してくれました。ただ吉野さんと違うのは、京子さんはアナルにディルドを入れていました。その理由を聞くと、「私はアナルディルドによるアナル内攪拌によるうんちの品質向上を研究していますので、ミカさんにも被験者になっていただければと思ってます。突き出したアナルに刺さったディルドをズブズブしてから、引き抜いてうんちを食べていただきたいです。」

京子さんにそのように言われ、私はディルドをズブズブと出し入れし、京子さんの気持ちよさそうに喘ぐ姿を見て、私も同じようにされたいし、もっとズブズブしたいって、Ｍ心とＳ心が同時に燃え上がるのでした。
３分ほどズブズブすると、吉野さんが「ミカさん、そろそろ食べ頃になってると思います。ディルドを抜いてみてください。」
吉野さんから、食糞の許可を貰うと私はディルドを抜きました。す

るとアナルはクパァッと開いており、中から美味しそうな茶色い汁が溢れており、ディルドにはうんカスがべっとり付いており、私は無意識のうちにうんカスディルドをフェラするのでした　。

「ハム　ジュルジュルチュパチュパ　。」

私がアナルに刺していたうんちまみれのディルドを美味しそうにフェラする様子を見て、「ふふ　。ミカさんのフェラ顔可愛いですね　。ミカさんなら、看護助手として、ここで働けそうです　。さ、、、ミカさん、、、京子さんのアナルを見てください。美味しそうにクパァって開いて、お汁が出てます　。京子さんがアナル舐めて欲しくてお尻を振ってますよ　？早くしないとうんちが出ちゃって床に落ちちゃいますよ　？」

そう言われて、私は慌てて、ディルドを離して、京子さんのアナルに吸い付くのでした。

「ジュルジュル、ブチュ〜レロレロ、は〜　、美味しい　。ジュルジュル。」

「ミカさん良かったですね　。京子さんのうんちはスタッフ全員に人気で、患者さんからも美味しいって人気なんです　。ミカさん、口をもっと大きく開けて吸い付くとアナルを陰圧にできるのでうんちをいっぱい食べやすくなります。また、陰圧の状態でアナルを舐めると快感が強化されるので、京子さんも気持ちよくなり、うんちもより美味しくなると思います　。」そう言って、新たなテクニックを教えてもらうとそのようにしてみると、京子さんの美味しいうんちが口にゆっくりと入ってくるのでした　。

「ん　!!　すほいふほふへふはふへ、ふひーひーへおいひいへふ」

京子さんのうんちは極太でありずっしりとした重みがあって口の中がいっぱいでした。形があって固いかと思いましたが、クリーミーで舌で転がすと溶けてしまうような新食感で、食欲をさらにそそらせるのでした。京子さんの極太うんちは私の口だけでは収まりきら

ず、食べかけの吉野さんのうんちがのったお皿にどっさりと落ちるのでした。

「は～、、ミカさん、いかがですか？いっぱい出してしまってすみません＾＾；」

「いえ　、京子さんのうんちもすごく美味しいので　　。いっぱい食べれるので嬉しいです　。」

私は口に出された京子さんのうんちをもぐもぐと深く味わったのち、飲み込んでから京子さんにうんちのお礼を言いました。

「あ、ミカさん、、また出そうです＾＾；。少しドロドロしてそうです、、我慢できないので、急いで口つけてください＾＾；」

「‼　はい＾＾；。ハム　。いふへほはひへふははい　」

「ミカさん、ありがとうございます　。出しますね？う～ん。ブリュブリュ。」

「ん～　。ふふふ。ヌチャヌチャ。ンクン。口からはみ出てお皿にも出ちゃいました　。ドロドロしてますが、のどごしが良くてこれも美味しいです　。こんなにいっぱいのうんち、食べていいんですか？」

「はい　。私のも京子さんのもいっぱい食べてくださいね

では、そろそろ施術準備をしますので、ミカさん、京子さんのアナルのお掃除をしてあげてください。」

吉野さんに促され、私はうんちでドロドロになった京子さんのアナルを綺麗に舐めるのでした。

レロレロと舐め、時に垂れてきた汁をジュルジュルと吸い、いつまでも舐めたい欲に駆られつつも、「ミカさん、京子さんのアナルがすごく美味しくて離せないのね　。でも、そろそろ飲尿検査を始めましょ　？私もミカさんのイキ潮を飲みたいですから　。」

と吉野さんに言われ、泣く泣く京子さんのお尻から口を離し、これから始まる飲尿検査の快楽に身を委ねる準備をするのでした。

お尻を離したことで、自由になった京子さんは、私の後ろに回って、吉野さんと打ち合わせを始めました。

「では、京子さん。私はミカさんのおまんこの施術を行いますので、京子さんはミカさんのアナル拡張術をお願いします。」

「わかりました。ちなみに、吉野さん、拡張術の際に掻き出したうんちや自発排泄されたうんちはどうしますか？」

「研究サンプルに1部残しておいて、あとは京子さんが召し上がってください。私にも少し残しておいてくだされればいいので　。」

「はい　。わかりました。では、ミカさん、お尻を突き出して四つ這いになってくださいね　。パンツは邪魔になるので外しちゃいますね。」

「あ、京子さん、ミカさんのパンツですが、検査に回すので、カットしておいて下さい。」

「わかりました。ではミカさん、これからパンツを切って外しますね　？」

そう言って、京子さんは、私のパンツを切り、私は帰宅時にノーパンが確定したのでした。

「さて、お尻がむき出しになりました。吉野さん、吉野さんのうんちを少しいただきますね？ミカさん失礼します。」

そう言って京子さんは吉野さんが出した分のうんちを少し掴むと、パクッと口に入れました。「モチュモチュ。ンクン。うん　。美味しい　。これならミカさんのうんちをさらに美味しくする触媒ローションにできそうです。では、ミカさん、もっとお尻を突き出してください　。」

京子さんは、吉野さんのうんちを食べて、うんちの状態を確認し良好であると判断したようでした。それを使って、私のアナル拡張が始まろうとしています。

「では、ミカさん、今からおまんこの刺激を開始していきますね。

チューブは私が咥えています。おしっこが出そうだったり、イキ潮が出そうな時は何時でも言ってください。」そう言って、チューブを咥えた吉野さんは私のおまんこを待ったなしで責め始めました。

「ビクン、、あん　　。」

吉野さんの優しくも、いやらしいおまんこ責めに、私は体をビクッとくねらせてお尻を引っ込める動きをしてしまいました。すると京子さんは、それに対して制するように私のお尻をベシンと叩いたのでした。

「ベシン。ミカさんお尻を引っ込めちゃダメじゃない。私が舐めれないでしょ?こんなに美味しそうで可愛いアナルして、私に舐めさせないなんて意地悪な子ね　。ベシン。もっとお尻を突き出して　。アナルをヒクヒクさせて、美味しそうな良い匂いを嗅がせなさい　。」

「あん　　。京子さん、ごめんなさい。でも、気持ちよくて、、、。」

「もっと、気持ちよくならないと、美味しいうんちをいっぱい出せないわよ?ミカさんの可愛いアナルで出したうんちを私に食べさせなさい　。ベシン。早く美味しそうなお尻を私の顔に突き出して　。」

京子さんの優しいS責めに少し怖がりながらも、もっと気持ちよくなりたくて、お尻を突き出すのでした。

「ミカさん、あなたのアナル、やっぱりすごく美味しそうないい匂いがするわ　?ハム　。レロレロ。チュルチュル。」

「あーーー　。」

「ふふ　。感じちゃったのね　。可愛いわミカさん　。京子さん、ミカさんのアナルの味はいかがですか　?」吉野さんは咥えてたチューブを離して、京子さんに尋ねました。

「レロレロ。ジュルジュル。よひほはん、ジュルジュル。レロレロ、ミハハンほアハフ、ジュルジュル。ふほふおいひいへふ。ジュルジ

ュル　。」と、京子さんが私のアナルを舐めるのを止めないで話している様子を見て、「ふふ　。京子さん、ミカさんのアナルが美味しすぎて、口を離せないのねえ　。これはうんちも楽しみですね　」と私のうんちの期待度が高まるのでした。

第15話

京子さんが私のアナルを夢中で舐めすすって10分ほどは経ったでしょうか。その間には私もマン汁がドバドバと出て、吉野さんが鼻歌交じりに私のおまんこ責めを強めてきました。

もう気を失ってしまいそうな状態になった時、京子さんは私のアナルから口を離し、次の施術の準備に入るのでした。

「ミカさん、あなたのアナルすごくトロトロして柔らかくなったわよ。そろそろ指を入れていくわね？特別なローションを使うためにも少し拡げないといけないから。」

そう言って京子さんは私のアナルに指を入れてズブズブとしはじめたのでした。

「ズブズブ。あ～。暖かくて気持ちいい。ズブズブ。もっと可愛いお尻突き出して自分でお尻振って、自分でズブズブしてみて？。そう。上手よ。お尻の穴で私の指をフェラチオしてるみたい。可愛いわ。お尻叩かれて気持ちよくなってるの気付いてるわよ？ベシン。もっとアナルジュース飲みたいからいっぱい垂らして？ベシン。じゃー、ミカさん、2本目入れるわよ？1度指抜いて、検査するわね。」

そう言って京子さんは指を引き抜きました。自分でもわからないですが、私はその指を抜かれまいとお尻の穴に力を入れつつ、抜かれそうな指に合わせてお尻を動かしたのでした。

「やだ。ミカさん、それじゃ指抜けない。あん、でも、指が締まって気持ちいいわよ。」そう言いつつも、京子さんはブリュンと私のアナルから指を引き抜きました。「スンスン。ん～。抜いた指からミカさんのうんちの美味しそうないい匂いがしてる。カスも少し着いてるわね。いかがですか吉野さん。」

そう言って、吉野さんに声をかけると、2人で私のアナルに入れて

いた指をフェラするかのように舐めしゃぶると2人揃って「美味しい」と言ってくれたのでした。

「ミカさん、今度はアナルの検査よ。トロトロ度と味のグレードチェックになるから、またお尻を突き出して、私が舐めやすい体勢になって。私が口をつけたら少し踏ん張ってアナルジュースを出すのよ？」

そう言われ私はこれでもかと言うくらいにお尻を突き出し、京子さんの次なる指示にドキドキするのでした。

「いやらしい子。吉野さん、ミカさんのマン汁具合はどうですか？」

「ん～。いい具合です。そろそろイキ潮させちゃいましょう。私も喉乾いてしまいましたし。」

「そうですね。私もお腹すいてきました。じゃー、ミカさん。今からイキまくってもらいますね？じゃー、ミカさんのアナルいただきます。レロレロ。ジュルジュル。」

吉野さんと京子さんは2人で示し合わせると私を苛烈に責めるのでした。

「ん～　レロレロジュルジュル。おいひい。ジュルジュル。ミカさん、あなたのアナルジュース最高よ（´ロ`）～♪。」

「あ～、羨ましいわ～京子さん、美味しそうなアナルジュース、私も早くイキ潮ジュース飲みたいわ。早くいっぱい気持ちよくなって、潮ふいて、うんちいっぱい出して私たちに食べさせて？」

「あ～。き、、気持ちいいれふ、、、んにゃ、、、」

「ん～ジュルジュル。あ～。アナルジュースいっぱい出てきてる。ジュルジュル。」

「んにゃ～。ん～、あん、あ～～～、、」

私はとても気持ちよくなって、アナルを貪られる刺激とおまんこを苛烈に責められる刺激により、潮を吹くと同時に盛大にオナラを出してしまったのでした。

「ぶーぶりゅぶりゅ。びちゃびちゃ。」

「ん～　。ジュルジュル。ンクン　。あ～、すっごく美味しいウン汁混じりのアナルジュースだったわよ　？いっぱいオナラ出して、気持ちよかったのね　？いい子よ　？これでうんちの掻き出しもできそう　。吉野さん、イキ潮の方はいかがですか　？」

「ん～　。ンクン　。いっぱい美味しいのが出ましたよ　。これなら、検査に回しても十分に私たちで美味しく飲める量が確保できそうです　。京子さん、そろそろ私たちもお腹すきませんか？ミカさん、私たちにご馳走してくれませんか？」

「そうですね　。吉野さん、そろそろ私たちもお腹すきましたし、少し早いですがランチにしましょう　。じゃー、ミカさん、ベシンベシン。お尻突き出して　。気持ちよくなって、おならもいっぱい出して、うんちがどんどん出てきかけてるのわかってるのよ　？」

「そうよ～。チュ　。叩かれて赤くなったお尻が気持ちよさそうに震えて可愛い　。チュ　。美味しいうんちいっぱい出せるようにお尻にキスしてあげる　。チュ。じゃー、京子さん、マン汁採取器を外しますね　。それで、私の顔に顔面騎乗させましょう。京子さんがうんちを描き出してる間におまんこを舐めしゃぶってソフトな刺激を与えようと思います。掻き出したうんちはお皿に乗り切らなかったら、私の口に溜めてもらって大丈夫です。」

「わかりました吉野さん。吉野さんのお口に溜めたうんちは独り占めしないでくださいね　。つまみ食いはいいですが、後で私にも分けてくださいよ　？」

「わかってますよ、京子さん　。後でマン汁ジュースとうんちで2人で昼食に行きましょう　。」

「では、吉野さん横になってください。じゃーミカさん、ベシン。吉野さんにあなたのおまんこを振舞って差し上げて　？ベシン。吉

野さんの顔を跨いでおまんこを吉野さんのお口に押し付けて、食べていただきなさい。ベシン　？そう　。その体勢よ　？そのまま私に向けて可愛いお尻突き出して　？美味しそうなうんちの匂いがいっぱい吉野さんと私が、かげる様にしてくださいね　？ベシン。」

「あん、、、気持ちいいです、、、　。」

「ん～　。美味しそうないい匂い。じゃー、うんちいっぱい描き出すから、ちゃんと踏ん張るのよ？ズブズブ、ズブズブ、ブリュンブリュン　。」

「あ～、、、気持ちいい　。」

「ん～ジュルジュル。いいわ～　。ミカさんのおまんこおいひい　。きょうほはん、いっはいうんひはひだひへ　？ジュルジュル。」

「吉野さんがもう待ちきれなくなってるみたい　。ミカさん、うんち、、、いっぱい描き出すから、逃げちゃダメよ　？ズブズブ。お尻を突き出し続けて、踏ん張る力を入れ続けるのよ？ちゃんと頑張ればきっと美味しいうんちが出せる雌豚になれるからね　？そうしたら、毎日私たちのうんち食べれるし、私たちもあなたが美味しいうんちを出せるよう管理できるから　。ふふ。他の患者さんや職員がもうあなたのうんちの匂いを嗅ぎつけて食べたそうにしてるわ　。ズブズブズブズブ。」

「あん　あ～、、、ブブブ～。気持ちいい　。」

「ん～　。ジュルジュル。おまんほおいひふなっへふわよ～　？ジュルジュル。おなはもいい匂い　。ジュルジュル　。ンクン　。マン汁がすごく美味しくなってる　。は～、京子さん、私もう、ミカさんのうんち食べたくて仕方ないです。掻き出して私に食べさせてください　。ジュルジュル。」

「吉野さんも、待ち切れないみたい　。私も今のおならで、早くあなたのうんちを食べたくなったから、今からうんち掻き出してくわよ？ちゃんとお尻を突き出して踏ん張るのよ？ズブズブズブズブ。ペシンペシン。」

吉野さんは私のおまんこをジュルジュルと舐めすすりながら、私の

おならの匂いを嗅いで、食欲が増したようでした。私のうんちをせがみ、京子さんはそれに応えるように、苛烈に私のアナルをズブズブしつつ、私のお尻を叩きました。そうして私のうんちを美味しく仕上げてくれるのでした。

「あ～　。うんちの感触がしてきたわよ　？偉いわ　。ちゃんと踏ん張って出そうとしてるのがわかる　。ベシン。お尻叩かれて気持ちよくなる雌豚ちゃんはお尻を叩くとうんちが美味しくなるのよ　？いっぱい叩いて欲しかったら自分で腰を動かして、私の指を自分で押し込みなさい　？ベシン。いっぱい腰動かしたら、吉野さんもいっぱいおまんこを美味しく舐めれるんだから、頑張るのよ　？ベシン。」

そう京子さんに言われた私は、雌豚と言われたことにゾクゾクしておまんこが濡れたのを感じました。その罵る言葉に気持ちよさを感じ、吉野さんの貪るようなクンニと京子さんのアナル責めが加わることで、私は自分がうんちを食べたい変態であると認識しただけでなく、美味しいうんちを作るための雌豚になりたいという欲求が芽生えたのを感じたのでした。

「ん～　。ジュルジュル。ミカさん、今マン汁溢れてきたわよ　？そう、その調子　。今から、美味しいマン汁と美味しいうんちを出すことだけ考えて気持ちよくなるのよ　？ジュルジュル　。」

「吉野さん、ミカさんのマン汁が溢れたんですね　。ミカさん素晴らしいわ　。ズブズブズブズブ　。ベシン。今、うんちが来はじめてるわよ　？いっぱい頑張って踏ん張りなさい　？ズブズブズブズブ　。ベシン。」

「はい～　。いっぱい～　踏ん張ります～　。」

私は頑張って踏ん張りました。すると、うんちを出したい気持ちがどんどんと強くなりお腹が動く音が聞こえました。すると、おならも出てきて、京子さんの歓喜する声が聞こえました。

「あ～　。お腹動いてきた　。いい音もして、ますます美味しそう

なおしりになったわよ　。ズブズブズブズブ。あら?。あ　。きたきた　。大きいのが来たわよ　。掻き出して細々させちゃうのはもったいないわ　。ミカさん、指を抜くからいっぱい踏ん張りなさい?私と吉野さんが口で全部受け止めるから安心して全部出すのよ?」

そう言うと、京子さんは私のアナルから指を引き抜きました。４本は入っていたでしょうか。

私のアナルは京子さんの指を最後までしゃぶりつくように締め付けていました。もう京子さんの指無くしては生きて行けないかもしれません。指だけでは満足出来ず、足も入れてもらいたくなるかもしれませんが、そんな日が来ることを楽しみに思うのでした。

「やん　。ミカさん、あなたのアナルってやっぱり私の指を美味しいってしゃぶってくれるいいアナルちゃんなのね　。後でいっぱい浣腸とか極太ディルドも入れてあげるからね　?あら　。嬉しそうにヒクヒクして可愛い　。もうウン汁もたれて美味しそうな匂いもして、私たち我慢できないから、いっぱいだすのよ?では、吉野さん、私が先にアナルを口で吸引します。いっぱいでてきて私の口から溢れると思うので、そしたらすかさず、吉野さんもアナルに吸い付いてくださいね」

そんなやり取りを聞いてると、私のうんちがそんなに2人にとって高級なものになるのかと嬉しく思うと同時に、私も皆さんのうんちを高級なチョコレートよりも美味しいと思ってはいるので、似たもの同士なのかもしれないと思うと、このクリニックに来て良かったと心から思うのでした。

「じゃー、ミカさん、私あなたのアナルに吸い付くから、いっぱい踏ん張って美味しいうんち出すことだけ考えるのよ　?では、いただきます　。アム　。」

そう言って、私のお尻をガシッと掴むと口を大きく開けて、アナルを舐めてくれました。

「ジュルジュル。ジュルジュル～。レロレロ　。ハ～おいひ　。ジュルジュル　ンクン。ベシン。もっとお尻突き出して　。引っ込めたら、うんち食べれないでしょ　？」

京子さんは私のお尻をガシッと掴んだまま再び自分の口に引き寄せ、尻穴に舌を突っ込むと、中をほじくるように舐めなすすりながら、美味しいと言って私のお尻を叩いて、刺激を入れて気持ちよくしてくれるのでした　。

「ブー　。」そんな音を立て、ついに私は最高の排泄を体験することになるのでした。

「ん～。アム　。うんひいっはい　。よひほはん、いいへふは　？」

「はい　。私が今度変わります　。その間に食べていただければと思います。では、ミカさん　今度は私もいただきますね　？アム　。ん～　。ほんほひおいひ～へふへ～　。ひょうほはん　。いっはいへへはふ　」

「モグモグ　。ンクン　。美味しかったわよミカさん　。いい子　。まだまだ出そうね　。残りはお皿に出しましょうか　。吉野さん。お皿に残りを出してしまいましょう　。じゃないと吉野さんもうんち飲み込む暇がないでしょうし　。」

「ひょうほはん、あいはほう　」

吉野さんが私のアナルから口を離しても私はうんちを出し続けるのでした。

「吉野さん、最高のうんち製造奴隷にできそうですね　。」

「はい　。でもそれだけじゃなくて、マン汁製造奴隷にもできそうなので、今後が本当に楽しみです　。あら、まだまだいっぱいでそうですね。残りは1度ドクターにも食べていただきましょう　。ミカさんも疲れてしまったでしょうから、1度寝てしまって大丈夫ですよ　。」

その声を聞き、私はゆっくりと目を閉じるのでした。

第１６話（前書き）

妄想炸裂です。
今後の話の展開は
生物学的にちゃんとした女性のふたなりっこで妊娠能力はないが、精液の量や味、香り（ミカさんたちが好きな不潔系の展開）を改良し続けた、３人娘とスカトロやゴックンを楽しむ展開やドＳ看護師さんとドＭハーフ姉妹の流血系スカトロ（おまんこに針刺したり、縫ったりをするプレイで流血おまんこを美味しく舐めるドＳ看護師に流血まんこの美味しさを教えられる展開を検討。いけるか（　▽　；）？）

第16話

私が目を覚ますと、ベッドに仰向けで横にされていました。傍には吉野さんと京子さんがいて、吉野さんと京子さんは2人で、見知らぬ患者さんを四つ這いにさせて、アナルとおまんこを色々なチューブが繋がっていいる不思議なペニバンを装着してサンドイッチ体位で責めていました。

吉野さんは私が目を覚ましたのを確認すると

「あ、ミカさん目が覚めたんですね。すみません、実は今、急変患者さんの対応をしているんです。美味しいうんちミルクを作りたいという欲求が強い浣腸好きなすずなさんという方なのですが、イチゴミルク浣腸オナニーをしていた際に気持ちよくなりすぎて、おもらしをしてしまったため、急遽サンドイッチ体位でおまんことアナルにペニバンで栓をしつつ快楽刺激を入れて、マン汁を大量分泌させながら、アナルを攪拌してイチゴウンチミルクを製造してるんです。美味しく撹拌できるまでには少し時間がかかりますので、待っててくださいね。」との事で、すずなさんという方を勢いよくパンパンと音を立てながらおまんことアナルをペニバンで犯していました。そんな様子を羨ましく思ってみていましたが、体のあちこちが気持ちよく感じることに気づき、まじまじと自分の体を見回すと、私の両方のおっぱいを舐めてくれてる看護師さん2人と、おまんことアナルを舐めてくれてる首輪をつけた女性、足指をしゃぶって舐めてくれてる猫耳猫しっぽの2人の女性がいるのに気が付きました。先程から快感を感じっぱなしで、感覚が鈍くなったのでしょうか。少しびっくりして周囲を観察してると一人の女性が声をかけてきました。

「目が覚めましたか　？先程、あなたのアナルからすごく美味しそうな臭いがして、いてもたってもいられず、私たちもあなたを舐めたくなって、とりあえずおっぱい舐めに来てしまったんです　。他の患者さんの施術中だったんですが、、、あなたのうんち美味しそうな臭いしててつい　。初めまして。私は看護師のみなみと言います。そっちで、おっぱい舐めてる私と同じ顔した看護師はゆみなって言います　。双子なんです　。」

「初めまして　。ゆみなです。後で私たちのうんちも食べさせてあげますね　。」

そう言って、双子の看護師さんは2人で自己紹介を終えると、私のおっぱいを美味しそうにすすって甘噛みしました。私がパンパンと聞こえる吉野さんの方を見ていることに気付いたみなみさんは優しく乳首を啜りながらもチュポンと音を立てて乳首を口か離しました。そして、

「ミカさん、吉野さん達が気になっているみたいですね。ミカさんもおそらくサンドイッチ療法を行う機会があると思いますから、楽しみにしてくださいね　。あのサンドイッチ療法で使われているペニバンは特殊なんですよ　。」と言って詳しく教えてくれました。

「説明をすると、吉野さんがつけているペニバンにはマン汁吸引作用があり、マン汁がジュルジュルしたら、吸引をして溜めてくれるんです。吉野さんにもおまんことアナルにもディルド状チューブが繋がっていて、マン汁採集しながら吉野さんも気持ちよくなれるようになってます。京子さんがつけているペニバンもペニバンを固定するために京子さんのおまんことアナルにチューブが繋がったディルドが挿入された状態になってるんです。イチゴミルクが入ったタンクからイチゴミルクを吸引して京子さんのアナルに一度注入して、京子さんのアナルで1度攪拌されて京子さんのうんちが混ざった状態になるんです。今度は京子さんのアナルから吸引されたイチゴミ

ルクうんちがすずなさんに注入されるようになってます。直接イチゴミルクをすずのさんに注入すると、うんちの風味が薄れてしまうので、京子さんのお腹でうんちと混ぜてから、すずなさんに注入しているんです。パンパンと責めることで攪拌作用も高まって、美味しいイチゴミルクうんちを気持ちよくなりながら作れるんです　。後で、飲めるように吉野さんに言っときますね　。」そう言って、楽しそうに言いながら、私のおっぱいをジュルジュル吸い、再び状況説明をしてくれるのでした。

「あなたのおまんこ舐めてるのはゆかりさんていいます。彼女は母乳を出せるようになりたい雌牛願望のある患者さんです。あなたのおまんこの臭いで発情してしまい、連れてきたんですが、我を忘れておまんこ舐めてますね　。後で彼女のミルクを絞りますので、飲んでみてください　。目がシャキッとしますよ　？」

とみなみさんが言いました。すると、ゆみなさんが「なら、そのミルクにあの二人のうんちを混ぜて見ませんか？ミカさんの足指や足裏を美味しそうに舐めてる猫耳の二人は花さんとユナさんです。アナルの連結欲求が強い子達で、太いチューブでうんちを交換し合うのが好きな子達なんです。実は、連結交換されたうんちは味が良くなることもわかっていますので、ぜひ後で食べてあげてください　。ミルクと混ぜるとマイルドで美味しいですから　。」と患者さんの紹介をしてくれたのでした。

私はおっぱいとおまんこ、足指を舐められて、ふわふわした気持ちよさを感じながらも、ベッドから体を起こし端に座ると呼吸を整えるのでした。

そんな私の様子を見たみなみさんは私を立たせて気持ちよすぎてフラフラする私を支えながら、とある特殊な椅子がある場所まで案内しました。その椅子はリクライニングチェアのようですが分娩台の

ように足部分が二股に別れていて、なおかつ便器のように座面に穴が空いていました。そのリクライニングの手すり部分の近くにはリクライニングチェアにあう程よい高さのテーブルがあり、ワイングラスが複数個置いてありました。椅子としてはさほど高くなく寄りかかってくつろげる背もたれがあり、３０ｃｍ程度の高さの椅子でした。するといつの間にか、そのリクライニングの座面からゆみのさんがひょっこりと顔を出しているのが見えました。

みなみさんはゆみのさんがリクライニングチェアから顔を出したのを確認すると私に「まずは、この椅子に座ってもらってもらいますね。この椅子に座って貰ってる間にゆみのがミカさんのおまんことアナルを舐めて、ミカさんのおまんことアナルをジュルジュルにさせていきます。ジュルジュルになることで、マン汁やウン汁、うんちも美味しくなっていきます。また、足舐めも同時にに行うことで、おまんこの感度が上がり、マン汁があふれやすくなりますので、この子達には継続して足を舐めさせますから足を少し浮かしてあげてくださいね」そう言って、みなみさんは私をリクライニングチェアに座らせると、猫耳猫しっぽの花さんとユナさんを呼び寄せました。そして四つ這いで近づいてきた2人は再び私の足を美味しそうに舐めてくれるのでした。続いてリクライニングチェアの背もたれを倒し二股に別れた足の座面の間にゆかりさんを立たせました。

みなみさんは、ゆかりさんの大きくて美味しそうなおっぱいが見えるように私の前に立たせました。そして、ゆかりさんを後ろから抱きしめて、おっぱいを左手で揉みしだきながら右手でおまんこをぐちゅぐちゅいじりながら、ゆかりさんに話しかけ始めました。

「ゆかりさん、ミカさんにそのいやらしくて綺麗な形のおっぱいを見せてあげて?は〜。すごく柔らかいのに張りもあって、美味しそう　。おまんこもジュルジュルさせて。いい子ね　　。ハムレロレ

ロジュルジュル　。おっぱいも少ししゃぶっただけで、ミルクがいっぱい出て、美味しいわよ　？」そう言って、みなみさんはゆかりさんのおっぱいを左手でゆかりさんの左おっぱいを揉みながら右おっぱいに吸い付き、右手でのおまんこぐちゅぐちゅは止めずに、美味しそうにおっぱいを舐めしゃぶり、ごくごくと飲み、口を離すと口からミルクが滴るのでした。

私はと言うと、リクライニングチェアに座ったと同時に、ゆみのさんに猛烈におまんことアナルを啜られ、気持ちよさに体を起こす余裕が無い私は、目の前で美味しそうに揉まれて、飲まれているおっぱいやぐちゅぐちゅになってるおまんこを舐めれないもどかしさで、さらにおまんこが濡れるのでした。

「チュルチュル～。チュポン　。ん～　。美味しい　。いっぱい母乳出るようにホルモン注射をして大きくしたおっぱいはすごく美味しいわ　。ミカさんにも舐めさせてあげましょう？いっぱい舐めてもらっておまんこぐちゅぐちゅにしたら、マン汁とミルク出して飲ませてあげましょうね　？ゆかりさん　」

みなみさんはゆかりさんのおっぱいを私の目の前で見せつけるように、そしてぐちゅぐちゅのおまんこをさらにぐちゅぐちゅの美味しそうなおまんこに仕立てて、みなみさんもおっぱいのやわらかさを感じながら気持ちよさそうに揉みしだき続けていました。

そんな時、「ブリュブリュ～。ジュルジュル～。」ゆかりさんのお尻から素敵な音色が聞こえたとともに、美味しそうな香りがしたのに気づきました。それにみなみさんも気付いた様で、おまんこぐちゅぐちゅさせていた右手とおっぱいを揉みんでいた左手を離すと、ゆかりさんのお尻を両手で優しく撫でる様に触り、割れ目を優しく開くようにアナルをちらっと見るとみなみさんは嬉しそうに満面の

笑みでゆかりさんに話しかけるのでした。

「ゆかりさん、すごい可愛い音がしたと思ったら、もうだめじゃない　。ミカさんにミルクを沢山飲ませてあげようと思って、おっぱいミルクがもっと美味しくいっぱい出せるようにおっぱいを揉んであげたうえに、おまんこも赤く充血させてマン汁がドバドバ出る舌触りのいい美味しいおまんこに仕立ててあげようと思ったのに　。もっと美味しそうなのがお尻から出てきてるわよ?もう　。ゆかりさんのでっかくて可愛いすべすべのお尻がすごく美味しそうになってるわよ　?スンスン。

は～ん。いい臭い　。仕方ないわね　。少し検査をするから、私が顔を埋められるようにお尻を可愛いく美味しそうに見えるように突き出してごらんなさい?」そう言って、みなみさんはしゃがみこみ、ゆかりさんのお尻を突き出させて、お尻の状態を確認するために顔を埋めるのでした。

そして、ゆかりさんはお尻を突き出した際に、みなみさんにもっと検査をしやすいように、うんちが出るのを我慢しながら、ヒクヒクしたアナルを押し付けるように、お尻をみなみさんの顔に突き出すのでした。そして、ゆかりさんのお尻に顔を埋めて、アナルに舌を伸ばしたみなみさんは「スンスン。ん～　。ふふふ　。レロレロジュルジュル。あなふはひふひへへ、おいひい　ジュルジュル。ゴクン。あ～ん。ウン汁が出てきてアナルも舌触りが良くてすごく美味しいわ　。ペチン。ん～ジュルジュルレロレロジュルジュル。うんひのあひあひへふはふへすほいおいひいい　ジュルジュル。ペチン。ん～レロレロジュルジュル。もっほおひひをふひはひへ?」

ゆかりさんは舌をアナルに押し付けながら話しているみなみさんの指示を正確に聞き取ったようで、さらにみなみさんの顔に向けてお尻を突き出しました。そして、そこで限界を迎えたゆかりさんは「

ピュビュ～」っと少量のドロドロうんちを漏らしてみなみさんの顔を汚したのでした。

「あ～ん　。おいひいジュルジュル。ゴクン。ウン汁溢れて可愛いお尻。ムチムチして大きいのに太ったお尻じゃなくてモチモチすべすべで、すごく綺麗なの羨ましいわ。ゆかりさん、レロレロジュルジュル。ゴクン。マン汁もおまんこもぷっくりして美味しくなってる　。は～いいわ　。もう少し私の顔にお尻突き出してウン汁飲ませて　?ジュルジュル　。そう　。もっと突き出しｔ、、あん　!!　（うんちを浴びる）、、、もう　。またドロドロうんちがぴゅって出てきたわよ　?私の顔にかかったじゃない　。もう　。」

そう言って、顔にかかったうんちを指で拭い、舐めとると、ゆかりさんの突き出された爆発寸前のアナルを眺めながら考え事をしたみなみさんは、ゆかりさんのお尻をペチンと叩き、次なる支持を出したのでした。

「ん～。このドロドロうんちを美味しく食べるにはやっぱりお尻のラインが美しく見えるアングルが1番いいわよね～。ペチン。仕方ないわね　。ゆかりさん、ミカさんにうんちを美味しく食べていただけるように、ミカさんのリクライニングに合わせて調整してある踏み台を用意するから、その台に乗ってミカさんの方にお尻を向けてお尻突き出してあげてくれるかしら?」

その様に、みなみさんに指示されたゆかりさんはうんちが刺激で漏れないようにゆっくりと、みなみさんが準備した台に乗り、私に向けてゆっくりとお尻を突き出して美味しそうなアナルを私に向けてくれたのでした。

みなみさんは私の顔の方に回り込み、私の目線でゆかりさんのお尻の向きや突き出し具合を確認するとゆかりさんの横に立ちスパンキ

ングをしながらゆかりさんのお尻を美しく見える角度でさらに私の方へ突き出させました。

「ペチンペチン。ほらもっと右よ?そう。その位置でお尻突き出して。ペチン。引っ込めちゃダメよ?ペチン。せっかく臭くて美味しそうなドロドロうんちが大きくて形も綺麗いな美尻から漏れて、すごく美味しそうな

デカ美尻になってるのよ?ペチン。その状態を保ちながら、もっとうんちを食べやすいように突き出さないとダメないじゃない。ペチンペチン。」

「あん、叩いちゃダメです、、気持ちよくて出ちゃいます　　。うんち出ちゃい、、、ます、、」

ゆかりさんはお尻叩かれながらも、一生懸命我慢してくれました。それでもピュルっと少量のうんちを漏らしてしまっていましたが、うんちが太ももをデコレーションすることになり、さらに美味しそうなデカ美尻になったのでした。そんな究極のデカ美尻を美味しそうに私に向けて突き出し、最高に綺麗な形のデカ美尻が最高に不潔で臭く汚い下痢うんちによってデコレーションされることで、食欲をそそる美味しそうなお尻へと変貌し、続いて最高に美味しそうに見えるベストアングルがみなみさんによって定められました。そして、私がうんちを美味しく食べるための最後の検査をするため、私が舐める前にみなみさんが顔を埋めてうんちを食べて状態を確認するのでした。

「ん〜。いい眺めだわ〜　　。綺麗でふわふわしたお尻なのに、ドロドロの下痢うんちが漏れてて。スンスン。蒸れたお尻のいい臭いとうんちの臭さが相まって、食欲をそそるだけじゃなくて、おまんこも濡れてしまう最高の香りよ　　?味はどうかしら。ネチョネチョ。ジュルジュル。ベチョ。チュルチュル　。あー、美味しい　。やっぱりデカ尻で、形もいい美尻から直にうんちを食べるのって、

すごく美味しいわ　。下痢うんちならなおさら美味しいわね　。尻肉にちょうどよく見えそうで見えない状態に隠されるアナルを舌で掻き分けて舐めすする時のジュルジュル感と尻肉に顔が挟まれた時の包容感、尻肉の間の汗ばんで蒸れた臭いは格別だわ　。ん～。レロレロ。チュルチュル。ジュルジュル。ゴクン　。舌で刺激して漏れてくるウン汁。ホントに美味しい　。ミカさん。ゆかりさんお尻とのうんちは格別に美味しい状態になりましたよ？ゆかりさん、ちょっとドロドロしてるから、いきんじゃダメよ？ミカさんが美味しく下痢うんちを飲めるようにゆっくりだしながら我慢するのよ？」

そう言って、私のリクライニング角度も調整し、私の口とゆかりさんのアナルまでの距離はゼロ距離となり、私はゆったりとリクライニングチェアに体を預け、ゆみなさんにおまんことアナルをジュルジュルと激しく舐めてもらい、花さんとユナさんに足指をしゃぶって貰う快感を味わいながら、ゆかりさんのアナルの香りとうんちを美味しく食べる準備が整いました。やっぱりデカ尻で形のいい美尻はそれだけで美味しそうです。

「ゆかりさん、ミカさんに少しでもいっぱい美味しいうんちを食べてもらうんだから、少しづつ出すように我慢するのよ？じゃー、最後の微調整をするわよ？もう少し突き出しなさい？、ペチン。もっと。少し腰を上げて。ペチン。、、そう。そこでいいわよ？じゃー、自分でアナルをクパァするようにお尻を鷲掴みにしなさい？そう。いい子ね。では、ミカさん、口を開けて舌をでまずはアナル手前の尻肉を舐めて見てください。ゆかりさんはちゃんと「私の臭くて汚いアナルとうんちを美味しく召し上がってください」って言いながら、うんちを出しなさい？」

みなみさんはそう言って、私がアナルを隠す尻肉を舐めやすい体勢になるようにゆかりさんをサポートしました。「では、ミカさん、ゆかりさんのお尻とうんち美味しく食べるためにまずは前菜の香り

を楽しんでください。」そう言われた私はゆかりさんのクパァされたアナルに顔を埋めてスンスンと臭いを嗅ぎ、汗臭い感じと蒸れた臭い、そしてドロドロ下痢うんち独特のいい香りが混ざって、食欲をそそる美味しそうな臭いを楽しみ、食欲を増進させるとヨダレが溢れてきました。スンスンとお尻に顔を押し付けさらにいい香りを楽しむと、ゆかりさんが「私の大きくて臭くて汚いお尻からいっぱい出る臭いうんちをミカさんの為にいっぱい出しますので、美味しくうんちを召し上がってください　。」それを聞いたみなみさんは「では、ミカさん、前菜のお尻の香りを楽しんだら、尻肉の美味しさ味わうためにアナルを隠すようにある尻肉をまずは舐めしゃぶってください。柔らかい肉質と蒸れた臭いとうんち汁が混ざりあってさらに食欲がましたと思います。」そう言われ、私はゆかりさんのお尻のむっちり感と舌触りを楽しむのでした。

「尻肉の美味しさを味わったら、今度は尻肉をかき分けるように舌をねじ込んでください。尻肉に挟まれる感覚がおまんこを濡らしてくれると思います。
アナルに舌をねじ込めたら、ゆかりさんにはアナルをクパァしていただき、下痢うんちをゆっくり出させます。そしたら、私がスパンキングでさらに刺激しますので、アナルのビクビク感と下痢うんちを美味しく楽しんでください　」
そう言われた私は舌を尻肉の向こうへと伸ばしていくと、ゆかりさんのお尻も私を迎え入れるようにさらに突き出され、私の顔を尻肉が包み込み、幸福感をもたらしてくれました。さらに私は幸福感を求めるため、ヒクヒクしてもう限界のアナルに舌を伸ばし、アナルの美味しさを堪能した後、舌をねじ込んで中のうんちを味わおうと舌をうねうねさせるのでした。私の舌がねじ込まれたのを確認したゆかりさんはアナルをクパァっと開いてくれました。ピュルピュルとゆっくりですが確実に私の口の中にゆかりさんの美味しい下痢うんちが出されました。

みなみさんは、ゆかりさんがお尻をクパァっと拡げたのを確認するとお尻をペチンペチンと叩きました。すると尻肉がタプンタプンと揺れながら、私の顔全体を包み込み幸福感を与えると共に、スパンキングの刺激によってアナルからピュッピュとドロドロうんちがリズムよく漏れだし、私は尻肉、アナル、うんちの三大珍味を最高のデカ美尻で美味しく味わうことができたのでした。

スパンキングの刺激をされたあと、ゆかりさんはピュッピュとうんちを漏らし続けてしまい、私の顔もうんちでドロドロになりました。その様子を見たみなみさんは

「ミカさん、ゆかりさんもう我慢できないかもしれません。ゆかりさんにはこのままアナルをクパァっと拡げてもらいますので、口を押し付けてこのまま、ドロドロうんちをごくごくと飲むように美味しく食べてあげてください。その際に美味しく下痢うんちが飲めるようにお尻を叩いて刺激を入れます。おしっこも出てくると思いますので私がワイングラスに溜めていきますね。いいかしら?ゆかりさん。」そうみなみさんに訊ねられたゆかりさんは

「ミカさんはうんちが大好きな変態さんなので、私のずっと洗ってないムレムレでドロドロになったアナルと今にも出そうなドロドロうんちをいっぱい食べさせてあげたいです　。ミカさん、私のお尻の穴に口を開けて押し付けてください、、。　。」

「ゆかりさん、わかったわ　。じゃー、ミカさんにもっとお尻をいっぱい突き出してあげて　?もっと突き出した方がアナルの汚さと臭さが際立って美味しいわよ　?」

そう言って、みなみさんはゆかりさんのお尻をいやらしく、そして美味しそうに見える突き出し方ができるまでお尻を叩いて修正ました。その度におまんこをべちょべちょにさせながら、私に可愛くそして美味しそうなデカ尻を突き出すゆかりさんの姿に、私はドキドキを高め、マン汁をドバドバと垂らし、ゆみなさんが美味しいと言いながらすする事態となるのでした。

「ミカさん、先程のアナルなめの際に気付いたかもしれませんが、ゆかりさんはずっとアナルを洗わずに過ごしてるんです。アナルを美味しく舐めて欲しいという舐めてのことを1番に考えているんです。なので、すごくいい香りがして臭いだけでおまんこ疼いちゃうくらいなんですよ　？

ゆかりさんの無洗アナルを舐めたがる患者さんは多いんですが、かなり美味しくて人気なのでなかなか舐められないんです。ミカさんも気に入ってくれると思います　。ゆかりさんが1週間洗わずにいたアナルはすごく臭くて舐めごたえがあるので、ゆかりさんの臭くて汚いうんちまみれのアナルを美味しいって言いながら舐めてあげてください　。それだけで、興奮して美味しいマン汁も出ますし、アナルやうんちももっと美味しくなると思いますから　。じゃー、ゆかりさん。ミカさんがゆかりさんのお尻を美しく感じながら残りの下痢うんちを食べられるように、顔の前でお尻をふりふりして、お尻の綺麗なラインを見せつけてお尻の香りを振りまいてあげてから、お尻をいっぱい突き出してお口にうんちを出してあげてね　？ミカさんは口を開けて押し付けたら、ゴクゴク飲むようにして食べてあげてくださいね　？」

「はい　。みなみさん　。じゃー、ミカさん、私のデカくて臭いお尻をふりふりするのでし香りを楽しんでくださいね。、、、、。あ〜。出そうです、、みなみさん出そうです。ミカさん口をつけてくれますか?出しますよ?みなみさん、いっぱいおしっこも出そうです、、おしっこワイングラスで受けてください。、、、出る〜ブリュブリュ〜。は〜、は〜、クパァしたアナル美味しく召し上がってくだ、、さい　。」

そう言って、ゆかりさんは私に1週間洗ってないという臭くて汚い美味しそうなお尻を向けて突き出して、臭いが楽しめるようにお尻をふりふりして視覚的にも楽しませてくれました。そして我慢の限界を迎えた美味しいそうなお尻をクパァっと開いて、美味しそうな

ドロドロうんちを私の口に解放すると同時にみなみさんはワイングラスにおしっこを溜めていってくれたため、私は最高に美味しいドロドロうんちを集中して味わうことができたのでした。
そして、うんちを出してもらうだけでは物足りず、お尻を抱き寄せて顔をより押し付けて舌をねじ込みウン汁1滴残さないように猛烈な音をジュルジュルと立てながらアナルを貪るのでした。

「うんちの時に出るおしっこも飲みたいと思うので、おしっこはここにあるワイングラスを私がおまんこにあてて入れていきますから安心してうんち食べることに専念してください、、って、、すごいですね　。お尻を抱き寄せてウン汁すするくらいうんちが好きなミカさん、素敵ですよ　。後で私やゆみなのうんちもおなかいっぱい食べさせてあげますね。」とおしっこを溜めてくれていたみなみさんは私の貪欲さに少し驚きながらも私のうんち好きを肯定し、うんちを食べさせてくれる約束をしてくれるのでした。

「あ～、、、ん、、、すごいです、、、、うんちっもうないです、、、、でももっと吸ってください、、、イク～　。ウン汁出る出る～　」と感じて声を出した、ゆかりさんは、私の口から溢れるような下痢うんちを噴射し、私のワイシャツやミニスカートが下痢うんちで染めるとへたりこみ、私にお尻を突き出したままでした。床に突っ伏すのでした。そんな様子を見ていたみなみさんは「あー。すっごいいい臭い　。最後にこんなに下痢うんちが飛び出したのねゆかりさん。突っ伏してガバガバになったお尻も美味しそうね　。このむっちりしたデカ美尻から出るうんちはやっぱり格別に美味しそうね　。えらいわよゆかりさん　。ご褒美に後であなたの乳首をねじるようにいっぱいミルク搾っていじめてあげるからね　」

「あ～ん。嬉しいですみなみさん、乳首が痛気持ちくなったらどう

かなっちゃいます。。。ど、どうですか?ミカさん、私のお尻とアナル、、は。いっぱいドロドロうんち出ちゃいました。おしっこもいっぱい出ちゃいました。、、、。いっぱい出たドロドロの下痢うんちは美味しかったですか?、、、。おしっこもいっぱい出たので、いっぱい飲んでくださいね　　。」ゆかりさんはそういいながら、突っ伏したお尻を、なおも私に向けてふりふり振りながらアナルをヒクヒクと動かしてくれました。そんな優しい気遣いにありがたく思いながら、美味しそうなお尻を眺めて私はワイングラスになみなみと注がれたおしっこをこぼさないように口に含み、味と香りを楽しながらごくんと飲み込みました。お尻の可愛らしさとうんち臭さや蒸れた香りがゆかりさんがお尻をふりふりすることで漂って来ました。その香りをスンスンと嗅ぐと二口目のおしっこをさらに美味しくしてくれるのでした。

実はゆかりさんはアナルをクパァしてドバドバと下痢うんちを出したかったはずなのですが、私のためにアナルも下痢うんちもドバドバ出すぎないように頑張って調整してくれていました。それにより私は下痢うんちを美味しく飲むことが出来ました。そのため、ゆかりさんのアナルは力を入れて閉めることも出来ないくらい疲れてしまっていました。そんな優しいゆかりさんのお尻を愛おしく見ていると、みなみさんがふと席を立ち、何かしらの道具を探すように棚を物色し、シリンジ浣腸器を手にして戻ってきました。そして、みなみさんはゆかりさんの突っ伏す様な体勢で突き出されたお尻を優しく撫で回して、ヒクヒクしてるアナルをレロレロジュルジュルと舐めると、私にシリンジ浣腸器を手渡し、おしっこのさらに美味しい通な飲み方を教えてくれるのでした。

第１６話（後書き）

次回は、ゆかりさんのヒクヒクアナルにおしっこ浣腸してうんちの残りカスが混じったおしっこカクテルをアナルから直飲みするという展開を妄想中。

第17話（前書き）

このクリニックの従業員と患者さんは全てスカトロ好き。おまんこやお尻、脇や足といった臭う場所も大好きで、特に臭いは臭ければ臭いほど、おまんこが濡れたり、うんちやおしっこを飲食する食欲が倍増するお尻を見ると美味しそうという感情が第1な変態美女の集まるクリニックです。

ゆかりさんの飲尿会が終わると、みなみさんとゆみなさんの2人がうんちを我慢できなくなり、ミカさんに食べさせてあげる会となる予定。

おまんこ舐めのゆみなさんのかわりに、水分補給のためにゆかりさんがおまんこ舐めを担当。

花さんとユナさんはみなみさんとゆみなさんのうんちが大好物なので、足舐めから、一緒にレズ食糞する展開を想像中。そして、花とユナはヤンチャないたずらっ子的なイメージで進める予定。。。。かも。

第17話

下痢便ジュースをアナルから直飲みできた私は、最高に快感を感じ、ゆかりさんのへたりこんだ姿勢で突き出された可愛いお尻を眺めながら、ワイングラスに溜められた美味しいゆかりさんのおしっこを一口ずつ口に含み、風味や味を楽しみながらゆっくりと飲んでいました。ゆかりさんのお尻が可愛いくて美味しそうな臭いがまだまだしていて、私のヨダレはお口もおまんこもとめどなく出ていました。みなみさんもゆかりさんのお尻の美味しそうな香りには気づいているようでした。

ふと、立ち上がり、様々な医療器具が収納されている棚へ剥き出しのうんちまみれな、これまた美味しそうなお尻を見せつけるようにして、歩いて行きました。

みなみさんは棚からシリンジ浣腸器を取り出し、こちらへ戻って来ました。みなみさんは床に突っ伏した状態で「ふにゅ〜」っとなり、ぼんやりしながらも、懸命にお尻を突き出し、ふりふりと可愛くお尻を揺らしながらアナルをヒクヒクさせているゆかりさんに近づきました。ゆかりさんの突き出されたお尻が可愛くて美味しそうに見えて私は絶えずマン汁をや潮をドバドバとだしてしまっています。私のおまんこを美味しそうに舐めてくれているゆみなさんに申し訳なく思い、私の超絶ミニスカートに顔が隠れて見えないですが、お股を懸命に舐めてジュルジュル吸ってくれているゆみなさんに一度謝罪するのでした。

「ゆみなさん、すみません、、、私、ゆかりさんのデカくて美味しいお尻をもっと食べたい気持ちが抜けなくて、、まだまだ漂ういい臭いもツボにハマっておまんこが感じ安くなってしまってるみたい

なんです。さっきからマン汁がドバドバ出たりおしっこやお潮を噴いてしまってばかりで、、すみません。」

「ん～　。ジュルジュル。レロレロ。フォロフォロレロレロ。ンチュ　。ふふふ　。ミカさん気にしなくて大丈夫です　。すごく美味しいので、むしろありがとうございますってお礼を言いたいくらいです　。ジュルジュル。レロレロ。フォロフォロレロレロ。ンチュ　。いっぱい出してくれてるので、私も飲みながらマン汁採集ができて、最高ですよ　」

そう言われた私は再びマン汁を採集されているのかと思い、ゆみなさんに訊ねるのでした。

「吉野さんにいっぱい採取されたんですが、まだ必要なんですか？」

「レロレロジュルジュル。ンチュ～。チュパ。はい　。吉野さんが検査に回していた結果を私も拝見しているんですが、実はミカさんのマン汁やおしっこ、お潮といった液体成分内に女性のクリトリスを敏感にさせて、溢れるマン汁量を増大させる作用があるようなんです。また、食用ドレッシングやドリンク、またはローションとして使えることがわかったんです。なので、私がミカさんおまんこやアナルを舐めて、マン汁を口受けした後に私の唾液をブレンドさせた状態でこちらのボトルに吐き出していたんですよ　？」

そうして、ゆみなさんは2リットルのボトル半分に溜まっている私のマン汁やおしっこ、お潮といった液体成分の集合エキスとゆみなさんの唾液がブレンドされた泡泡でドロドロの美味しそうな液体を見せてくれたのでした。

「ほら、いっぱい美味しそうなマン汁ジュースが溜まってますでしょ　？だからもっといっぱい気持ちよくなってもらって、いっぱいマン汁とおしっこやお潮を噴き出してくださいね　。ん～。ジュル

ジュル。クリちゃんもぷっくりして可愛くてすごく美味しいです　。いっぱい食べさせていただきますね　　？」そう言って、ゆみなさんは再び猛烈なおまんことクリ攻めを行い、私のマン汁をすすり続けるのでした。

気持ちよくなってマン汁や潮噴きで潮っけを失ったせいか、喉が乾き、再びワイングラスのおしっこを飲もうと思い、グラスに手を伸ばそうとした時でした。

床に浣腸器を置いてゆかりさんの後頭部にまたがってしゃがみこみ、お尻を優しく両手で撫で回しアナルやおまんこをネトネト触ることで、ゆかりさんを優しく労うみなみさんの姿が見えました。

「ゆかりさん、偉かったわよ　？ドロドロの下痢うんちをあんなにいっぱい我慢して溜められてたんだもの。すごく頑張ったわね。本当だったらすごくお腹が痛かったはずだわ?それに、下痢うんちを私たちが美味しく飲めるように少しづつアナルを開けたり閉めたりして、ミカさんに美味しく飲ませてあげたんだもの。あなたはやっぱり素敵な牝犬奴隷になれるわ　。お尻も下痢うんちで全体がヌルヌルしてピカピカしてるわね　。ドロドロの茶色いうんちの名残もあるけど、最後に出た水様便のおかげですごくうるおいのある綺麗なデカ美尻になってるわよ　？いい臭いも増して、ますます美味しそうよ　？もっと突き出してごらん　？そう　。いい子　。そのままお尻をふりふりしながら、お尻の穴をヒクヒクさせておきなさい？ふふふ　。そうよ　？あ～　。すごく臭くて可愛くて美味しそう　。デカ美尻の下痢ジュースまみてのアナルいただきます　。アム、レロレロ。ジュルジュル。ん～。ふふふ。臭くて美味しい　。ジュルジュル。ダメよ。もっと突き出すの　。ジュルジュル。ヒクヒクさせて～　。ジュルジュル。踏ん張ってうんカス入りのウン汁ジュース飲ませて　？ジュルジュルレロレロ。マン汁も美味し　。ジュ

ルジュル　。」そう言って、優しくお尻を撫で回したみなみさんは、ゆかりさんのお尻に顔を埋めて、下痢うんちでドロドロテカテカのお尻を舐めすすって、うんち汁とうんカス、マン汁を楽しみ始めたのでした。

「ん～。ジュルジュル。は～。レロレロ。ヒクヒクしたアナルおいひ　。ジュルジュル。ンチュ。ゆかりさん、ンチュ。ミカさんに～。レロレロ。もっと美味しいおしっこの飲み方を～、レロレロンチュ。教えてあげたいのだけど～、レロレロ。いいかしら?ジュルジュル。」

「あ、、ん、、、みなみさ、、ん。気持ちくて、、切なくなっちゃう、、、私も、、、ミカさんにおしっこ、、、美味しく飲んで欲しいです、、」

「ハム、ジュルジュル。ンクン　。お尻のお汁美味しい　。ジュルジュル。良かったわ　。レロレロンチュ。ゆかりさんが、ジュルジュル。そう言ってくれて　。チュルチュル。」

「あん、みなみさ、、、ん、、どうやって、、おしっこを、、美味しく飲むん、、、ですか、、、?」

「ン～、ジュルジュル。チュパ。ゆかりさんの～、ジュルジュル。アナルにね?ジュルジュル。おしっこをね?ジュルジュル。チュー。浣腸して～レロレロジュルジュル。アナルから直に飲むのよ～　?ジュルジュル。ゆかりさん、ジュルジュル。あ～本当に美味しいわ　。ふふふ　。あなたのお尻をもっといじめて、もっと美味しくしてもいい?おしっこいっぱい浣腸して直飲みしていいかしら　?」

「はい、、、おしっこを浣腸して、、残ったうんちも一緒に美味しく飲んで欲しいです、」

ゆかりさんに「おしっこを浣腸して残ったうんちも一緒に美味しく飲んで欲しい」と言われてキュンとした、まさにその時に、ゆみのさんの猛烈な手マン、アナル攻めとジュルジュルクンニで気持ちよさの絶頂を迎え、なおかつ両方の足趾も猫耳の花さんとユナさんに、ぺろぺろジュルジュル吸われる快感もあり、私もふにゃんと、背もたれに沈み込むのでした。

みなみさんの提案で、ゆかりさんにおしっこ浣腸をして、うんちブレンドのおしっこジュースをアナルから直飲みをしようと言うことになり、みなみさんはふにゃふにゃのゆかりさんを立たせて椅子に座らせると、美味しいおしっこ浣腸を飲むのための準備を始めるのでした。私はリクライニング分娩ソファーとも言うべき椅子の背もたれに持たれて気持ちよすぎて起きれない状態になっていました。

その様子を見ていたみなみさんは愛おしそうに微笑みながら、「気持ちよくなってるんですね　。可愛いです。うんちで汚れたワイシャツも、ミニスカートも可愛いですよ　。後で、ワイシャツもスカートも脱いで、美味しそうなミカさんの体をさらけ出しちゃいましょう　。その方がミカさんのいい香りも嗅ぎやすいですし　。おっぱいも舐めやすいですから　。じゃー、オーバーテーブルを持ってきますね。」

そう言って、リクライニング分娩ソファーに合わせたオーバーテーブルを用意してくれました。キャスター付きで高さ調整も可能で、人が3人、４人乗ってもビクともしない頑丈なテーブルを運んできました。そのテーブルを私の体を覆うようにセットし高さを調整しました。そして、椅子で休憩していたゆかりさんを立たせて、テーブルの上に乗らせると、私の方にお尻を向けさせて、そのまま土下座させたのでした。

土下座により、むっちりしたお尻がさらにムチムチしてアナルが際立ち、おまんこもジュルジュルしているのが見え、とても可愛くて美味しそうに見えました。そして、みなみさんはゆかりさんに「ゆかりさん。お尻がすごく美味しそうよ　？もう少しミカさんの方へ下がってあげて？そう　。いいわよ　。そのまま、お尻突き出しながら、足裏もミカさんに見せつけるようにしてあげて　？」

みなみさんの的確な指示により、ゆかりさんのお尻は再び、食欲をそそる美味しそうなお尻へと変貌していくのでした。

「ミカさん、アナルもおまんこも美味しそうに突き出せましたが、まずは、このシリンジでゆかりさんのおしっこを浣腸してあげてください。ゆっくりと浣腸してあげることで、沢山の浣腸ができる分、おしっことうんちカスが混ざりあって美味しくなるんです。熟成に時間かかるので、その間は、ゆかりさんの臭い足裏や足趾の香りを楽しんだ後、足裏舐めと足指しゃぶりをしてあげてください。臭くて美味しいんですよ　？ゆかりさんの足裏　。足裏いっぱい舐めたら、快感によって、マン汁もいっぱい溢れておまんこも美味しく食べられますから楽しみにしててくださいね　。」

そう言って、私におしっこいっぱい入ったシリンジを手渡すと、「ではミカさん、おしっこ浣腸の準備のため、シリンジの先端を舐めて唾液の潤滑剤を付けてください。」そう言われた私は、シリンジの先端を舐めました。少し吸い出したせいかシリンジの先端からおしっこが少し出てきました。美味しい　。ゆかりさんのおしっこすごく臭くて美味しい　。そう思いながら、アナルに浣腸して、美味しそうなお尻に顔を埋めて直飲みしたい。うんちカスを混ぜたもっと美味しいおしっこを飲みたい。マン汁が溢れるおまんこを美味しく食べたい。そんな一心で、シリンジを唾液でベトベトにするので

した。

第17話（後書き）

患者さん11人、看護師複数でそれぞれ別な攻め方や性癖を持ってるけれど全部アナルやスカトロに関係する予定。

それ以外にクリニック内の設備として、浴室や食堂、搾乳室などもイメージ中。そこに関連する特別な資格（空想のもの）スタッフなどもイメージ中。

第１８話（前書き）

ゆかりさんのデカ美尻におしっこ浣腸をして、ミカはアナルから直飲みする展開となります。続いてみなみとゆみなが便意を催し、足舐めしている花とユナが食糞欲求やアナル連結欲求などが生じ、新たなプレイが展開される予定。一生懸命にミカのおまんこを舐めていたゆみなのかわりに、潮っけを失って水分補給が必要なゆかりさんがミカのおまんこ舐め要員にチェンジ予定。

第18話

「ミカさん、そろそろ大丈夫そうですよ　？シリンジを離してみてください　。」そう言われて、ふと我に帰った私は、シリンジの先端から滲み出てきたゆかりさんのおしっこのあまりにもの美味しさに我を忘れていたことに気づくと、恥ずかしくなりました。みなみさんは、シリンジの先端を確認すると、みなみさんもパクッと咥え、ジュルジュル舐めたのでした。

「チュパチュパ。シリンジはミカさんの美味しい唾液でヌルヌルにできています　。ちゃんと潤滑剤にできそうです。では、今度はゆかりさんのアナルを舐めて、ジュルジュルにしてあげてください　。そうすることで、ゆかりさんのお尻がますます美味しくなりますし、シリンジが入り安くなりますから　。」

そう言われた私はゆみなさんのおまんこ責めと花さんとユナさんの足舐め責めにより、体も起こせないほど気持ちよくなりすぎていたため、みなみさんにリクライニングの調整をしてもらいました。そして私は、美味しそうに突き出されたゆかりさんのお尻を鷲掴みにして、クパァっと開き芳しく甘美なアナルへと顔を埋めるべく、ゆかりさんのお尻を優しく撫で回し、お尻にキスをするのでした

「どうですか？ミカさん、リクライニングの角度は。」

「ちょうどいいですよ　？ゆかりさんの美味しそうなお尻が目と鼻の先です。それに、キスしてわかったんですが、お尻の蒸れたいい臭いと、足裏の臭いもしてすごい臭くて美味しそうです　。」

「良かったです　。ゆかりさんの足裏臭を嗅ぎながらアナル舐めるとおまんこびしょ濡れになるくらい気持ちよくなれると思います　。いっぱい味わってくださいね　。」

そう言われた私はゆかりさんの土下座により突き出されたお尻を撫でるのをやめ、ペチンと叩くと尻肉を鷲掴みにして、アナルをクパァっと開いてアナルの香りから堪能するのでした。

「スンスン。は～　。いい臭い　。下痢うんちの匂いだけじゃなくてお尻の蒸れた臭いもするし、もしかしたらですが、みなみさんの唾液の臭いもしますよ　？スンスン。あ～、我慢できないです。ゆかりさん、ゆかりさんの美味しそうなお尻、また食べてもいいですか　？」

「あん　。いっぱい食べてくださいね　。」

ゆかりさんの同意を得て、私はゆかりさんのアナル、尻肉、足裏を順番に舐めしゃぶりました。尻肉に至っては甘噛みをしたり吸い付いたりして、口全体でお尻の美味しいお汁を味わうのでした。さらに、足裏なめだけでなく、足趾の爪のカスもほじくって食べるのでした。

「ジュルジュル。アナふおいひい　。ジュルジュル。ハムハム。尻肉も柔らかくて美味しい　。そんな美味しい尻肉とアナルをさらに引き立ててくれる足裏もジュルジュルレロレロ。臭くて美味しい　。スンスン。足趾も爪のところにカスが入ってる　。このカスがすごく臭くて美味しそうです　。私の爪でほじくって食べちゃいますね　？ハム。ん～　。臭い香りが口いっぱいに拡がる　。このままアナルも舐めてレロレロ　。ふふふ。すごい美味しくなった　。」

「あん　、、恥ずかしい、、、そんなエッチなこと言われたら、、おまんこイッちゃいそう、、、イク、、、、」

私の足爪カス食べながらのアナル舐めにより、ゆかりさんはイッテしまい、ゆかりさんのマン汁がジュルジュルになってしまうのでした。

ドバドバ滴るねっとりしたマン汁を慌ててすすりました。でも、どうすればいいのか分からずにいると、みなみさんが指示を出してくれました。

「ゆかりさん、気持ちよくなってイッテしまったみたいですね。ちょうどよくおまんこもジュルジュルして美味しく仕上がってそうなので、そろそろおしっこ浣腸をしましょう。ミカさん、ゆかりさんのお尻に浣腸してあげてください。ミカさんがアナルを舐めてくれたおかげで、ネチョネチョした柔らかいアナルになりましたので、おしっこをこぼすことなく注入することができるはずです。では、こちらを持ってください。」

そう言って、おしっこで満たされた浣腸器を私に手渡すと、みなみさんはゆかりさんのお尻を鷲掴みにしてクパァっとアナルを開いてくれました。

そして、私とゆかりさんに優しく話しかけながら、浣腸を指導してくれるのでした。

「ほ～ら　。ゆかりさん。お尻の穴が見える様にお尻をクパァって開いたわよ～　？。もうこれだけで、美味しそうなんだけど、おしっこ浣腸して、もっと、美味しくしてあげるからね～　？。では、ミカさん、シリンジの先端を差し入れてあげてください　。優しく、優しく。そうです。無事入りました　。あら、ゆかりさんお尻が可

愛く揺れたわね　。お尻が喜んでるわ　。ふふふ。ペチン。もっと美味しい尻にしてくださいって言ってみなさい、ゆかりさん　。その方が、身も心もおしっこを受け入れられて、お尻で美味しくおしっこを味わえるわよ　？」

そう言われた、ゆかりさんは

「私のお尻おしっこを入れて、もっと美味しくしてください　」と私とみなみさんに懇願すると、無意識にもお尻が突き出され、さらに可愛くそして食欲のそそりました。そのお尻の動きを見たみなみさんは

「ミカさん、シリンジを押しておしっこを入れてあげてください。ゆかりさんのお尻は私がサポートしますので。」

そう言ってくれました。私はゆっくりと優しくゆかりさんのデカ美尻におしっこを浣腸し、ゆかりさんのお尻の可愛い動きを楽しむのでした。

ゆっくり、ゆっくり、シリンジを確実に押していきました。シリンジ内のゆかりさんの美味しかったおしっこは、ますます美味しいうん汁おしっこに生まれ変わり、私の舌を楽しませてくれるんだと思うと、ワクワクがとまらなくなるのでした。

「くぅ〜ん、、お腹、、、苦しいです、、、でも、、、おしっこいっぱい入れて欲しいです、、、、いっぱいうんち混ざったおしっこ飲んで欲しいです、、、」

シリンジが押し込まれることで、ゆかりさんの可愛い苦痛の喘ぎが聞こえ、お尻も動きシリンジが揺れることもありましたが、そこはみなみさんがサポートしてくれました。

「偉いわ　。いい子よゆかりさん。可愛いお尻で懸命におしっこを

飲み込んでいく姿、すごく美しいわ　。白くてスベスベして美味しそうなお尻　。浣腸入れて少し緊張したみたいね　。お尻に力が入っちゃったわよ？力を抜いてぷるぷるのお尻の方が、顔を埋めてアナル舐める時に、アナルが美味しくなるから、処置をするわよ　？ミカさんはそのままゆっくりおしっこを注入してあげてくださいね　。」

そう言って、みなみさんはゆかりさんのお尻がもっと美味しくなるよう処置をしてくれたのでした。

「まずは、鷲掴みにしてる尻肉を優しく揺らしてあげます。この時にたぷたぷと声をかけてあげながら、上下左右に揺らしてあげるとお尻が可愛く見え安くもなります。軽く揺らして緊張感をほぐしてあげたら、優しく撫でてあげます。怖くないよ～　、可愛くて美味しいお尻になってね～　。っていいながら撫でてあげます。撫でてあげることで、アナル舐めの際に、尻肉の柔らかい感触も味わえます　。最後には、お尻を叩いてあげます。ペチン。」

「ひゃん　」

「ふふふ　。気持ちよかったかしら　？こうやって、叩いてあげることで、快感を与えることもできますが、1番大事なのが、尻穴を舐めさせてあげているという上から目線のSな心を少しでも排除し、臭くて汚いうんちまみれのデカいしか能がないお尻をふりふりしてマン汁出す変態雌豚であることを再認識させることなんです。そうすることで、雌豚であるゆかりさんがご主人様であるミカさんに尻穴を美味しく召し上がっていただけて嬉しいという喜びの感情を最大限に引き出すことができて、それこそがうんちやおしっこを最大限に美味しくする方法でもあるんです。ベチン。ベチン。ベチン。すると、ほら　。、、、ね　？すごいでしょ　？ミカさん　。」

そう言われた私はゆかりさんのお尻を見ると土下座してなお腰を逸らし、お尻をつき出そうとする姿を見ることが出来ました。そして土下座からなお突き出されたお尻は正しく、アナルからもたらされるウン汁ブレンドのおしっこを美味しく飲むために仕上がった美味しそうな香りを放つデカ美尻になっていたのでした。

みなみさんは、ゆかりさんのお尻を鷲掴みにして固定したり、たぷたぷ尻肉を揺らしたり、優しく撫でたり、はたまたペチンと叩いたり、様々なテクニックを駆使してくれたおかげで、私はシリンジを全部押し込むことができ、おしっこを全て注入することが出来ました。

そして、おしっこをさらに美味しくするため、熟成させる必要があり、その間にみなみさんは私にゆかりさんのマン汁を飲むことを提案してくれたのでした。

第１８話（後書き）

妄想爆発です。

第１９話（前書き）

ふたなりっこの登場はもう少し先になります。
今回はゆかりさんのお尻をとことん美味しく食べちゃうお話です。

第１９話

「今浣腸したてでうんカスが混ざりきらないと思うので、しっかりうんカスが混ざるまで、おまんこ舐めて、マン汁で水分補給をしておきましょう。ミカさんも水分補給ができて、ゆかりさんも気持ちよくなれるので。ゆかりさんが気持ちよくなればなるほど、ゆかりさんのお尻もくねくねお尻を動かすでしょうからしっかりお腹の中で撹拌されて、美味しくおしっこ飲めると思いますよ」

そう言われて、私はゆかりさんのおまんこをジュルジュルと音を立ててすすり、マン汁を飲み始めました。

美味しい。私の渇いた体に浸透していくこの美味しい神の雫。やはり、体全身でHなことを全力で頑張ると喉が渇きます。そんな時に飲むのはポ○○スエットなんかよりも、マン汁が1番乾きを癒してくれるんだと、この時改めて実感するのでした。体の乾きを癒すため、息継ぎも忘れるほどに無心でおまんこをすすって、ゆかりさんの可愛い声を聞き、汚くて臭いお尻の尻肉に挟まれる幸福感に私のおまんこも限界を迎え、潮を噴きマン汁を溢れさせるのでした。美味しくて、気持ちよくて、塩分を留めておきたかったのに、否応なく潮とマン汁をゆみなさんに吸われ、逆に水分不足と塩分不足になるのでした。

「あら＾＾；　ミカさん、イッちゃって潮とマン汁ドバドバ出しちゃったのね＾＾；　じゃー、そろそろうんちとおしっこが混ざった頃合いで、美味しく熟成された頃だからおしっこいっぱい飲んで、水分補給しましょうか。」

ついに、みなみさんからのお許しをいただき、私はあえて舐めずに

いたおしっこ入れた直後のアナルを、「ゆかりさんいただきます　。ズルズル、美味し　。もっといっぱい踏ん張って出して　。ズルズル。ゴクン。うんち混ざってて臭い　。ズルズル。たまらなく美味しい　。アナルクパァってしていい？もっと飲みたいから開いちゃうよ？ズルズル。ゴクン」と声をあげながら、尻肉を鷲掴みにしてアナルをクパァっと開き、ズルズルと音を立てながら神の雫がごときおしっこを飲み干そうと夢中になったのでした。

おしっこをめいっぱい浣腸したアナルを舐めた瞬間、ほんのりと香るおしっこ臭とうんち臭が私の鼻腔をくすぐり、アナルはヒクヒク動き私の舌を踊らせました。チョロチョロとおしっこを垂れ流し始めた可愛いアナルに私はご褒美をあげるために舐めまわしてあげるのでした。レロレロと舐めながら、おしっことうんちが織り成す、優しい味が口いっぱいに拡がりました。そんな美味しいものを、こんな美味しそうなお尻から直に飲んでしまったら、もう我慢ができなくなります。私は優しく舌で舐め回すのをやめ、アナルに舌をねじ込み、おしっこをすすろうと画策するのでした。

舌をねじ込んだ瞬間に溢れてきたおしっこジュースの美味しさと素敵な香りに興奮し、潮を噴いてしまいました。毎度おなじみです。それくらいに気持ちよさを感じさせる美味しさなのです。そして、案の定、私の潮をゆみなさんは嬉しそうに飲んでくれて、おまんこをさらに刺激してくれたおかげで、私は気持ちよさに負けて気絶することなく、うんカスたっぷりの美味しいおしっこジュースを味わうことができたのでした。

うんちとしての食感があるものも美味しいですが、ドリンクになるとそれはまた違った美味しさがありました。うんカスがまるで粒入りのオレンジジュースのような味わいに感じられ、私は浣腸したお

しっこが静まるまで、ごくごくと飲み続け、おしっこが治まるのを確認すると、おかわりしたくなり、再びシリンジでおしっこを注入し、おしっこジュースのアナル直飲みを楽しみ続けるのでした。最後のおしっこ浣腸も飲み終え、完全にうんカスも出し切ったのを感じた私はアナルから口を離して、鷲づかんでクパァっとしているお尻全体をまじまじと見ました。お尻をただ見ただけでは分からなかったですが、落ち着いてからよく見るとすぐにわかりました。ただ洗ってないだけではなかったようです。尻肉はスベスベの肌をして舌触りが優しいですが、おまんこやアナルに近づくにつれ、舐めるだけでも垢が出てくるのに気づきました。

きっと、お尻を美味しく舐めるための方法であり、舐める人の気持ちを考えられるゆかりさんならではの方法なのかもしれない。そう思うと、目の前のお尻に対する愛情が溢れる気がしたのでした。

私はテーブルの上で土下座し、私のために臭くて汚れた美味しいお尻を突き出してくれたゆかりさんに対して、「ご馳走様でした。すごくお尻も柔らかくて大きくて、蒸れた香りにうんち臭さやおしっこ臭さが混ざりあって、すごくいい臭いでした。毎日でも食べたいお尻です。すごく美味しかった」

そのように本心を伝えると、「嬉しいです。ミカさん。また、ミカさんに私のお尻を食べて貰えるように、無洗浄期間を長くしておまんことアナルの恥垢いっぱい溜め込んで熟成しておきますね」

「はい。その時は、バナナうんちもいっぱい食べさせてくださいね。」

そんな約束をして、ゆかりさんのお尻に顔を埋め、感謝のアナル舐めを行うのでした。

おしっこ浣腸を終えると、みなみさんから

「どうでしたか?おしっこ、すごく美味しくなっていましたでしょ

？お尻の調教のため特別な技術が必要となるので、なかなか、飲める機会のない絶品ドリンクなので、ミカさんもこの手法を学んで是非、絶品ドリンクを飲めるようになってくださいね」

きっと、みなみさんがゆかりさんのお尻を撫でた時の撫で方や拡げ方、そして叩き方、お尻にかける優しい言葉やエッチな言葉などもきっとその技術だったんだろうと思いました。それだけで、元々美味しそうなお尻がさらにエロさをまして、美味しそうなお尻になったのをこの目で見たので、私は是が非でもその技術を学ぼうと思い、看護師という仕事に興味を抱いたのでした。

「ゆかりさん、あなたもずっとお尻を美味しく食べてもらって、疲れちゃったでしょう？水分補給もしないといけないから、台から降りて、椅子に座って休憩をしておきなさい。」

「ミカさん今から水分補給のための環境整備を行いますね。今座っているリクライニングを1度片付けようとおもいます。」

そのように言われた私はリクライニングから、やや脱力気味の体を引き起こし、みなみさんに抱きしめられ、アナルに指ズボンしてもらいながら、体を支えてもらい、ゆかりさんが座っている椅子のとなりの椅子へと座り、しばしの休憩をするのでした。

みなみさんとゆみなさんがリクライニングチェアを片付けている間、花さんとユナさんは椅子に座った私の元まで、ハイハイで近づいてくると、ゆかりさんの足と私の足を交互しゃぶりしながら、「みかさんもゆかりさんも足臭くて美味しい」といいながら花さんが私とゆかりさんの足を舐めしゃぶり、ユナさんは、「私も喉乾いたから、水分補給するー。花ちゃんのマン汁美味しそうに溢れてるから飲ませてもらうねー　？。アム。レロレロ。ジュルジュル」

「あん、ズルい　。私も後でユナのマン汁飲むんだからね　。」
そういいながら、2人は私の前でエロエロなプレイを見せつけ、私のマン汁を溢れさせるのでした。
みなみさんとゆみなさんが戻ってくるまでは少し時間があり、足舐めをしていた花さんが喉の乾きを理由にユナさんのおまんこを舐めしゃぶり、今度はユナさんが私とゆかりさんの足を交互に舐めしゃぶりました。だいたい互いが10分ずつ舐め合いを行った頃合にみなみさんとゆみなさんが戻ってきました。

「では、ゆかりさん、少し水分補給をしましょう。それと、花さんとユナさんもずっと、ミカさんの足舐めして、疲れたでしょ?」

「でも、すごく美味しくて、やめられないです。すごく臭くて美味しいんですよ　?。」

「そんなに頑張って舐めてたら、お腹も空いちゃうでしょ＾＾；?。だから、おやつタイムにしましょう。ゆみなは昨日私たちが出したうんちを持ってきてくれる?それと、ゆかりさん用の搾乳器もお願い。」
みなみさんに言われ、ゆみなさんは颯爽とストックしてあるというんちと搾乳器を取りに行ったようでした。

「やった〜　。みなみさんとゆみなさんのうんち大好き　。」
「花ちゃん、ちゃんとゆかりさんとミカさんの分を残しておかないとダメだよ＾＾；?」
「わかってるもん。ユナだって、うんち食べる時別腹でいっぱい食べるじゃないヽ(、Д,)ノ。」
「こらこら、ちゃんと、仲良くうんち食べてね　。じゃー、うんちにつけるミルクを搾りましょうか。花さんとユナさんはゆかりさんのおっぱいをしゃぶって吸い出してあげて　?それを唾液でクチュ

クチュしたら、ひとまずこのワイングラスに入れてちょうだい？ミルクと唾液でブレンドシロップを作りましょう　。」

「みなみさん大好き～　。ゆかりさんのおっぱい美味しくて好き　。ちょっと指でつまんで出してみるね　？」

花さんがゆかりさんの乳首を摘むとピューっと白くて美味しそうなミルクが飛び出したのでした。

「ゆかりちゃんのおっぱいからミルクでたね～。美味しそうだね～花ちゃん　。ハム。レロレロ。美味しい　」

「あー、いいなーユナちゃん　。みなみさん、私たちも少し飲んでいい　？」

「しょうがないわね～。本当はミカさんのためのものなのよ？じゃー、少しだけ飲んでいいから、あとはクチュクチュしてワイングラスに出すのよ？うんちフォンデュ用のシロップがなくなったら困るんだから。みんながうんちフォンデュできるようにいっぱい搾るのよ？それと、ゆかりさんのミルク飲ませてもらうお礼として後で、ミカさんにあなたたちのうんちをご馳走してあげるのよ？」

「うん　。ちょうどさっきまで連結してたからね　。いい感じに混ざってるよ　。ね？花ちゃん　。でも、食べてもらう前に1回また連結してくれますか？みなみさん。」

「わかったわ。連結交換したうんちを新鮮なうちに食べれるように後で連結交換しましょう　。」

「やったね花ちゃん　。」

「うん　。ユナちゃん　。あ、そうだ、ミカさん、私たちいつもうんちする時におしっこすごい出るんだけど、飲みたいでしょ？」

「はい　。」

「どうやって飲みたい　？」

そう言われて、悩んでいると、「ミカさん、そしたら、２人がおしっこ出す時にミカさんをマングリ返しして、アナルに漏斗をさしてあげますから、漏斗に立ちションで入れてもらいましょう。アナルに入るだけじゃなくて、飛び散るおしっこが体にもかかるから、潤い成分が浸透して美肌にもなるんですよ　。マングリ返ししながら、自分のアナルに出されたおしっこを飲むためのチューブ型ストローもありますから。」

そう言われ、私はマングリ返しで自分のアナルからストローで飲むという新たな飲尿スキルを身につけることができることにワクワクするのでした。

カラカラと音を鳴らしながら、ワゴンを持ってきたゆみなさん。とても綺麗なボディラインで大きくとも、たれていないおっぱいをたゆたゆさせながら戻ってくると、私はワゴンの上を見て驚きました。

おっぱい丸出しのボンテージブラのおっぱい部分におっぱいを固定する金具が取り付けられていて、先端には搾乳器が付いたものがありました。おそらくこのクリニック独自の搾乳マシンなんだと思いますが、２つの大きなおっぱいを確実に固定し、ミルク一滴も逃さないための機器なのだろうと、搾乳器型ボンテージを見て思うのでした。その搾乳器の隣には何個かのワイングラスが置かれていました。

搾乳器の下の台には大きな白いお皿が２つ乗っており、とぐろを巻いたうんちがどっさりと載っていました。その量や臭いにも驚きを隠せませんでしたが、１番驚いたのは大きめの漏斗もワゴンに乗っ

ていたことでした。

ワゴンの郎斗を驚いた表情で見ていた私を、ゆみなさんが不思議そうに見つめ、みなみさんにその事情を聞くのでした。

「みなみ、ミカさんこの漏斗見て驚いてるようだけどどうしたの？」

「さっき、あなたがうんちを取りに行ってる時に漏斗の話をしたのよ。マングリ返しで漏斗を差し込んだミカさんのアナルに花さんとユナさんに立ちションさせて、ミカさんのアナルから直にミカさんにおしっこ飲んでもらおうって言う話をしたの　。だから、話を聞いてないはずのあなたが、漏斗を持ってきたことに驚いたのよw。」

「なんだ。ミカさん、私とみなみは一卵性双生児だから、なんとなく、わかるのよねw。で、なんか必要になりそうだなと思って持ってきたのよw。」

「良かったわ　。また、取りに行かせる手間が省けて。だって、私今結構キツくて、あなたも今結構厳しいでしょ？ゆみな。」

「やっぱり、みなみもそう？結構きつい＾＾；。」

「どうしたんですか？」

不思議に思った私がみなみさんに話しかけると、「ゆみなにうんち持ってきて貰ったのはいいんですけど、実は今すっごいうんちしたくなっちゃったんです＾＾；」

それを聞いた私を含め、花さんとユナさんは「そっち先食べたい（です）　」とは盛らせながら言うのでした。

「そしたら、最初におしっこさせて＾＾；？」
とみなみさんは言うと、ワゴンの上のワイングラスを手に取り、しゃがんでおまんこに当てました。そしてブシャーっと音を立てながらおしっこを出すと
「やば、足りない＾＾；ゆみな、もう1個ワイングラスお願い。」
とゆみなさんに声をかけると同時にゆみなさんはワイングラスをパパっと取り替えるのでした。双子なだけあり、見事な連携プレイでした。みなみさんもゆみなさんもおしっこを出し切ると、私たちにワイングラスを渡しました。合計ワイングラス5つ分のおしっこがみなみさんとゆみなさんから出されました。そのうちの2つはみなみさんのおしっこオンリー、そして残りの3つのうち2つがゆみのさんのおしっこオンリー。残りのワイングラスにはみなみさんとゆみなさんのおしっこがブレンドされていました。

花さんとユナさんには、みなみさんのおしっことゆみなさんのおしっこが1つづつ、私とゆかりさんにもみなみさんのおしっことゆみなさんのおしっこが1つづつ渡されました。
「今4人に渡したおしっこは後で、お互いに仲良く飲みあってちょうだいね。もう私とゆみなが限界だから、先に処置を進めますね。」
そう言って、みなみさんはテキパキと指示を出してくれたのでした。

第１９話（後書き）

次回はみなみさんとゆみなさんの直だしうんちを、花、ユナ、ゆかり、ミカが美味しくいただく話となります。

第２０話（前書き）

ストックが無くなったので、話を考えながら書いてます。エロさを追求しながら、スカトロ大好き女子のエロエロな立ち回りをかけたらいいなと思います。

第２０話

「ゆかりさんは、この搾乳器付きボンテージをつけておいて?全自動で搾ってくれるようになってるわ。この瓶の部分は簡単に取り外せるようになってるから。」

ゆかりさんがボンテージ搾乳器を装着すると、

「ミカさんにゆかりさん、花さんとユナさ４人とも顔を近づけて、舌を互いに絡ませるように伸ばして?」

と指示を出しました。そう言われた私たちは、舌を伸ばし、みんなで舌を啜り合いました。

みなみさんとゆみなさんは2人のおしっこがブレンドされた5つめのワイングラスのおしっこを口に含むと、口からこぼれないようにキスしながら口移しでおしっこをクチュクチュと口の中での攪拌をし合うと、舌を絡ませている舌へ垂らしてくれたのでした。

みなみとゆみなさんのブレンドおしっこなだけでなく、口でクチュクチュして唾液も混ぜているので、味わいとしては奥深いものになっていました。花さんとユナさん、ゆかりさんも我先におしっこをすすり、「あ～ん　、美味しい　。」
と口を合わせるように言うのでした。

「食前酒ならぬ食前おしっこで食欲増進したところで、うんち出すわよ　?４人ともこっち来て。花ちゃんはここ。ユナちゃんはここ。ゆかりさんはここ。ミカさんはここ。」

と一人一人手を取ると、立ち位置へ誘導しました。
そして、みなみさんは私の左側、ゆみなさんは私の右側に立つと背中合わせになりしゃがんで、お互いにお尻を押し付け合うように四つ這いになりました。さらに胸を床に押し付けるようにすることでお尻がさらに際立ち、アナルとアナルがキスをしているのではないかと錯覚するほどにお尻が突き出されたのでした。

「みなみのおまんこ濡れてるわよ　？こんなにくっつけばわかるんだから　」

「ゆみなだって濡れてるじゃない　。」

「あー＾＾；。もう出そう。出していい？みなみ。」

「一緒にだそ？ゆみな。」

「「で、、出る、、、ブリュブリュ～。」」

そんな他愛ない2人の可愛い会話を聞いた後、おならが放たれ、ついに2人の2つのアナルと4つの尻肉に囲まれた聖杯とも言うべき、谷間にうんちが出されるのでした。

「ムリムリムリ。ビュルビュル～。」

そんな音を立てながら、2人のアナルから極太のバナナうんちが登れる龍が如くとぐろを巻いていきました。
そのうんちの量や臭い質全てにおいて、今まで食べたことがないと思えるような美味しそうなうんちでした。

「すごい　。いい臭いがする　。早く食べたいよ。」

「花ちゃん、可愛い。慌てすぎ　。いっぱいあるから、色んな食べ方できるね。ゆかりさんはどうやって食べたい？」

「みんなで口に入れたものをクチュクチュさせてみんなで口移ししながら食べたあと、私の母乳かけて食べたいかな。」

「ミカさんは？」

ユナさんが私に聞いてきました。私もクチュクチュ口移しとゆかりさんのミルクは興味津々だったので、ゆかりさんに賛同しました。

私たちはみなみさんのうんちとゆみなさんのうんちを一口ずつ口に含むと、口内で香りを楽しむため、口の中の香りを肺に送ったり鼻に送ったり、うんちの香りを体で吸収し、うんちをモニュモニュと咀嚼し、クリーミーになるまでグチュグチュとし、花さんとユナさん、ゆかりさんと口移しをしつつ、クリーミーなうんちをすすりあうのでした。

「おいひいへ　。はなひゃん　。」

「くさふへ、にはいへ　。ゆなひゃん　。」

花さんとユナさんはうんちを無心に食べあって、もはやみんなですすりあって食べることを忘れているようでした。それくらいに美味しいうんちだったので、気持ちは分かりますが、もっと花さんとユナさんの唾液でグチュグチュになったうんちを食べたかったなと思うのでした。

「モニュモニュ　。ゴクン　。みなみさんとゆみなさん、こんなに

美味しいうんち食べさせてくれて嬉しいです　。おっぱいミルク美味しく搾れそうです　。」
と言ってゆかりさんは搾乳器の瓶を確認していました。

「ハム。モニュモニュゴクン。みなみさんとゆみなさんのお尻がむっちりしてたぷたぷして、ムレムレのいい臭いもするし、アナルも舌触りがすごくいいです　。うんちがますます臭くなって美味しくなります。もっとおかわりしたいです。ハム。モニュモニュ。ゴクン。」

「ミカさん、ありがとうございます。ゆみなと私の臭いアナル舐めながらうんちいっぱい食べてくださいね　。ミルクをかけたら、ミルクチョコレートみたくマイルドな味わいになるんですよ　？ゆかりさんにはミルクをお願いしてもいいかしら　。」

「はい　。」

そう言って、ゆかりさんは搾乳器の瓶を外し、瓶に溜まったミルクをみなみさんとゆみなさんのアナル聖杯にかけ、うんちにミルクをデコレーションしました。尚も搾乳を続けるボンテージから搾られるミルクポタポタたれ、もったいないと思った私はボンテージから滴るミルクを飲むためにおっぱいに舌を伸ばすのでした。

「ミカさん　。ボンテージから垂れてるミルク飲んでくれたんですね　。」

「勿体なくて　。こんなに美味しそうなミルク飲まずにいれなくて　。」

「あ～　。ゆかりさんのおっぱいからミルクたれてる～　。エッチ

で可愛いね～　。ユナちゃん。」

「たしかに、ただ垂れちゃうのはもったいないですね。みなみさんとゆみなさんのアナルに直に垂らして、追いミルクしてはどうでしょうか　。」

「それいい考えだね。ユナちゃん　。」

そうして、ゆかりさんはみなみさんとゆみなさんのアナルにおっぱいから直接ミルクを垂らし、みなみさんとゆみなさんのお尻にこんもり出されたうんちをマイルドな味わいのうんちへと変えていくのでした。

「うんちにミルクかかったね～　。ますます美味しそう　。もう食べていい？ユナちゃん。」

「まだダメですよ。もっと真っ白になった方が美味しいですよ　？」

「花さんにユナさん、、おっぱい気持ちよくて、イッちゃいそうです　。」

「えー。ダメだよ。マン汁漏れちゃう？もったいないよ～。まだイっちゃダメだからね？ミカさん、ゆかりさんのマン汁飲んであげて？」

そう言われ、いそいそとゆかりさんの方へ行った私は、「ゆかりさんまたがって　。マン汁舐めます　。潮も噴いてくれたら嬉しいです。」と伝え、ゆかりさんの股下に顔をつっこみ、おまんこをうんちまみれの口でジュルジュルすすったのでした。

「ジュルジュル。美味しい　。ゆかりさんのマン汁すっごく美味しいですよ　。いっぱいマン汁出して、いっぱい感じながら美味しいミルク出してくださいね　。」

と私に言われたゆかりさんは「あん、イク～　。」と私の猛烈なおまんこ舐めにより、マン汁と潮をドバドバ出し、イキながらおっぱいミルクを出し続けたのでした。

私はゆかりさんのマン汁とイキ潮を飲みながら、自分でも無意識にオナニーをしていました。そんな姿を見た花さんは、「ミカさん、オナニーしちゃうくらいマン汁美味しかったの?おまんこもっとヌルヌルになるようにみなみさんのうんち塗ってあげる　。」と私に言うと

「じゃー、私はゆみなさんのうんち塗ってあげる　。」とユナさんも続いて言いました。

2人はうんちをみなみさんとゆみなさんのお尻から貪るように咥えると、私のおまんこの方へ四つ這いで向かってくると、うんちをモニュモニュとさせると私のおまんこへ舌でうんちを塗りつけるのでした。

第２１話（前書き）

双子看護師に塗糞されるミカ、そして、うんち塗られたミカの体はうんち大好きスカトロ女子にとっては最高のデザートに、、、なるのかもしれない。

第２１話

私はゆかりさんのおまんこを猛烈な勢いで舐め、クリトリスを口の中でなぶり続けました。そうすることで、溢れ出てくるゆかりさんのマン汁の美味しさに抗えず、舌の動きを止めることはできませんでした。そして、「あん　。イク～　。」というゆかりさんの可愛い声が聞こえた瞬間、ゆかりさんのイキ潮が噴き出し、飲んでるうちにオナニーをしてしまいました。その姿を見た花さんとユナさんによって、私のおまんこにみなみさんとゆみなさんのうんちが塗られることになるのでした。

「グチュグチュ。トロ～　。ミカさんのおまんこにみなみさんのうんちを垂らして見たよ　？」

「グチュグチュ。トロ～　。ゆみなさんのうんちも垂らしてあげました。」

「スンスン。いい臭いのおまんこが、ますますいい臭いになったね　。ユナちゃん。一緒にうんちまみれのミカさんのおまんこ食べよ　？」

「ミカさん、美味しそうなおまんこになりましたよ　。みなみさんとゆみなさんのうんちでトロトロして可愛いですよ　。花ちゃんと一緒にミカさんのおまんこ食べてもいいですか　？」

花さんとユナさんにエッチな懇願をされた私は、「私のおまんこいっぱい食べてください　。」と２人に伝えました。そして、花さんとユナさんは私のおまんこにうんちまみれの舌を入れ、中をジュル

ジュルとすすり私のマン汁を溢れさせました。私も失ったマン汁を補充するかのように下を向いて私の目を見つめるゆかりさんを見ながらゆかりさんのマン汁をすするのでした。

３~４分ほど４人でおまんこのすすり合いをしていたと思います。私はマン汁をすするのに夢中になり、みなみさんとゆみなさんのお尻に載っかってる出したてうんちを食べれていないことに気がつくと、「ゆかりさん、、ゆかりさんのおまんこすすりながらうんち食べたいです　。」とゆかりさんにお願いしました。ゆかりさんはみなみさんのうんちとゆみなさんのうんちを掴み取ると、自分のおまんこに塗りつけました。ゆかりさんのおまんこを舐めている私の口にも入れてくれ、うんちを食べながら、うんちまみれのおまんことマン汁をすすり、性欲と食欲を満たすのでした。

ゆかりさんは自分でもうんちを食べながら、定期的にみなみさんとゆみなさんのうんちを自分のおまんこに塗りつけつつ、私の口に入れてくれました。そしてついに出したてうんちがなくなり、花さんとユナさんが少し残念がりましたが、今度はストックしてあるうんちをみんなで食べようということになりました。

「も~。ミカさん、うんち大好き過ぎ　。みなみさんとゆみなさんの出したてうんちがなくなっちゃったから、昨日出してくれたうんちは仲良く食べよう?」

「う、、ごめんなさい＾＾;。美味しくてつい＾＾;。」

「大丈夫ですよ。花ちゃんは怒っている訳ではなく、大好きなみなみさんやゆみなさんのうんちを美味しそうに食べてくれたミカさんが好きになったんです。その照れ隠しですよ。」

「もー、ユナちゃん、変なこと言わないの＾＾；。」

そんな他愛もない話をしながら、私たちはみなみさんとゆみなさんのお尻に付いているうんちの残りを丁寧に舐め取り、綺麗にお掃除すると、早速ストック分のうんちの食べ方について議論をしたのでした。

私は出したてうんちを概ねひとりで食べたことに負い目を感じていたため、みんなに任せることを伝えると、「ミカさんの体に塗りつけて、ゆかりさんのミルクかけながら食べよう　。」ということになりました。

その話を聞いていたみなみさんとゆみなさんは

「ミカさんの体に塗って食べたら美味しそうですね　。塗る時は手で塗るのではなくお尻全体を使ってアナルやおまんこを使って塗るともっと美味しくなるわよ　？私たちのお尻で塗ってあげる　」と提案してきました。

花さんとユナさんは案の定大喜びをして、みなみさんとゆみなさんに懇願したため、私は床に仰向けに寝転がり、みなみさんとゆみなさんのお尻でうんちを塗ってもらうことになったのでした。

みなみさんとゆみなさんは仰向けになった私に

「これからミカさんにうんちを塗っていきますね　。うんちは私たちのおまんこやアナルに塗ってから、お尻でミカさんに塗っていくんですが、最初は私たちのおまんことアナルにうんちがねっとり付くようにミカさんの唾液で私たちのおまんことアナルを舐めていただきますね　。」

と告げ、みなみさんは私の顔を跨ぎおっぱいを揉みながらしゃがみ、おまんこを押し付けて来ました。みなみさんのおまんこからマン汁

をジュルジュルすすっていると、花さんとユナさんからは「いいなー　。」と言われ、申し訳ないと思いつつ、美味しいマン汁を堪能するのでした。「あん　　。ミカさん、おまんこ舐めるの上手ね　。」

「みなみさんのおまんこ美味しくて、ジュルジュル　。もっと舐めたいです　。」

「嬉しいわ　　。ミカさん、でも今度はアナルも舐めて、トロトロにしてくださいね　？」

と言うと、立ち上がり、くるっと回ると今度はお尻を私に向けてしゃがみ、今度はアナルを押し付けて来ました。みなみさんのアナルは蒸れた臭いだけでなく、先程の出したてうんちの新鮮ないい香りがして、私は無心にアナルを舐め、舌をねじ込み、アナルを貪るのでした。

「レロレロ、ジュルジュル。」

「あ～、ミカさん、、アナルを舌でほじくるように舐めたら、、、あ～　。また出ちゃうかも、、あ、あ～、、ブリュブリュ。」

「あん　　、うんち出ました　。ハム。モニュモニュ。」

「ごめんなさい、、気持ちよくて、うんち出ちゃった、、、」

「いいんです　。美味しいので嬉しいです　。」

「そろそろ、うんちをミカさんに濡れるくらいトロトロになったから、今度はゆみなのおまんことアナルを舐めてあげて　？」

そう言って、私の口からアナルを引き離すように立ち上がったみなみさんの代わりに、今度はゆみなさんが私におまんこを見せつけながらしゃがみ、私のうんちまみれの口におまんこを舐めさせるので

した。

「ミカさん、みなみの言う通りおまんこ舐めるの好きなんですね？美味しい　？」

「はい　。みなみさんのおまんこもゆみなさんのおまんこもすごく美味しいです　。」

「ふふ　。可愛いですね　。おしっこ出そうなんですが、飲んでくれますか？」

「いっぱい出してください　。」

「シャーーーーー。」

「あん、ンクン。ゴクンゴクンゴクン　。」

「すごい　。一滴もこぼさないように飲むなんて、ミカさんがいかに変態かが分かりますね　。」

「や、、恥ずかしいです、、。」

「今度はアナル舐めてくださいね　。」

そう言って、ゆみなさんも立ち上がってくるっと周り、大きくて美味しそうなお尻を私の顔に押し付けて、臭くて汚いアナルを舐めさせてくれるのでした。

ゆみなさんのアナルもみなみさんのアナル同様に舐めた際の舌触りや香りは、うんちをどんどん食べたくなるような食糞欲求を掻き立てるものでした。私はみなみさんのアナルに舌をねじ込みすること

とで、残っていたうんちを排出させ、食べることが出来たのでした。

「あ、あ、やばい、、、ミカさん、それ以上したらまた出ちゃうかも、、、あ～、、ブリュブリュ～。」

「ハム。モニュモニュ。ゴクン。ゆみなさんのうんちも美味しかったです。ご馳走様です　。」

「ミカさんたら、本当にうんち大好きなんですね　。嬉しいですよ　。私もおまんことアナルがトロトロになったんで、塗糞の準備をしますね。」

そうしてゆみなさんも立ち上がるとみなみさんは私の左足側にたち、ゆみなさんは右足側にたって、2人はお皿にのったうんちを掴み取るとおまんこやアナルに塗りつけて、私にお尻を向けるようにして私の足にまたがると、しゃがみこんで、おまんことアナルを押し付けてうんちを塗りつけるのでした。

私は両足にまたがるむちむちでプリプリなデカ尻2つが腰を振ってうんちを塗りつけながらどんどん足の付け根に近づいて来るのを見ていると、気持ちよさとその迫力におまんこがキュンキュンしました。それをあざとく見つける花さんとユナさんに指摘され、恥ずかしさが増して、おまんこがさらにドロドロになるのでした。

「ミカさん　。みなみさんとゆみなさんのお尻眺めながらうんち塗ってもらえて気持ちよさそう　。スンスン。おまんこから何か美味しそうないい臭いが、、、あ　。マン汁溢れてドロドロになってる　。美味しそうだね　。ユナちゃん。」

「ミカさん、ドロドロのおまんこ舐めてもいいですか　？花ちゃんの言う通り美味しそうないい臭いがして、我慢できません。」

花さんとユナさんがそう言うと、「私も舐めたいです。」とゆかりさんも切なそうに良い、3人で私のおまんこをジュルジュルと舐めすすり始めたのでした。

足全体にうんちを塗りつけ終えた2つのお尻は、今度は手先にありました。私の指先をおまんこに擦り付けたり、入れたり、アナルにも入れたりして指先から前腕、上腕と進むと今度はおっぱいにおまんことアナルを押し付けるのでした。

「おっぱい柔らかくて気持ちいいわ　。乳首が立っててクリトリスに当たって気持ちいい　。うんちでベトベトヌルヌルになってもっと気持ちよくなりましょうね　。ゆみなも気持ちよさそうね？」

「気持ちいわ　。」

「私もおっぱい気持ちいです　。うんちのいい臭いとお尻が可愛くて、おまんこが気持ちよくなりすぎちゃいます　。」

「嬉しいわ　。マン汁いっぱいあの子たちに飲ませてあげてね　。ゆみな、今度はお腹にうんちを塗りましょう　？」

そして、2人は腕から立ち上がると私の横腹にたち、みなみさんとゆみなさんは互いに背中を向けるように座って、お尻を私のお腹に優しく触れるように優しく動かしながらうんちをお腹全体に塗りつけるのでした。

第２１話（後書き）

現在進行形で妄想を執筆中です。さて、次回は猫耳の花とユナはお昼寝タイムに入り、ゆかりさんは搾乳室で搾乳されに連れ出され、当のミカは再び吉野さんに導かれ、新しい患者さんの元に行く予定。そろそろふたなりっこ三人衆が出てきそうです。

第２２話（前書き）

ふたなりっこ登場です。バナナチンポ、キノコチンポ、短小包茎、のちんぽが登場します。ミカさんはこのチンポをどうしちゃうのか、、、

第２２話

私の全身にうんちを塗りつけた後、「まだ濡れてないところがあるわね　。」と言って、再び私の顔にお尻を向けてまたぐとしゃがみうんちまみれのお尻を押し付け、ヌリヌリと腰を振って私の顔にうんちを塗りつけるのでした。みなみさんとゆみなさんに同じように顔にうんちを塗られたことで全身うんちまみれになりました。やっと、準備が整ったと言わんばかりにゆかりさんは母乳を搾って全身にかけていきました。ゆかりさんが母乳を搾り終えると、花さんとユナさん、ゆかりさんは、私に「いただきます　」と言って私の体に塗られたうんちを舐めとっていくのでした。

うんちを美味しそうに舐める3人を私は微笑ましく見ていると、みなみさんとゆみなさんは3人の元を
見回りながら、3人のお尻を優しく撫でたりおまんこをクチュクチュいじったりしました。そして、花さんとユナさんに対しては、猫シッポ型のアナルプラグを抜いてプラグの臭いを嗅ぎプラグを舐めるだけでなく、プラグを抜いてクパァっとしたアナルにも顔を近づけ臭いを確認し、「いい臭いになってきたわ　。あともう1回連結して混ぜ合わせたら完了しそうね。レロレロジュルジュル。アナルもウン汁最高に美味しくなったわ　。あと2、3時間寝かせたら、連結しましょうね　。」

そう言って、猫シッポ型アナルプラグを再度差し込むと、今度は「もっと、お尻をいっぱい突き出してうんちを舐めなさい　」とお尻をペチンペチンと叩いて、花さんとユナさん、ゆかりさんをにゃんにゃんと鳴かせていき、私のうんちまみれの体を舐めさせていくのでした。

「あん　。ミカさんの体に塗ったうんち美味しいよ　。みなみさん、もっとお尻叩いて　。」
「花ちゃんエッチね　。いっぱいうんち舐めて、美味しいうんちをお腹で作るのよ　？ペチンペチン。」

「お尻叩かれて気持ちよくなっちゃうよ～　。ゆみなさんもユナのお尻叩いて　。」
「お尻叩かれて気持ちよくなっちゃうエッチな猫ちゃんにお仕置しないと　。ペチンペチン。臭いうんちいっぱい舐め取りなさい　。」

そんな2人の姿を羨ましそうに眺めるゆかりさんと花さんとユナさんの壮絶な舐め舐めにより私の体に塗られたうんちは綺麗に舐め取られるのでした。

「あん　。気持ちよくて美味しかった　。ユナちゃんも気持ちよさそうに鳴いて可愛かったよ　？」

「花ちゃんも臭くて汚いうんちを美味しそうに食べててすごくおまんこがジンジンした　。ミカさん、ありがとうございます。ミカさんのマン汁を美味しく啜りながらうんち食べれました　。」

「私もミカさんのおまんこいっぱい啜れて嬉しかったです。いっぱいミカさんのために母乳を出せるように頑張りますね。」

3人のエロエロな感謝の言葉を聞いて、おまんこの奥がジンジンするのを感じ、無意識におまんこをいじっているの私を見たみなみさんとゆみなさんは、優しく微笑むと「私とゆみなは4時間ほど花ちゃんとユナちゃんを、休憩させながら連結療法を行いますので、ミカさんはまた吉野さんに案内をしてもらってくださいね　。ゆかり

さんは、搾乳室で引き続き搾乳をしてくださいね　。」
そう私とゆかりさんに言うと、続いて「ゆみなは吉野さんと京子さんを呼んできて？」とみなみさんは指示を出すと花さんとユナさんを這わせて移動させると、対面で正座をさせました。「ゆみなが戻ってくるまで、花ちゃんはアナルを舐めて　？ユナちゃんはおまんこを舐めて　。ゆみなが戻ってきたらユナちゃんが大好きなゆみなのアナル舐めてあげてね　。」そう2人に伝え、嬉しそうな2人のアナルとおまんこ舐めを見ながら、早く吉野さんに戻ってきて貰って、おまんこめちゃくちゃにして欲しいと悶々としたのでした。

ゆみなさんは吉野さんと京子さんを連れてくると、みなみさんのおまんこを舐めてるユナさんの元へ行き、優しくお尻を撫で回して、耳元で何かを囁くとペチンとお尻を叩き、猫シッポプラグを引き抜きました。「にゃん　。」と喘いだユナさんは横向きに寝転がり、股を開きました。その様子を見ていたみなみさんは、花さんにアナルを舐めさせたままユナさんの元へ行き、横になり股に顔を埋めました。ゆみなさんはユナさんにお尻を突き出すように横になると花さんの猫シッポプラグを抜きアナルを舐めしゃぶり、サークル上のシックスナイン（アナル舐め版）が完成するのでした。
「ジュルジュル。ミカさん　。また後で花さんとユナさんのところに来てくださいね　ジュルジュル。うんち連結交換療法でうんちが美味しくなってますから、ぜひ食べに来てください　。」
そう言いながらユナさんのアナルを舐めしゃぶるみなみさんが言うと、「さっきより美味しくなってるわよ　？ジュルジュル。花さんのアナルの臭いも味も、格別な高級品になったわね　。」とゆみなさんも花さんのアナルを絶賛しました。

美味しそうな4つの臭くてムチムチのデカ美尻を口とおまんこの両方からヨダレを垂らしながら見ていると「ミカさん、また後で花さん達の所へ戻ってきましょう　。きっと美味しいうんちを食べれま

すから　。次の患者さんの所へ行きましょうか　。」そう私に言って、床に座っている私を立ち上がらせるとぎゅっと抱きしめて、お尻を優しく撫でながら、アナルに指を入れてグチュグチュと慰めてくれたのでした。

京子さんはゆかりさんを搾乳室へ連れていきました。ゆかりさんは私に「また後で会いましょう　。ミカさんは恋人がいるとの事で恋人は諦めますが、母乳出せる雌牛ペットなら、ミカさんのそばにいられると思うんです。だから、退院したら可愛がってくれませんか？」と告げ、部屋を出ていくのでした。私は「是非に」と去り際に伝えると、去り際のゆかりさんはお尻を嬉しそうにプリプリ振りながら、アナルをクパァっとさせて、「アナルをもっと臭くて汚い美味しいアナルにして搾乳室で待ってますね　。」といいながら処置室を出ていくのでした。

吉野さんに連れられ、次の患者さんの元へ向かいました。もちろん吉野さんにアナルグチュグチュされながら歩いています。気持ちいいです。

続いて吉野さんに連れられたのは、美人看護師さんと3人の美女のもとでした。後ろ姿しか見えませんでしたが、腰はくびれお尻はむっちりしキリッとして、たくましい感じがする長身の方、私と同じくらいの背でやわらかそうなムチムチのお尻の女性、最後は少し背の低くて可愛らしいむっちりしたお尻の女の子でした。

吉野さんは美人看護師さんに話しかけ、私を紹介しました。

「みすずさん、こちら本日受診されたミカさんです。むっちりした巨尻美女のうんちを食べるのが大好きな方なんですが、美人ニューハーフさんのザーメンを飲むのも好きだったらしいです。」

みすずと呼ばれたその看護師さんもナース服の様ではありますがお

っぱいやおまんこ、お尻丸出しの制服を着ていました。おまんこには毛が濃いめに生えてましいた。

「あら、そうなんですね。はじめましてみすずです。」みすずさんは私に自己紹介をするとマン毛ボーボーのおまんこをクパァっと見せつけたあと後ろを向いて、お尻も突き出してアナルもクパァっと見せてくれました。アナルにも毛が生えていて、アナルの周りは茶色くうんカスが付いていました。毛の周りにうんちのカスがこびりついていて美味しそうでした。みすずさんのうんちも食べたいって思っていると、ふたなりっこの紹介をしてくれました。

「私はこのふたなりっこ達の精液の等級向上とおちんちんの大きさや食感、香りと味の調整を行ってます。あなたたち、ミカさんに自己紹介をして?」みすずさんのその言葉を聞き、私はおまんこの奥の疼きがますます強くなるのを感じました。3人の美女が振り向き、私は3人の女性のお股に美味しそうなおチンチンがぶら下がっているのをまじまじと見てしまうのでした。

1人目のふたなりさんは出るところは出て引っ込むところは引っ込み、巨乳で筋肉質なデカ尻の美人さんです。やわらかそうでありながら、お腹はやんわりと割れていて、足も筋肉質な太さです。肝心のおチンチンはそそりたつ美味しそうなバナナおチンチンで皮も被っています。剥こうと思えば剥ける仮性包茎チンチンなのかも知れません。名前はきみさんと言うらしく、私がおチンチンをまじまじ見ていることに気づくと優しくおチンチンをしこしこしてる所を見せてくれました。その手つきでパンパンに膨れていく大きなバナナチンチンを早くしゃぶりたいという衝動を抑え、残りのふたりのふたなりさんに目を向けていくのでした。

2人目のふたなりさんは筋肉質なきみさんとは真逆でほんわかやわ

らかそうな肉質の美人さんでした。ゆきさんというその人のチンチンはズルムケなチンチンで亀頭が大きく膨れたキノコ型のおチンチンでした。きみさんと同等の極太さ長さのあるしゃぶりがいのあるチンチンです。亀頭だけで口がいっぱいになりそうなチンチンを見ていた私にゆきさんも優しく微笑んでしこしこして見せてくれました。そして先端から滴るようなネバネバの液体を指先で拭ってはチンチンに塗ってを繰り返し、キノコ型チンチンは飴細工のようなてかてか光る美味しそうなチンチンへと変わるのでした。あ～、きみさんのチンチンもゆきさんのチンチンも美味しそう　。早くしゃぶって精液飲みたい　。もはや我慢の限界を迎えつつ残りの1人の1番可愛いふたなりさんへと目を向けるのでした。

3人目のふたなりさんはあどけない顔つきでも身長も低めでも巨乳巨尻、ウエスト極細な可愛い美少女でした。こんな妹がいたら毎日おまんこ舐めちゃうお姉ちゃんになっていたかもしれないと思いました。肝心のチンチンは勃起しても可愛いサイズで皮もかなり余る短小包茎チンチンでした。なつきさんというそのふたなりさんは、私がチンチンを見ていると、恥ずかしそうにしつつも、チンチンをしこしこしながら皮を一生懸命向いて可愛い亀頭を見せてくれました。その亀頭には正しくチンカスチーズと言うべき美味しそうなチーズが沢山こびりついていました。なつきさん、、、、ミカお姉ちゃんが綺麗にしてあげる

そんな事を思っていると、きみさんから自己紹介が始まって行くのでした。

「はじめまして、ミカさん。私はきみといいます。私のチンチンはバナナチンチンとみんなから言われています。この後ぜひしゃぶっていただいて、臭いと味については確認してくださいね　。私はアナルにチンチンを入れてうんちを出すのを手伝っ

てあげるのが好きなんです。うんちまみれのチンチンもぜひ舐めてくださいね　。」

「はじめまして、ミカさん。私のはキノコチンチンてみんないってます。私は浣腸したアナルにチンチンを入れて浣腸を奥へ奥へと押し込んであげるのが好きです。よろしくお願いしますね　。」

「はじめまして。なつきです。私のチンチン小さいですが、モニュモニュしてデザート見たいってみんな言ってくれます。チンカスもいっぱい出せますので、ぜひいっぱいしゃぶってチンカス食べて行ってください　。」

自己紹介を聞き概ね、私が思った通りだと思っていると、ふと気になったことがあり、みすずさんに聞いてみました。

「私、精液飲むのが好きなんですが、御三方は、精液はどれくらい出せるんですか？いつもニューハーフさんのザーメンを金タマ空っぽになるまで飲んでたんですが、、、」

するとみすずさんは丁寧に教えてくれました。

「ミカさん、チンチン舐めるだけじゃなくて精液も好きなのね　。いっぱい飲みたいなんてエッチで素敵　。まずはきみさんですが、一回に出せる量は５００ｍｌ位は出せるようになりました。ゆきさんも同じくらい。なつきさんだけは１０００ｍｌ出せて、回復も早いのよ。彼女達の精液は男性の精液とことなり、妊娠能力はないのですが、色や香り、粘り気やとろみ具合は同じかそれ以上で、栄養素が豊富に含まれているの。だから、飲んでよし、食べてよし、おまんこやアナルに中出ししてもよしなの。しかもオチンチンの開発次第で、どんどん精液量が増えるのよ　。」

可愛い美尻ふたなり美女3人の美味しそうなオチンチンを食べられるだけでなく、うんちもきっと美味しい　。さらに精液が５００ｍｌに１０００ｍｌは出ると聞いて、ニューハーフよりもザーメン飲み放題、うんち食べ放題ができる彼女達の方に興味が完全に移るのでした。

第２２話（後書き）

次回以降、ちんぽ実食です。

第２３話

私はまず、バナナチンチンのきみさんに近づくと、きみさんに挨拶してしゃがみこみました。
オチンチンに敬意を表し、正座をしながら、オチンチンを眺めました。吉野さんは正座した私に合わせてしゃがむとおまんこの下に指を入れて、オナニー出来ない私の代わりにおまんこをいじってくれるのでした。

そして、オチンチンを美味しく食べるための準備を整えると私はきみさんのオチンチンにキスをしました。そして、「早く食べて？美味しいザーメンいっぱい出せるし、臭くて太くて美味しいよ？皮を剥いたらもっと臭くて美味しいよ？チンカスチーズいっぱい溜めてるから、早くペロペロジュポジュポして？いっぱい食べて？」って私に語り掛けてくる美味しそうなバナナオチンチンを握りました。硬くてドクドクと脈打つオチンチン。手のひらからオチンチンの温かさと凶悪でありながら私を気持ちよくして、美味しいザーメンを飲ませてあげたいという優しさが伝わってきました。そしてやはり、美味しくオチンチンを食べるために気になるのは仮性包茎特有のチンチン臭や味わいです。鼻を近づけ、オチンチンソムリエのようにスンスンと香りを楽しみます。３日は入浴をせずにいたであろう蒸れた臭いにほのかに、オチンチンの付け根にちゃんとあるおまんこからのマン汁臭。おまんこの奥のアナルから美味しそうなうんち臭。そして、しこしことこすることで滴る先走り液のイカ臭い香り。やばいです。早くしゃぶりたい。仮性包茎の美味しそうな皮をチロチロと舌でなぶりながら、ムキムキして亀頭を出すと美味しそうな香りとプリプリの亀頭にザーメンチーズがほんのり付いていました。これは確実に美味しいやつです。名

付けるなら、バナナチンポのプリプリ亀頭にザーメンチーズと先走りソースを添えて。なんて言うオシャレなネーミングです。
もう我慢できずに私はきみさんにお願いし、しゃぶらせてもらうのでした。

「きみさん、あの、、オチンチン、、、すごく美味しそうないい臭いがして、亀頭もプリプリで、、、食べてもいいですか？オチンチン、、」

「ミカさん　。そんなに気に入って貰えるなんて嬉しいです　。いっぱい食べてくださいね　。」

「ありがとうございます　。では、いただきます　。ハム。レロレロ。ジュポジュポ。ジュポジュポ。ズズズ。レロレロ　。は～。美味しい　オチンチン美味しい　。臭くて大きくて硬い　。ハム。ジュポジュポジュポジュポ。喉奥まで　。ん～。ゴポゴポ、、オェッ、ゴポゴポ、オェ。は～は～。ジュポジュポ。ん　。しょっぱい先走りが垂れてきた　。ズズズ。ゴクン。美味しい　。」

「あん　、、、ひゃん　、、、お、、、、オチンチン、、、気持ちいい、、、、フェラ、、、おじょうずですね　、、、、」

「あら、きみちゃんそんなに感じちゃって　。ミカさん。フェラが本当にお好きなのね。感じるところをわかってらっしゃるようですね　。彼女達が射精する時１回のドピュンで大さじ２杯分は出るんです。この子達はイクと１０回位はドピュンて出せるんで、、いっぱい飲めますよ　。」

その貴重な情報をみすずさんから聞いた私はノーハンドフェラだけではなく、手も使って激しく快楽をきみさんに与え続けました。

「あ、、あ、、、、き、、きも、、、ちいい、、　。」

もっと気持ちよくしてこの可愛くて美味しいプリプリな亀頭のチンチンから美味しいミルクをいっぱい飲みたい　。

私はシゴいてる手とは反対側の手でアナルを優しく触るとゆっくりと中指を差し込みクチュクチュといじりました。するときみさんの直腸には既にうんちが溜まっていました。私はザーメンも飲みたいしうんちも食べたいため、ラストスパートの刺激を加えるのでした。

「あ〜〜、ミカさん、アナルいじっちゃ、うんちも出ちゃう、、、あ、あ、イク〜。ザーメンとうんち同時に出ちゃう〜。」

と、叫びながらきみさんは濃厚クリーミーのドロドロザーメンを吹き出し、うんちも漏らしながらイッたのでした。

私の口にドロドロの精液がドピュンドピュン出され、口から溢れそうになるタイミングで、ゆきさんがお皿を用意してくれました。うんちの方にはなつきさんがお皿を用意してくれて、ザーメンもうんちも一滴であれ一欠片であれ無駄にせずに済んだのでした。

ドピュドピュンと精液を出し続けるきみさんのオチンチン。口から離してなるものかと咥え続け、口から精液を溢れさせている私を見て、ゆきさんもなつきさんも、とても嬉しそうな表情をしていました。ゆきさんとなつきさんのオチンチンを舐める頃にその表情の理由がわかる気がしたのでした。

「は〜。、、、、ザーメンもうんちもいっぱい出せて、気持ちよかったです。ミカさん。私の精液とうんちはいかがですか?」

「ザーメンは真っ白でドロドロして、ちゃんとザーメン臭さがあるのに1回のドピュンで出る量が多いので飲みごたえがありますね　。うんちも香りがいいのは当然ですが、オチンチン同様のバナナうんちで、素敵です。味は、、、ハム。モニュモニュ。うん　。美味しいです　。ふふ。ザーメンにフォンデュして、、ベチョ。ハム。モニュモニュ　。ゴクン。ん～～　。ほっぺ落ちちゃいます　。ザーメンをオチンチンに塗り塗りして、うんちを口に入れてジュポジュポジュポジュポ。スコスコ。」

きみさんのオチンチンとザーメン、うんちがいかに素晴らしくて美味しいかを力説し、うんちを口内でオチンチンに塗りつけるおかわりフェラをしていると、ゆきさんとみつきさんはお皿を置いて私の顔にオチンチンを押し付けて来たのでした。

「「私たちのも美味しくしゃぶってください　。」」

もう、可愛い美少女チンポ尽くしの天国状態です。蒸れてイカ臭い美味しそうなオチンチンを可愛く押し付けてくる2人。でも、きみさんの美味しいバナナうんちチンポも美味しすぎて、口を離せずにいると、オカワリザーメンが発射され、口から溢れさせないようにうんちブレンドのザーメンをゴクゴクと飲み干すのでした。うんちが混ざることでさらに美味しさを感じるあたり、私は根っからのうんち依存性なんだと実感するのでした。

「あ、、また出ちゃっ、、、た　。すごい、、、ですね。口から、、、溢れさせず、、、ゴクゴク、、、飲んでる　。」

「ゴクンゴクン。ゴクゴクゴクン。ぷは　。美味しかった　。おかわりありがとうございます　。」

「ミカさんすごいわ　。あなたのオチンチンとザーメンに対する愛とうんちに対する食欲は目を見張るものがあるわね。後できみさんとゆきさんにサンドイッチでおまんことアナルをズブズブしてもらうといいわ　。」

みすずさんは私のフェラテクを絶賛し、３人のオチンチンの性感ポイントや舌触りがいい場所、美味しい部位、香りのいい場所など色々教えてくれたのでした。

私はデカチンも好きですが、なつきさんのような短小包茎チンポも好きだったりします。剥いてもなお余る美味しそうな皮、剥いて出てくるプリプリの亀頭、可愛いチンポが醸す凶悪なチンカス臭とねっとりと美味しいチンカスチーズ。食欲をそそります　。それになつきさんのロリっぽさに内包されるムチムチ感が私の食欲と性欲の両方を掻き立てているため、本命チンポと言ってもいいかもしれません。こんな妹がいたら、毎日フェラしてゴックンしたり、食べ物にかけて美味しく食べてあげたい　。うんちも毎日食べてあげたい。そんな姉妹愛のようよな愛情がなつきさんにたいして芽生えました。そんな感情を隠しつつ、私は今にも爆発しそうなゆきさんのオチンチンを食べるため、吉野さんにおまんこをいじり続けて貰いながら、ゆきさんの元へ這って移動し、正座してオチンチンにキスをしました。

吉野さんは絶えず私のおまんこを刺激してくれています。実はきみさんのオチンチンをしゃぶってる間も何回かイッてました。ゆきさんのオチンチンをしゃぶるために這って移動したのも気持ちよすぎて、ちょっと力が抜けてしまったがゆえでした。ゆきさんの元へ来ると、なつきさんが私の側へ近寄って来ると耳元で「マン汁ドバドバして美味しそうな臭いがします。飲ませてくれますか　？」とささやき、可愛く上目遣いで見つめてくるので、コクンと頷き、彼女

にマン汁を飲ませてあげることにしました。嬉しそうにニコッとした彼女は正座した私のおまんこの下に入り込んでおまんこを舐めしゃぶりました。吉野さんはマン汁がいっぱい出て、なつきさんが美味しいマン汁を飲めるようにアナルに指をズボズボ入れて刺激してくれたのでした。

私はなつきさんにおまんこしゃぶられ、吉野さんにはアナルを弄られながら、ゆきさんに挨拶をして、顔を見ながら、オチンチンをしこしこして、お話をしつつ、オチンチンを愛でました。

「ゆきさんのオチンチンいい臭いがしますね。どれくらい洗わずにいてくれたんですか?」

「3日くらいですね。入院患者さんはお尻の美味しい舐め心地のためにも肌のメンテナンスがあるので蒸れさせるのは基本3日なんです。ただ、最長7日間は無洗でいたり出来ます。入浴方法も色々あるんで、後で吉野さんに聞いてみてください。」

「そうなんですね?でも、すごくいい臭いです。太いし硬くて美味しいザーメンいっぱい出せるオチンチンってすぐにわかっちゃいました。」

「ありがとうございます。そろそろ食べてみますか?私お尻に顔を埋めながらしゃぶられるのが好きなんです　。うんちもいっぱい我慢してるんで、うんちの臭いも嗅ぎながら、しゃぶれると思います　。しゃぶってもらってる間にうんちを少しづつ出しますから食べながらしゃぶってください　。うんち食べながらのフェラお好きそうなので、いっぱいうんちとザーメン出しますから、美味しく召し上がってください　。」

そういうと、ゆきさんは私にムチムチのやわらかそうなデカ桃美尻を突き出し、うんち臭のする美味しそうなお尻を捧げてくれたのでした。

「私のお尻いかがですか？」

「スンスン　。うんち臭くてムチムチでタプタプしてるのに綺麗な形してて素敵です　。アナルにした入れてみますね　？んぇ～。レロレロ。んー　。うんちが近くにありましたよ　？。もう1回　。んぇ～。レロレロ。美味しい　。こんな大きなキノコちんぽ食べながら、こんな美味しいうんちも一緒に食べれるなんて最高です　。早速オチンチンいただきますね　？」うんちがあまりにも美味しすぎたので、私はうんちを待ちきれずチンポをしゃぶり出したのでした。

「もう、こんな大きくて臭いキノコチンポが目の前にあったら、食べたくなるに決まってるじゃないですか。ハム。レロレロ　。亀頭がプリプリしてて美味しい　。ハム。レロレロ。ジュポジュポジュポジュポジュポジュポジュポジュポ。スンスン。は～　。お尻に顔埋めるとうんち臭い尻肉に包まれて幸せです　。ジュポジュポジュポジュポ。先走り液も出てきたんで、うんちの味見もしてみますね。ジュポジュポジュポジュポ。ズブズブ。」私はオチンチンをしゃぶりながらアナルに指を入れてうんちに指を差し込み、うんちの硬さなどを確認しました。

「ジュポジュポジュポ。うんちの硬さはちょうど良かったです　。うんち、、、食べさせてくれますか　？ジュポジュポジュポジュポ。」

「いやん　。気持ちいい　。は～、は～、うんちも食べたいですか　？出しちゃいますよ。ふん、、、ブ～ムリムリ。あん、、少し出

して我慢するのきつい、、、けど、美味しく食べて欲しいから、、、頑張りますね　？」

ゆきさんが踏ん張りうんちが少しづつ出てきました。ジュポジュポと顔を動かしながらフェラをしてうんちのいい香りを堪能しつつ、程よくうんちが出てくるのを確認するとうんちをアナルから食いちぎる様にパクっと素早く口に入れるとそのままオチンチンフェラをするのでした。

「ジュポジュポジュポ。ん　。うんぴジュポジュポ。ハム。ジュポジュポ。」

「ミカさんの口のな中でカリにうんちが当たってる　。うんちが柔らかくて気持ちいい　。」

うんちを口に入れながらフェラをしていると先走り液や私の唾液、そしてオチンチンによるうんちクラッシュによりうんちがどんどんトロトロして天然のうんちローションへと変貌し、ゆきさんのオチンチンがさらに美味しく、さらに臭くなっていくのでした。

「あ、、うんちまた出る、、、ブリブリ。」

「ジュルジュル。ゴクン。　。は～。は～。うんちローション。美味しい　。うんちまた出てきましたね　。臭くて美味しい　。ハム。ジュポジュポジュポジュポ。」

私とゆきさんはうんちを出しては口に入れてフェラ、トロトロのうんちローションになったらゴックンしてまたうんちを咥えてフェラ、、、という流れを繰り返し、うんちも出し切って完食したところで、フィニッシュを迎えるのでした。

「気持ちいい、、、イク、、、イク　　」

ドピュドピュドピュドピュ、、、、

彼女がイクのと同時に私もイキ、マン汁を溢れさせました。それをジュルジュルと美味しそうに飲んでくれるなつきさんが可愛くて、もっとマン汁を飲ませてあげたくなりました。

私の口の中にゆきさんの粘っこくて臭い真っ白なザーメンが発射され、口から溢れさせまいとゴクンゴクン飲み干し、なつきさんがもっとマン汁を飲めるように私もザーメン補給をするため、追撃フェラを加えておかわりをねだるのでした。

第２４話（前書き）

ふたなりっこたちは精液が大量に出せる身体構造です。そこはまー、ご都合主義ですが、よりエロスな設定がいいかなと言うことで。

カニバリズム的な表現がありますが、実行はされません。
表現はオチンチンを切って食べたい。といった表現です。
ふたなりっこのオチンチンを切って食べるミカさんの描写を読みたい。という方はなんかしらメッセージください。

第２４話

「あ、あ、、、、、イッたばかり、、、、の、、敏感なオチンチン、、、、そんな激しくされたら、、、、またイッちゃう　。」

私はキノコチンチンの美味しいキノコ汁を限界まで飲み干したい気持ちと、キノコ汁を飲むことでマン汁を少しでも分泌し、なつきさんに飲ませてあげたい。そんな自分の欲と姉妹愛が合わさったドキドキ感で興奮が高まり、容赦なくキノコチンポを食べるのでした。

「ジュポジュポジュポジュポ。おいひ　。ジュポジュポジュポジュポ。だひへ？ジュポジュポ。シコシコジュポジュポ。」

「あ～　。出る～。ドピュンドピュンドピュドピュ。」

美味しいキノコチンポから美味しいザーメンがドピュドピュと出てきました。２発目なのに、量も味も変わらず濃厚なふたなりちんぽ。本当に切って食べたら美味しいのかしら。そんなカニバリズムな幻想を抱くほどに素敵なチンポなのでした。

「ゴクゴク。ゴクン。ゆきさんのオチンチンもザーメンもすごく美味しいかったです　。もっと飲みたいです　。」

「あん　。嬉しいです　。おかわりは後ほどお願いします　。私も気持ちよすぎて少し休憩です　。」

バナナチンチンとキノコチンチンを美味しくいただいたあとはデザートです。私は私のマン汁を美味しそうに飲んでくれる可愛らしい

なつきさんからおまんこを避け、なつきさんの体を起こしました。
そして四つ這いの体勢にさせると、可愛くて美味しそうなお尻を舐めすることにしたのでした。

「なつきさん　。可愛い　。ぎゅ　。」

「いやん　。ミカさん　。私なんて背ちっちゃいのにおっぱいとお尻がでかいし、でもオチンチンちっちゃいから、可愛くないよ～。」

「そんなことない　。可愛い　可愛い　。早くその可愛いお尻食べさせて　。四つ這いになって、お尻突き出して　。フリフリってお尻振って美味しそうないい臭いを振りまいて　？。」

「え～　？、こうかな？」

「可愛い　。すっごいお尻が美味しそうだよ　。スンスン　。臭くて美味しそうなうんちのいい臭い　。マン汁も垂れてる　。オチンチンは、、、ふふ　。まだ勃起してなくてふにふにのオチンチンだね　。は～　。このオチンチン可愛い　。皮の先端からすごいイカ臭いにおいがして美味しそう　。包丁で切ってそのままお醤油つけて食べたい　。」

「やん　。本当に切っちゃったらザーメン出せなくなっちゃう＾＾；。でも、ミカさんにならいいかな　。美味しく食べてくれそう　。」

そんなカニバリズム的な感想を言うと、なつきさんも食べて欲しそうに肯定的な感想を言ったなつきさん。

私がクリトリスやオチンチンカニバリズムに目覚めてしまう日がい

つか来るのでしょうか。。。。。来る気がして、少しドキドキしたのでした。

「それくらい可愛くて美味しそうないい臭いのオチンチンてこと　。ね～。アナル舐めてもいい?うんち出そうなら食べるからいっぱい出していいからね　?スンスン　。臭くて美味しそうなアナル、いただきます　。」

私はなつきさんの尻肉に挟まれながらアナルに舌をねじ込み、舌先に触れるうんちの感触と味を楽しみました。硬さはあれど舌でレロレロうんちを舐めるとほんのりとけだし、美味しさが舌に拡がりました。こんなに可愛いオチンチンをぶら下げたプニロリのプリプリなお尻に沢山詰まってるうんち。美味しくないわけがありません。なつきさんいわく、いつもうんちが入口で、固くなる上にでかくなりすぎて出ないことが多く、すずなさんに掻き出してアナルを吸い出して食べてもらっていたと、話の中で聞いていました。

私は舌でアナルをほぐすと指を入れてうんちを掻き出し、指についたうんちを舐めとっていくのでした。吉野さんは、私のサンドイッチ責めのため、きみさんとゆきさんのオチンチンを回復させてくれています。なつきさんのうんちを食べ終え、ザーメンタイムになったら、サンドイッチ療法を行って貰う予定です。楽しみ　。

なつきさんの直腸にあった大きすぎて出せない、固くてずっしりしたうんちを指で細かくし、さー。いざアナルから直食いです　。

「なつきさん　。程よくうんちが細かくなったから、アナルに口つけて吸い出しながら食べるね　?なつきさんも一緒に踏ん張って美味しいうんちいっぱい出してくれたら嬉しいな　。じゃー、食べちゃうね　?ハム　。レロレロ　。アナフおいひい　。ほんほはふい

はふへ　？ジュルジュルズズズ。」

私はアナルに口を押し付け、麺をすする時のようにズルズルとうんちを吸い出しました。歯ごたえがあって、未消化のものもあり、可愛いくて臭いお尻から食べるうんちは最高に美味しい　。

「ん～　。モニュモニュゴクン。ふふ　。いっぱい踏ん張ってくれたね　。臭くて美味しいうんちいっぱい　。もっと出してね　？まだまだ出るでしょ～　？ハム。ジュルジュルズズズ　。ん～　。もっほふんばっへ　。ペチン　。ズズズ。ふふふ。ふはふへおいひい　」

「にゃん　。にゃ～　。気持ちいい　。うんち、、うんちいっぱい出る～　。もっと、、もっと吸って食べてください　。」

私はプリプリの可愛い系ムチムチ美尻から出てくる臭くて美味しいうんちを心置き無く堪能し、ついにうんちを出し切ったため、お楽しみの皮プルプルの短小包茎チンポ汁を飲むために吉野さんにサンドイッチ療法の準備をお願いするのでした。

吉野さんの優しいねっとりフェラや、うんち臭いアナルでの顔面圧迫アロマテラピーケアにより、オチンチンを回復させたきみさんとゆきさん。私はゆきさんにおまんこをズブズブしてもらい、キミさんにはアナルをズブズブしてもらうことにしました。

ゆきさんは仰向けになり、オチンチンをムキムキさせドクンドクンと脈打たせていました。それを見た私のおまんこは早くもヨダレを垂らし、しゃぶらせてくれと私の本能に訴えかけました。

私はゆきさんのオチンチンをおまんこに入れるようにまたぐと、お

まんこが「このおチンチン美味しい　。腰動かしてフェラさせて　。」と言ってきました。く、、おまんこ、、、気持ちいい　。おまんこを気持ち良くするため、腰を動かし、パンパンし始めると、きみさんが私の顔の前におチンチンを持ってくると、フェラをさせてくれました。美味しい　。元気になったバナナチンチンの美味しいお汁をすすりながら唾液でネトネトにすると、きみさんは1度パンパン動かす私を制止し、私のお尻をクパァっと開くと、バナナチンチンをアナルに差し込むのでした。私のアナルも「このバナナチンチン美味しい　。もっと腰動かしてフェラさせて　。ザーメンいっぱい飲ませて　。」

そんな事を、私の本能に訴えかけてきました。私は改めてパンパン動かすとオチンチンもズブズブと動いてくれました。まるでロミオとジュリエットのように互いに求め合うように深くズブズブと差し込まれていくのでした。

おまんことアナルで美味しくオチンチンを味わっているのにお口ではまだ味わえていないため、私はなつきさんを手招きし、恥ずかしそうに隠している手を避け、ついに美味しそうな短小包茎チンポをヨダレを垂らしながら、美味しく食べるのでした。

「パンパンパンパン。おまんこ気持ちいい　。マン汁いっぱいたれてオチンチンが喜んでる　。もっと動きますね　？ミカさんももっと腰動かして　？」

「パンパンパンパン。アナルも気持ちいい　。オチンチンの根元にうんちが絡みついてきました　。美味しそうなうんちですね　。もっとパンパンしてうんちいっぱい出してくださいね　。」

おまんことアナルを責める2人は私のマン汁とうんちをいっぱい出してくれてます。後でいっぱい飲ませて食べさせてあげたいです　。

そんなことを思いつつ、私は美味しい包茎チンポをジュポジュポ食べ続けるのでした。

「ジュポジュポジュポジュポ　。ん～ズズズ。チュルン。ゴクン。は～　。勃起しないふにゃふにゃの可愛いオチンチン　。先走り液はしっかり出てきて、ちゃんとオチンチンが美味しい　。ジュポジュポしゃぶっても亀頭がすぐに隠れちゃって可愛いし、タプタプの皮、、スンスン。レロレロ。すごく臭くて美味しい　。皮がめくれたり戻ったりする度に亀頭の周りのチンカスが剥がれて口にチンカスチーズの臭い風味が拡がって、すごく美味しい　。チンチンの皮も柔らかくて舌を入れると気持ちいい　。肝心の亀頭もふにゃふにゃしてるとマシュマロみたいで美味しい　。ね～。なつきさんはオチンチンの勃起はスローペースなの　？」

私はふたつのオチンチンにパンパン責められながら、なつきさんにグイグイ質問をしていきました。

「はい　。私、エッチなことをいっぱいされたり見たりしながら、頭の中をエッチなことでいっぱいにしないと勃ちにくくて。あとは、嫌がってもお尻をホールドされてイマラチオで根元までジュポジュポされるとザーメンいっぱい出やすいんです。オチンチン勃ちにくいのってダメですか？」

少し切なそうに見つめるロリフェイスにキュンキュンしながら、私は彼女の素晴らしく美味しいオチンチンを再度褒め称えるのでした。

「そんなことないよ　。こんなにモニュモニュふわふわのオチンチン今まで食べたことなくて、すごく美味しかった。いっぱい私の口でモニュモニュして美味しいお汁出しながら、ザーメンいっぱい出せるように私がビンビンにしてあげる　。ハム　モニュモニュ　。

ん～。美味しい。ハム。ん～ジュポジュポ。ん～ジュポジュポ。レロレロ。」

「あん。気持ちいい。んにゃ。」

なつきさんのオチンチンをバキュームしながらレロレロ責め続け、段々と腰が逃げていく様に引けていきました。それと同時にオチンチンも少しずつ硬さを得ていき、美味しくなっていきました。もう、こんなに美味しいオチンチン離せない。逃げていく腰をホールドし、引き寄せるとイマラチオにてジュポジュポとなつきさんのオチンチンをしゃぶり続けていると、どんどん硬くなり、オチンチンの先端から美味しいエキスが出てきました。あともう少しで美味しいザーメンが飲める。そう思い、ラストスパートに入るのでした。

第２４話（後書き）

ミカさんは、将来的に看護師になって、ここで働く予定です。
ミカさんと香里奈さんは２人とも天才を発揮して、外国で飛び級し看護師になる予定。看護師になる頃には食糞好きなデカ尻レズビアン人口が爆発的に増え、美女、美少女のアナル舐めやおまんこ舐め処置や食糞や飲尿、マン汁飲み、足舐めなどを毎日のようにして幸せで大忙しな毎日を送る予定。看護師としての仕事の他、クリニック直営の食糞レストランの業務も行う予定。一般の食糞好きなレズビアン女性客に入院患者さんのうんちを美味しく振る舞うお仕事もする予定。プライベートでは、香里奈さんとゆかりさんとなつきさんの４人暮しをする予定。プライベートもうんちに母乳にザーメンが溢れる生活となります。

なお、カニバリズム描写に需要があれば、裏のミカさんも書いてみます。クリトリスのペニス化と食料化、クリトリスの再生医療の発達で、塗るだけで切断されたクリちんぽが１０秒程度で治る「クリナオール」と塗ると３分程度でクリトリスをデカチンポ化する「チンポナール」。女性から何度もクリトリス性ペニスを作り出すことが可能で、この薬の開発により血が滴る食チン好きなレズビアン女性も爆発的に増える予定。ミカさんのお家の４人（上記）も食チンが大好きになり、食チン用のペットを飼ってたりする。

クリニックではうんち、おしっこ、ザーメンを美味しく飲食しつつ、クリチンポを食べられたいレズビアン女性のため、美味しく調理して食べるお仕事もしつつ、
食用クリチンポを併設のレストラン客に振る舞うお仕事もしている看護師ミカさんを別作品として書くかもです。なお、女性はみなク

リトリスをペニス化して、麻酔なしで切断される、焼かれる。茹でられる。食いちぎられるといった苦痛激痛の感覚が大好きな究極マゾという設定です。需要があれば。

第２５話

私のおまんことアナルは、きみさんとゆきさんのふたなりちんぽを「固くて太くて　。ふたなりちんぽ美味しい　。いっぱいザーメン飲みたい　」と訴えながらマン汁やアナル汁をダラダラにしながら咥えていました。きみさんもゆきさんも私もお互いにおまんことアナルとオチンチンを求め合うようにパンパン動きました。そして私は２本のチンポの射精の予感を感じ始めました。この２本のチンチンもそろそろ美味しいザーメンを出してくれそうです。それに合わせて私は可愛くて美味しいなつきさんのチンポから美味しいザーメン全てを吸い出すため、気持ちよさのあまりに逃げようとする、なつきさんのお尻を鷲掴みにしてアナルに指を入れて拘束し、オチンチンを美味しく食べながらいじめ抜くのでした。

「いや、、気持ち良すぎちゃう、、、ダメ、、、ダメ～　。」

「ん～ん　。ジュポジュポ。ふんふんふんふんふん（美味しくなってきたんだから、逃げちゃダメ）。ジュポジュポ。ふんふんふんーん　ふふふふふっふふふんふんふふふう（美味しいザーメン出さないともっとオチンチン美味しく食べていじめちゃう　）」

私はどんどん固くなってオチンチンの出汁が滲み出して美味しくなってきたのを感じ取ると、オチンチンを口から離さないように口内を陰圧にして、バキュームしたまま話をしました。話をした際に舌の動きによりオチンチンが口の中で動き、美味しい汁がもっと滲み出てきました。そして、なつきさんの射精も近づいて来たのを感じました。

私のフェラテクに加え、意地でも美味しいオチンチンは口から離さない。そんなド痴女な私の様子がツボに入ったのか、なつきさんは息を荒くし、私の頭を抱きしめました。そんな様子を察知したみずさんは私に「そろそろイきそうね　。これに入れて一気に飲むのが美味しいのよ　」と、ビールジョッキを手渡してくれました。おそらく、ビールジョッキになつきさんのザーメンを出しなさい。ということなのでしょう。たしかにビールジョッキでザーメン一気飲みできるのは最高です　。

私はパンパンと腰を動かし、ジュポジュポと口を動かし、オチンチンをすすり、ついに奇跡的なタイミングで三本のチンポは同時に大量の美味しいザーメンを私に飲ませてくれたのでした。
そして、口から溢れる分を受け取るための器として、すずなさんから受け取ったジョッキを使って、大量のザーメンを確保するのでした。

「んにゃ〜　。イク、、イッちゃう　。う、、ドッピュンドッピュンドッピュン、、」

なつきさんは大量にザーメンを出せる逸材だと聞いていましたが、想像以上の逸材でした。私が飲んだ分を除いても、ビールジョッキになみなみと入りました。こんなにいっぱいのザーメンを飲めるなら、私はなつきさんのザーメンをスープにラーメンを食べたり、パスタに和えたりと、ホットケーキにかけたり、飲むだけではなく、食ザーを思いっきりしたいと思うのでした。

なつきさんのザーメンはしっかりザーメン臭さがあるだけでなく、少し黄ばんだ感じがしていて、その不潔さがさらに美味しさを底上げしていました。手掴みで掴めるくらいトロトロブリブリしていて、それだけで美味しいザーメンなのに、喉越しが最高です。ねっとり

絡みつき、鼻に抜ける臭さが美味しさを高めてくれます。私はなつきさんのザーメンをジョッキで一気飲みすると、オチンチンを優しく口に含み、「美味しいザーメンありがとう」と感謝の気持ちを込めたお掃除と「美味しいチンポをもっと食べたいです♥」。ザーメンももっと飲ませてくださいね」の気持ちを込めたおかわりフェラを行うのでした。

なつきさんのおかわりフェラを行うにあたり、私はより美味しくしゃぶれるように、なつきさんを仰向けに寝かせ、私も体勢を変えました。おまんことアナルで食べていた2つのオチンチンを引き抜くと、予想通り、大量のザーメンが吹き出してきました。それも予想していたのかすずなさんと吉野さんは私を四つ這いにさせると、みすずさんはおまんこを舐めて、ザーメンをすすり、吉野さんはアナルのザーメンをすすって飲んでくれました。

みすずさんはちょうど69の体位となり、その上になつきさんが横になりました。ちょうどみすずさんのおまんことなつきさんのオチンチンの両方を舐めやすいポジションを見つけたため、オチンチンの回復を待ちつつみすずさんとなつきさんのおまんこを舐めながら、ザーメンが溜まってくるのを待ったのでした。ザーメンが溜まるまでのふにゃふにゃオチンチンは可愛くて美味しかったので、おまんこを舐めつつ、何度もつまみ食いをしたのでした。

「ジュルジュル。ミカさんのおまんこ美味しい　。ザーメン注入してマン汁と混ぜて飲むと、すっごい美味しいわ」

「みすずさんも、分かりますか　？ミカさんのマン汁の美味しさ　。アナルも舌触りが良くて、うんちも美味しいんですよ　？」

みすずさんと吉野さんが私のおまんことアナルを美味しいと絶賛してジュルジュルと舐め啜ることで、私のおまんこはさらに嬉し涙を

流すようにマン汁を溢れさせました。ダラダラとタレてくるザーメンにマン汁がどんどん混ざっていくことで、みすずさんはさらに「美味しい　。もっと垂れ流して　。」といいながら、おまんこをなぶる様に啜るのでした。

みすずさんのいやらしいおまんこの舐め方により、感じてしまった私は「あん　、気持ちいい、、もっとおまんこ舐めて、ください、、、美味しいマン汁いっぱい出すので、、、もっと、、、あん　。」とエッチなおねだりをしてしまいました。そんなおねだりを聞いていたなつきさんも私のエッチなおねだりに反応して、可愛いオチンチンをピクピク動かしたのでした。

なつきさんのオチンチンは先程のフェラの際の私の唾液となつきさんのザーメンでねっとりベトベトで、ザーメンのいい臭いがします　。ますます可愛くて美味しそうなオチンチンがピクピク動いて、勃ってきました。まるで、「また、臭くて美味しいザーメンいっぱい出すから、もう1回食べてくれる　？」そう言っている様に見え、私は優しくオチンチンを剥き剥きして、プリプリの亀頭の美味しそうな臭いを嗅ぐと「なつきさんのオチンチン、臭くて美味しい　。皮も舌触りが良くて、チンカスもいっぱい食べさせてくれて　。皮を剥いて出てきた臭くて美味しそうな可愛いオチンチン食べていい？」そう言ってチュルンと亀頭を口に入れて、香りと舌触りを楽しみながら、軽く甘噛みをして、「このままこの臭くて美味しいオチンチンを噛みちぎって食べたらどんなに美味しいのかな　」なんてことを考えながら、なつきさんの可愛い悲鳴を聞き、私はおまんこをびしょ濡れにしてみすずさんにジュルジュル飲まれたのでした。

第２６話（前書き）

グロい表現がありますが、苦手な方はご注意。カニバリズムを連想させますが、実際にはありません。

第２６話

なつきさんのオチンチンは根元まで口に入れて味わうことが出来るため、私のためにあると言っても過言ではない美味しいフェラちんぽベスト１です。包茎に溜まるチンカスも臭くて美味しいし、プリプリの亀頭の舌触りも全てが最高でした。私は無心でオチンチンをジュポジュポとノーハンドフェラで美味しく味わいながら、再びなつきさんに逃げ場のない快楽を与え、ザーメンを吸い取りにかかるのでした。

「いにゃ～。気持ちいいよ～、、、出ちゃう、、、またいっぱい出ちゃうよ～　。」

「いっふふふふふん（いっぱい出して）？ふんふふんふんふーふんふふふふふふんふふ　（こんな美味しいチンポなのが悪いんだよ　）？」

そんなことをいいながら、可愛い仕草を見せるなつきさんに私はキュンキュンしてしまい、さらに苛烈にレロレロジュポジュポとチンポを責め、おかわりザーメンを射精させるのでした。

先程と同じ量とはいかなかったですが、十分に大量のザーメンがドプドプ出て来て、なつきさんとみすずさんのおまんこをザーメンまみれにさせ、２人のおまんこが美味しそうにドロドロしてくるのを見ると嬉しくてほっこりしました。

本当に素敵な美味チンポ　。私はザーメンを出し切ってビクンビクンしている可愛いなつきさんの股間についてる美味しそうなオチンチンに再び感謝のお掃除フェラを行い、「今度はおまんことアナルでも食べさせてね　」ってフェラをしながら口をモニュモニュと動

かしてオチンチンに語りかけ、労うのでした。

私がなつきさんのオチンチンを美味しく食べている間に、みすずさんと吉野さんも私のおまんことアナルからザーメンを美味しそうに啜り出し、私のおまんことアナルに出されたザーメンは飲み干されてしまいました。私はザーメンが不足した分なつきさんのおかわりザーメンを美味しく飲み干すのでした。

「ミカさんのおまんこ、ザーメンも混ざるとなお美味しいわ　。」

「うんちと混ざっても美味しいですよ　。」

「吉野さん、もっとミカさんが美味しいマン汁を大量に出せる様に雌豚調教をしてあげてください　。」

「はい　。診察を受ける際に伝えておきます　。」

みすずさんと吉野さんがそんな話をしていることも気にならないくらいに、私はなつきさんのザーメンにまみれたみすずさんとなつきさん本人のおまんこを舐め啜って、ザーメンとマン汁を一滴も残さないように飲み干したのでした。

きみさん、ゆきさん、なつきさんは職員や患者さんのための昼食にザーメン提供をしているため、お昼まで休憩をすることになりました。

私は3人とみすずさんに「また食堂で。」と言われ、お辞儀をして吉野さんとその場を離れました。吉野さんは私を誘導する時、必ずアナルに指を入れてクチュクチュしてくれるのでホント大好きです。

吉野さんが次に案内してくれたのは、おっぱい丸出しで、おまんこにチェーンのついたピアスをジャラジャラつけた黒いボンテージ風のナース服を着た、いかにもドSな風貌の看護師さんの元でした。その看護師さんはみゆきさんと言って、再生医療の研究をしているとのことでした。詳しいことは本人に聞くといいと、なんだか濁されました。みゆきさんの座っている席のデスクに乗り上下座してお尻をみゆきさんに向けている2人のブロンドデカ美尻さんがいて、アナルにポッキーを入れられているだけでなく、アナルの周りに針を刺されて血がたれている光景を見て、なんだか怖いのにドキドキしておまんこをジュンジュンしてしまいました。みゆきさんはブロンド美人さんのアナルからうんちがべっとりついたポッキーを引き抜き、美味しそうにポリポリと食べると、アナルに刺した針を抜いて、血を舐め取りながらアナルを舐めて、私に視線を向けると口を離し、口元から血を滴らせながら私に微笑むのでした。

「みゆきさん、この子はミカさんと言います。おまんこもアナルもとてもいい香りをさせて、マン汁もうんちもとても美味しいんです。きっとおまんこの流血処置も気に入ると思うので、みゆきさんの患者さんを紹介してあげてもいいですか?」

「あら、吉野さん。そうなのね。スンスン。確かに美味しそうないい臭い。失礼するわね。」

そう言って、椅子から立ち上がり私の元まで来るとおまんこに顔を埋め、匂いを嗅いだり、おまんこを舐めてすすったりした後、クリトリスを少し強めに甘噛みしてきました。
私は痛みの中にある気持ちよさを感じつつ、みゆきさんの顔をおまんこから引き離そうと手を伸ばしました。でも、気持ちとは裏腹に行動は真逆でみゆきさんの顔をおまんこにグイグイ押し付けたので

した。私の本心はクリトリスに与えられる噛みちぎられるような恐怖心と痛さの中にある快感を求めているのではないか。そんな事を思いながら、みゆきさんの甘噛みを求めたのでした。

「いや～、、痛いのに気持ちいい、、、。顔を離したいのに、離せないです、、、」

「ハムハム。ふふ。マン汁美味しかった　。クリトリスを噛み切って、食べてみたかったけど、ミカさんが怖がっちゃいそうね。」

「そ、、そんなの大丈夫なんですか（　；　；　）？」

私は驚きのあまり聞いてみました。すると、みゆきさんは丁寧に教えてくれたのでした。

「私は再生医療の研究にも携わっているのよ。実は女性の中には苦痛や痛みでしか、快感を感じれない人がいて、自分で乳首を切ったり、クリトリスを切ったりしているの。だから、たとえ切り取っても元通り再生するような薬の研究と開発を行っているの。それに、今女性の中には性的な部位のカニバリズムに目覚めている人もいて、過去にも当クリニックの女性でクリトリスを食べられたい女性とクリトリスを食べたい女性がいて、その人たちの治療を行う過程で、２４時間で再生させる薬ができたの。今はもっと再生時間を短くする研究やクリトリスをペニス化する研究を行っているの。もう実現段階だから、近い将来レズビアンの女性たちの間では女性のおまんこ肉やペニス化したクリトリス、乳首は食材として、扱われることになると思うわ。現に当クリニックの系列にそういう女性のためのレストランがあるのよ。興味があったら、場所を教えてあげるわ。」

と、衝撃的な内容を伝えると、みゆきさんはデスクでおしり突き出して土下座している2人をデスクの上で仰向けにして、私に2人のおまんこを見せつけるのでした。

デスクの上に横たわる2人はブロンドのハーフさんで姉妹のようです。みらいさんとみさきさんというお名前の2人はとても美人で、おっぱいもふわふわのマシュマロのように真っ白でした。ただ気になったのは、猿轡をつけているほか、おまんこに釣り糸の様な透明の糸が縫われていました。まるでアクセサリーのように綺麗に縫われた糸を見ていた私に、みゆきさんは再び説明をしてくれたのでした。

「この子達も苦痛や痛みが大好きで、特におまんこの小陰唇に針を刺すのが好きなの。針を刺すだけじゃなくて、縫い合わせてあげると気持ちいいんですって。」

そんな、拷問のような施術にむしろ快感を覚えている彼女達の悲鳴のようで嬉しそうな声にも聞こえる喘ぎ声に、私はゾクゾクし、彼女達のおまんこに針を刺してみたい気持ちが湧いてきたのでした。

第２６話（後書き）

次回はミカさんがブロンド美人２人のおまんこに針を刺すプレイが行われる。、、、、かも？

第２７話（前書き）

すこーしグロ展開が続きそうです。
血の味を覚えたミカさん。どんどん性癖をこじらせていきそうです。

第27話

みゆきさんは、みらいさんとみさきさんのおまんこに針を刺して、2人を鳴かせながら、私に説明してくれました。

「小陰唇に針を刺してあげて、少し針で小陰唇を引っ張ったりした後、針を抜いて血が滲み出てくるおまんこを舐めるのが私は好きなの。ミカさんも舐めてみるといいわ？みらいさんのおまんこに針を刺して見て？今私が刺したようにやってみれば大丈夫よ？」

そう言って、みゆきさんは自分で刺した注射針を抜き取り、血が滲むおまんこを舐めて、「美味しい　」と言い、妖艶な笑みを見せると、再び針を刺して、抜き取るとチューっと血を吸い出し、「ミカさんも飲んみて　？ホントに美味しんだから　。こうやって刺すと、みらいさん喜ぶのよ　？」と、おまんこに針を刺しながら、私にゴリ押ししました。そして私に新しい注射針を渡してきました。その注射針を求めるかのように、みらいさんは私に向けて、股を開きマン汁と血でドロドロのおまんこを見せつけるのでした。

「ほら、みらいさんが期待してる。注射針で刺して欲しいってマン汁と血がダラダラ垂れてるおまんこをミカさんに捧げてるわ。いきなり針刺すのはあなたも緊張するでしょうから、まずはマン汁が混ざった血を飲んでみて。おまんこに刺さってるその針を抜いて、血吸い出して舐めながらマン汁啜ってあげて？」

私はみゆきさんに促され、デスクの上で針の刺さったおまんこをさらけ出しているみらいさんのおまんこを針を避けながら、まずはぺろぺろ舐めてみました。マン汁はやはり誰のマン汁でも美味しいで

す。マン汁をキンキンに冷やしてビアガーデンでジョッキいっぱいに溜めて一気飲みしたいくらいです。ただ、みらいさんのおまんこは針が刺さっていて血が滲んでおり、マン汁に混ざる血の味が、マン汁の美味しさを引き立たせているように思いました。針を抜き取るとマン汁にさらに血が混じることで、さらに美味しさが増してまさに赤ワインと言わんばかりのエレガントな味わいでした。私は自分でも驚きましたが、血が混じるマン汁を美味しいと感じ、ぺろぺろ舐めていた私は針を抜き取り、おまんこ全体を口に含み、どんどんと勢いよく血を吸い出しながらマン汁を啜ったのでした。

「あ～～。あ～～　。」とみらいさんはヨダレを垂らしながら、喜んでいました。

「あらあら、ミカさん。そんなに美味しかった　？」

みゆきさんは私が貪欲に血を滲ませるおまんこを舐めて啜っていた姿を嬉しそうに見ていました。そして、みらいさんがイッてもおまんこを舐めている私のお尻を撫でながら、アナルに指を入れてクチュクチュ刺激すると、おまんこ舐めを中断させました。そして、吸血鬼のように血が付いた私の口元を舐めてディープキスしてきたのでした。

「チューレロレロ。どう　。美味しかったでしょ　？」

「はい　。自分でも不思議でした、、いけないことだって、思うのに体が求めてる気がして、、、無我夢中で飲んじゃいました。」

「あなたは幸せな苦痛を与えてあげられる側になれると思うわ。さ、次は実践よ　。この針で刺してあげて　。」

私はみゆきさんに手ほどきを受けながら、みらいさんのおまんこにブスブスと注射針を刺していきました。嬉しそうに悲鳴をあげるみらいさんと、それを横で羨ましそうに見ながら、可愛く唸って股を開いて、おまんこを突き出しておねだりしているみさきさんを見ていると、私もおまんこがキュンキュンして、いっぱい針を刺してあげたくなったのでした。

みゆきさんは私の手技を褒めてくれて、一人で思うようにやってみなさいと言ってくれました。私はみらいさんの小陰唇に針を刺しては抜いて、場所を変えては刺しては抜きました。その様子を嬉しそうに見ながら、私のアナルをクチュクチュとみゆきさんはいじり続けてくれています。そのアナルの気持ちよさと、みらいさんの嬉し泣きを見て、私のおまんこもマン汁をドバドバ垂らしながら、嬉し泣きをしたのでした。

みらいさんのおまんこがだいぶ血まみれになると、針を全て抜きました。血がぽたぽたと垂れているみらいさんのおまんこに私は口を近づけて、血が滴るおまんこを美味しく食べたのでした。

「レロレロ。チューチュー。ジュルジュル、、、、。」

「う〜〜　　。う、あーーー、、、」

私の猛烈なおまんこ舐めによって、みらいさんは股を開きながら、気絶しました。それでも、私はみらいさんのおまんこを血が止まるまで、食べ続けたのでした。

「みらいさん。気持ちよすぎて気絶しちゃったのね。起きるまで、休ませてあげましょうか。起きたら今度はアナルに針刺しして、血が混ざったうんちを食べましょうか。」

私は夢中でみらいさんのおまんこを舐めて血が混ざったマン汁を美味しく飲んでいましたが、おまんこだけでなく、アナルにも刺して、血が滴るうんちを食べるというみゆきさんの提案を聞き、私はみらいさんのおまんこから口を離しました。でも、まだまだ血が滴るマン汁を飲みたくて仕方がなかったため、私は今度はみさきさんのおまんこに針を刺してあげることにしました。新しい注射針をみゆきさんから貰い、おまんこを私に突き出しているみさきさんのおまんこに針を刺すと、みゆきさんは嬉し泣きしながら嬉ションをしたのでした。

第２７話（後書き）

次回はみさきさんを美味しく責めたあと、２人の血まみれうんちを美味しく食べるミカさんの回になるかもです。

第２８話（前書き）

針刺しプレイ

第２８話

「うーぅ、、うー　　」

みさきさんは猿轡からヨダレを垂らしながら、気持ちよさそうにおまんこを私に向けて震わせて、おしっこを漏らしました。私はすかさずおまんこに口をつけると一滴もこぼさないようにごくごくと飲み干しました。

みさきさんのおしっこを飲むことで、私のおまんこは火を吹きそうなくらいに熱く気持ちよくなっていました。その疼きを解消するため、私はみさきさんのおしっこを飲みながら、おまんこを指で慰めました。すると、みゆきさんはアナルをクチュクチュしていた指を抜き、うんちの付いた指を舐めると、おまんこをいじってくれたのでした。

「ミカさんのアナルをいじってたら、指がうんちまみれになったわよ？チュルレロレロ。ん～。美味しいうんち。それにミカさん、おまんこが真っ赤ね。みさきさんのおしっこ飲んで、おまんこ切なくなってしまったんでしょ。今からペニバンでおまんこを慰めてあげるから、もっとお尻突き出して、マン汁飲ませてくれる？」

私はみゆきさんの甘い誘惑に抗えず、マン汁がドロドロのお尻をみゆきさんに向けて突き出しました。

すると、みゆきさんはしゃがみこんで、私のアナルに顔を押し付けると、臭いを嗅いだり、うんちの味がするアナル舐めて楽しんだりしながらマン汁を飲んでくれました。

「スンスン。は～　。うんちの美味しそうないい臭い　。しかも、大きくて形もいい可愛いお尻　。美味しそう　。さっきまでアナルをいじってたから、うんちも直腸まで降りてきたわよ　？ジュルジュル。レロレロ。うんちが漏れそうなアナルは美味しいわね　。後で私も食べさせてもらうわね　。その前に、ミカさんのおまんこが充血して辛そうだから、早くペニバン挿入療法で治してあげるわね　。ミカさん、みさきさんの血液含んだマン汁を飲むと早くおまんこが良くなるから、いっぱい飲むのよ？ジュルジュル。マン汁も美味しいわ　。じゃー、ペニバン入れるわよ？」

みゆきさんは私のおまんことアナルをジュルジュル吸って舐めたあと、再び立ち上がるとおまんこにペニバンをぬるっと入れて、少しずつ動きながら、次第に速度とパワーをあげてパンパンと音をたてながら私のおまんこを快楽責めで破壊しに来たのでした。

「どう　？気持ちいいでしょ？このペニバンはバック専用の特注なの。おまんこを突くたびに、クリトリスに極小の針が刺さる様になってるのよ？蜂に刺された程度の痛みがおまんこを突かれる度に生じるの。おまんこの快感の中にクリトリスを刺される痛みが合わさって苦痛を快楽に感じられるようにできるのよ　。ほら、おまんこから血が出てきたわ　。美味しそうね　。」

私は思いもしない、恐怖を感じながらも、目の前の美味しそうな、みさきさんのおまんこをもっと舐めたい欲が勝り、パンパンと突かれる振動で揺れる指先で、みさきさんのおまんこに針を何度も刺して、唸りながら喜んでいるみさきさんの血まみれのおまんこを舐め啜るのでした。

パンパンと突かれる度に、私のおまんこは快感と痛みを同時に感じました。でも、不思議なことに、その痛みが心地よく感じてきて、

私は自らお尻をさらに突き出し、みゆきさんの責めを求めたのでした。

血まみれのみさきさんのマン汁を啜りながら、私のおまんこも血まみれになっていました。その心地よい痛みが、みさきさんのマン汁をさらに美味しく感じさせてくれたのでした。私はその美味しいマン汁をさらに美味しくするため、容赦なくみさきさんのおまんこに針を刺し続けたのでした。ヨダレを猿轡から垂らしているみゆきさん。そのヨダレをジュルジュルと私は吸い出すと、みさきさんのおまんこに垂らしては針を刺して、唾液とマン汁と血でドロドロにして、私はみさきさんのおまんこを美味しく食べるのでした。

私がみさきさんのおまんこ舐めを舐め続け、１０分はたったでしょうか。そろそろ、みさきさんもイキたくなったようです。おまんこをぷるぷる震わせて、可愛くうなり始めました。私もみさきさんと一緒にイクために、みゆきさんにお尻を突き出し、おまんこをさらに自分で追い詰めたのでした。

「ミカさん　。素敵だわ　。いいわよ　？自分から苦痛を求めるようにお尻を突き出して来るなんて　。もっといっぱいパンパンて突いてあげるわ　。イキなさい　？血液混じりのマン汁いっぱい吹き出してイッちゃいなさい　。」

「うーうー　、、、、」

「イク～　。」

私とみさきさんは、同時に潮を噴いて、苦痛を孕んだ快感に、２人して倒れ込むように体の力が抜けたのでした。

私は気持ちよすぎて脱力し、床に倒れ込みました。みゆきさんは私

を抱き支え、ゆっくりと床に寝かせてくれました。私はふわふわする意識の中、おまんこに手を伸ばすと、指先が赤く血で染まりました。そして、その指先をみゆきさんが愛おしそうに舐め、「美味しい　。もっとあなたの血を飲ませて　？」と言って、私の顔を跨ぎ、みゆきさんはおまんこを私の口に押し付けると、私の血まみれのおまんこに顔を埋め、舐め啜り出したのでした。

「ジュルジュル。美味しい　。あなたの血まみれのおまんこ美味しいわ　。ね～。ミカさん、私のおまんこ舐めながらアナルに指入れて　？ジュルジュル。指入れてアナル刺激してくれたら、うんち出せそう　。ミカさんに私のうんちを食べさせてあげるから、おまんこ舐めながら指でアナルを刺激して　？ジュルジュル。」

私はみゆきさんのおまんこを舐め啜りながら、アナルに指を入れました。すると、指先に既にうんちの感触を感じました。私は指を抜き取り、指に付いたうんちを舐めると、あまりの美味しさに、潮を噴いてしまったのでした。

第２８話（後書き）

次回はみゆきさんのうんちをぺろりと食べる予感。

第２９話（前書き）

だいぶ間が空きましたが、性欲が高まるとなんか書きたくなります。
逆に性欲が治まると別のことしたくなります。

第２９話

「ん～　。ジュルジュル　。お潮噴いちゃって、そんなに気持ちよかったの　？」

「はい、、気持ちいいし、みゆきさんのうんちが美味しくて、、、」

「そう　。ミカさんが刺激してくれたおかげで、私ももう、うんち出そうだから、食べてくれる？」

「はい　。開けた口を押し付けて待ってますね　。あむ　。」

「行くわよ　。うーん、、、ブーー。ブリブリブリブリ。ブチュブチュ～。」

「あむあむ　。モニュモニュゴクン　。あむ　。モニュゴックン。すごく美味しいです　。」

「良かった　。もしかしたら、私が飲んでる血液とマン汁の成分がうんちの味を良くしてるのかしら　。もっと出そうだけど、まだ食べられる？」

「はい　。もっと食べたいです　。」

「ふん、、あ～。出る、出るわ。今度は下痢っぽいかも、、ごめんね、、、、、ブリュブリュブリュ。美味しく飲んでね　。」

「あん　　。ジュルジュルジュル。みゆきさんの下痢うんちドロドロで濃厚クリーミーで美味しいです　。ジュルジュルゴクン。」

「良かった　　。ミカさんの血まみれおまんこも美味しいわよ　？じゃー、私が研究開発した薬でおまんこ治してあげるわね　。」

そう言って、私の顔から下痢うんちが滴るお尻を離して立ち上がると、太ももに下痢うんちが滴って、美味しそうなお尻を私に見せつけながら、
机の引き出しから軟膏を取り出すと、再び私の顔を跨ぎ、下痢うんちまみれの美味しそうなお尻を私の口に押し付け、舐めさせてくれている間に、おまんこに軟膏を塗ってくれるのでした。

この軟膏はクリナオール軟膏と言って、おまんこや乳首を切断しても瞬時に再生させることができる画期的な軟膏との事で、私の血まみれのおまんこがみるみるうちに治っていくのでした。

「すごいです。痛気持ちよかったおまんこの痛みが消えて気持ちよさがさらにました気がします　。」

「そうでしょ　？この軟膏はクリトリスを切断することが好きなレズビアン女性のために開発した薬なの。何度も切断する快感と切断される快感を味わえるようにしてあげたくて。」

「そんなプレイが好きな女性がいるんですか?」

私は驚きみゆきさんに尋ねました。みゆきさんは私の顔にうんち臭くてムチムチのお尻を押し付けたまま質問に答えてくれました。

「ええ、さっきの姉妹もそう。苦痛でしか、快感を感じられなくなってしまってるの。だったら、何度も苦痛を感じられるようにしてあげたくて。」

「そうだったんですね。」

私は、少し怖いと感じていたみゆきさんの根本にあるのは、本当は優しさなんじゃないかと思い、みゆきさんに尊敬の念を抱いたのでした。

「さて、そろそろみらいさんとみさきさんが目を覚ましてる頃だわ。あの2人のうんち、食べましょうか　？すごく濃厚で美味しいわよ　？」

そう言って、私の顔から再びお尻を離し、立ち上がると、私を起こしてくれました。

私は立ち上がってみゆきさんのデスクを見ました。みらいさんとみさきさんは土下座姿勢で私達の方にお尻を向け、うんちの頭が出かかったアナルをさらけ出して、ヒクヒクさせながらお尻をいやらしくフリフリさせていました。うんちの美味しそうないい臭いを漂わせながらうんちを我慢してくれていました。私に食べさせてあげたいという2人の優しさなんだろうと思い、感謝の気持ちを込めて2人のうんちが出かけてるアナルにキスをしたのでした。

キスをした唇にうんちがほんのりくっつき、私はそれを舌でぺろりと舐めて、2人のうんちの味見をしました。みゆきさんの言う通り、他の患者さんや吉野さん達と比べ、濃厚な味がしました。おそらく、血の味なのかもしれません。癖になりそうでした。

「ミカさん、２人がああやって、むっちりしたデカ尻をフリフリしてる時は、痛みを欲してるんです。今度はアナルに針を刺して血が混ざったうんちを食べて見てくださいね　。こうやって、この辺に刺すといいわ　？」

そういって、みゆきさんはみらいさんのアナルに針を刺しては抜いてを何回か繰り返し、私に針を手渡しました。私はその針でみらいさんのアナルを何度も刺し、血まみれにしていきました。みらいさんのおまんこから嬉し涙のマン汁が溢れ、アナルから垂れるちと混ざり今にも、垂れて落ちそうになっていました。私はおまんこに口をつけ血の混じったマン汁を舐めうっとりした気持ちですすり続けたのでした。

みらいさんのアナルが限界を迎え、ついにうんちの頭が出始めました。

「ん～レロレロジュルジュル、ん～～、うんち出てきた。」

私は急いでおまんこから口を離し、アナルからブリブリと出てくるうんちを直食いしたのでした。

「はむ。」

太くて程よい硬さの良質なうんちなのに、血液と混ざり濃厚な味わいがして、嬉しくて思わず笑っちゃいました。

「ん～　。ふふふ　。モニュモニュゴックン。おいひ～　。もっほはひへ　？」

美味しいうんちを食べ幸福度が高まりました。私はもっと出して欲しくて、みらいさんのお尻をペチンペチンと強めに叩き、みらいさんのM心を刺激してあげました。

すると、嬉しそうにピクンピクンとお尻を揺らすと、さらに「ブリブリ」と音をたて、ドロドロうんちを出してくれました。私は口を押し付け、チョコレートミルクをゴクゴクと飲み干したのでした。

第２９話（後書き）

続きはまた気長に待ってくれると嬉しいです。

第３０話（前書き）

別の作品に繋がるエピソードがチラリ

第３０話

私はみらいさんのアナルを口で覆い、ブリブリと出されるクリーミーなうんちを喉を鳴らしながら飲み続けました。みらいさんのドロドロうんちは香りと喉越しがよく、夏のビアガーデンで乾杯をしながら飲みたいと思えるクリーミーで濃厚なうんちでした。

「ゴクン。ゴクン。ゴクン。ジュルジュル。レロレロ。美味しかった　。」

美味しいうんちを出してくれたみらいさんのアナルを労うように舐めしゃぶり、もう出ないことはわかりつつ、おかわりができないかと思いながらアナルに舌を執拗にねじ込んでアナルを舐めしゃぶりました。みらいさんのアナルを綺麗に舐め、うんちの一欠片逃すことなく舐め取り、飲み込みました。

うっとりと美味しいうんちの余韻に浸りつつ、隣でアナルをヒクヒクさせながら待っているみさきさんのアナルからおならの音が聞こえ、こちらも限界が近づいてることを知り、注射針でアナルをプスプス刺して血を流すと私は口を開けてみさきさんのアナルを吸い、うんちを啜るのでした。

おならと一緒にジュルジュルと出てきたみらいさんと同様の濃厚な血の味がするウン汁をすすり、ながら舌をねじ込んで便意を促しました。アナルから滴る血を舐め取りながらムリムリと音を立てて出てきたバナナうんちを頬張りモニュモニュと咀嚼して飲み込み、私は血が滴るアナルの美味しさに目覚めたのでした。

私はみさきさんのアナルに口を押し付け、うんちを吸い出して頬張りながら、少しでも良質のうんちを食べようとお尻を叩き、みさきさんを喜ばせてあげました。真っ赤に染まったみさきさんのお尻は本物の桃のように見え、アナルも甘く感じるだけでなく、マン汁を溢れさせ、もっと叩いて欲しいと自らお尻を突き出しプルプル震わせるみさきさんの姿を見て、私のおまんこが再び疼くのでした。

私がみさきさんのうんちを立ちバック体勢で美味しく食べている間に、私のおまんこがジュルジュルになっていることに気づいたみゆきさんは私の股間に頭をくぐらせて、おまんこをジュルジュルと舐め啜ってくれました。

「ジュルジュル。ミカさんのおまんこから美味しそうなマン汁ジュースのいい匂いがして、舐めたくなっちゃったわ　。ジュルジュル。クリトリスもビンビンね　。ジュルジュル。ね～ミカさん。あなたさえ良ければだけど、クリトリスがすごく美味しそうだから噛み切って食べてもいいかしら　？後でクリナオール軟膏塗れば治るから。ジュルジュル。ね？いいでしょ　？」

私は驚き、恐怖心を感じながらも、私のおまんこは「クリトリスを噛み切って食べて欲しいです　」と、私に訴えかけていることに気づくと、私はみゆきさんに「優しく噛み切って美味しく食べてくださいね。」と伝え、うんちを食べながら、クリトリスをみゆきさんの口へ押し付けて、迫り来るクリトリスへの激痛と快楽の予感にドキドキするのでした。

「ジュルジュル。美味しい　。ジュルジュルレロレロ。ん～　、クリトリスがビンビンになってきた　。そろそろ、食べ頃よ？美味しそうなクリトリス　。食べちゃうわね　？いただきます　。」

そう言って、みゆきさんは私のおまんこに歯を当て、ゆっくりと力を入れて確実にクリトリスを噛み切って行くのでした。私はその痛みを感じながらも目の前の美味しいお尻の穴を舐め啜り、うんちを食べることで、激痛が快感へと変化していくのでした。

「はむ。グニグニ。ん～　　。ジュルジュル。噛み切れたわ　　。血がいっぱい　　。止血するために飲んじゃうわね　　。ジュルジュル。レロレロ　　。クリトリスがぷりぷりで美味しいわ　　。」

私のおまんこからドクドクと熱い何かが流れ出る快感を感じつつ、私の血を美味しいといいながら飲むみゆきさんにドキドキしながら「もっとクリトリスを食べられたい」という感情が芽生えるのでした。

私のおまんこを止血しながら舐めてくれていたみゆきさんは私のおまんこから口を離し、クリナオール軟膏を塗ると噛み切ったクリトリスを舌に乗せて私に見せつけました。それを再び口に入れると口の中で飴玉のように転がして楽しんだ後に咀嚼して飲み込み、「美味しかった　　」と微笑むのでした。その妖艶な笑みは私のおまんこをさらにマン汁でドロドロにさせるのでした。私の再生したクリトリスを優しく触りながら、みゆきさんは私のおまんこの濡れ具合を確認すると、「痛かったかしら　　？でも、おまんこは気持ちいいって思ってくれたみたいね　　。マン汁がドロドロしてるわ？」と言って、再び私のおまんこに口をあてがい、ジュルジュルとマン汁を啜ると、「おかわり　　」と言って私に苦痛という最高の快感を与えてくれたのでした。

第３０話（後書き）

次回の構想はまだないんで、また気長にお待ちください。

この作品の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
https://novel18.syosetu.com/n7466kp/

食糞クリニックの食糞物語

2025年9月13日02時34分発行